

ので本源は印度傳説であらうし、織女星の傳説とも、亦浦島の傳説等とも交渉があるが、主人公の名前だけが一寸似てゐるだけで、しらす物語とは別種のものである。

註 松浦佐用姫に關しての石化傳説の成立は、鎌倉末か室町初期らしく、平安時代末乃至鎌倉初期まではまだのやうである。少くとも室町時代には流布した確證が存する。(詳細は拙著羅生門の鬼所收石になつた佐用比賣參照。)

## 桂中納言物語

上

源氏物語蓬生卷に

月入方になりて西の妻戸のあきたるより、障るべき渡殿だつ屋もなく、軒のつまも残りなければいと花やかにさし入りたれば、あたりく見ゆるに、昔に變らぬ御しつらひの様など、忍ぶ草にやつれたる上の見る目よりは、みやびかに見ゆるを、昔物語にたふ毀ちたる人もありけるを、思し合はするに同じさまにて年古りにけるも哀れなり。

と見える。空だのめ同然の源氏の御光來の嬉しい日をば、何時までも落膽せずお待ち信じて、獨り淋しく末摘花の君が昔ながらの家居を守りつゞけてゐた甲斐あつて、今日しも蓬生の露を分けて訪ひ寄つたその男君の眼に映つた此の常陸宮邸の荒廢ぶりを敍した一節である。

右の文中の「たふ毀ちたる人」が古來諸家によつて問題にされてゐる。本文の異同からと、それに關聯して、内容の説話の出所に就いてである。本文の異同とは「たふ」が青表紙系では「たふ」又は「たう」で、河海抄には定家卿本は「塔」とあり、或本には「堂」と書いた

のもあるとしてある。河内本では「丁」(河海抄や花鳥餘情抄出の河内本本文も尾州家河内本も「丁」となつてゐる)とあるそれである。出典として古くから擬せられてゐるのは、第一は毛詩や史記に見える顔叔子の故事である。即ち謹嚴な顔叔子が獨居してゐた夜、暴風雨で隣家が崩壊したので、その家主のこれ亦寡婦が叔子の室へ逃げ込んだのを、掩護してはやつたが終夜燭を點して置かせ、火種が盡きさうになると、自分の家屋を破毀して焚き盡さずして、且まで續けたといふ支那説話で、奥入にも之を引き(但し叔子を女と誤認してゐる)、河海、花鳥にも載せ、弄花、細流等も繼承してゐる。併し河海にはこの話では塔でも堂でもないから「室」を「堂」と誤寫したかとも疑つてゐる。が、建物の破毀されたといふ點にだけ類似があるのみで、末摘花の廢室と殆ど何等の交渉も無い。(弄花や細流は「實法」なる人、即ち實直な人といふ意味で、主人公の性格の上に共通性を認めることによつて、辛うじて兩者の關係を肯定しようとしてゐる。)だから契沖、眞淵、宣長等新註の諸家は一齊にこの顔叔子故事説を無用の牽強として斥けてゐる。代りに契沖は親が功德の爲に建てて置いた塔或は堂を、不孝の子が毀却したといつた内容の昔物語でもあつて、それに比すれば末摘の姫君が親讓の邸宅を大切に護つて來た心根を殊勝と源氏が感じたといふのであらうと推

測し(源註拾遺)、眞淵(新釋)も大體之を踏襲した。源注餘滴の石川雅望だけは義楚六帖所引の莊嚴論に見える毗伽城の佛爪塔の傳説、外道の言に惑はされて、王がその塔を破壊しようとする、一夜にして四十里も離れた地へ移動してゐたといふ佛説などを参考に擧げてゐるが、勿論確論は樹てゐない。

契沖説も一應領けるが、全然の想像にとゞまる。眞淵のやうに、

此の事何ばかりのいふかしき事もなきを

と簡単に片附けるのは早計に過ぎよう。

そこで河内本の「丁」である。これも「伐木丁々」のやうに「たう」の音がないことはない(青表紙の「たう」又は「たふ」と、借字或は誤讀などいつた關係でもあるのかどうか、それはわからない)。普通の慣例に隨へば「几帳」を「木丁」と書くと同じで「帳」と讀むべきであらう。すると「帳」を「ばち」なら「昔物語の類話が一箇存するのである。これも實は夙く河海抄(卷七)に、顔叔子の故事と並べて掲げてあるので、

或説、かつらの中納言物語といふものあり。源氏物語以往の物なり。彼云、貧家の女大納言、几帳の帷子をきぬに縫ひて着たる事あり。若し此の事歟。「丁」こぼつとは破ル義也云々。

といふのである。花鳥も兩説を未決定のまゝに置き、唯この桂中納言物語の方が未

摘花の場合に聊か似よつてゐると附言してある。新註では獨り玉の小櫛の宣長が之に絶對支持を與へてゐる。雅望は前掲佛説の外に、漠然と古い散佚物語の内容かとも言つてゐるのは、此の物語をも含ませるつもりかも知れないが、眞意は判明しない。

「同じさまにて年古りにける」とある文に觀ても、窮迫の生活を比較したのであらうから、顔叔子の牽強よりはこの小大輔の彌縫の方が類似率は確に多い。眞淵は河海の記事から推して、此の物語は源氏以後の作であるから引證に値せぬと目してゐるやうであるが、縦ひ桂中納言物語の作品としての出現は源氏以後でも、その内容を成す傳説所謂昔物語(古代小説の意味にも用ゐられるが、源氏物語中の用例によつても古傳説昔語りなどの意味にも無論用ゐられてゐる。)をまで、直ちに源氏以後の發生と即斷する必要はない。或は昔語りとしては源氏以前から行はれてゐたかも知れぬのである。

下

桂中納言物語の存在は河海・花鳥の外、風葉集によつて知り得られる。即ち同集に原書所載の歌二首を抄出してある。その一首は卷二、春下に

關白中將に侍りけるとき左大臣のかつらの山莊の花見にたち入り侍り

けるにもなひてあるじは都に侍りければつかはしける

かつらの兵衛佐

よそ人もうつろふ花を惜しむ宿にいかにかかるゝあるじなるらむ

他の一首は卷五、秋下に

かつらに住み侍りけるころ月を見て

かつらの關白北方

秋はなほかつらの里のさびしさを人こそとはね月はすみけり

とあるそれである。色葉集(卷三、物語名)には、桂中納言物語の名は見えない代りに、「かつらのみや物語」の名が出てゐて、古物語類字鈔(黒川春村)の「加部」には、「かつらの中納言物語」の次にそれを引載して、

按に、上のおなじ物語なるべし。

と推斷してある。無論共に散逸書としてゐる。物語書目備考(伴直方)の「加部」には、「かつらの宮(君)ものかたり」として、その所出を風葉色葉と註記してあるから、これは風葉抄出の原據の物語と、色葉所出のそれとを同一書と目した事が明らかである。而も同じ「加部」の末項に重ねて、「かつらものかたり」の名目を掲げて、これには所據が註記してない。「かつらの宮ものかたり」とは別書と目した爲か、或は疑問のまゝ、別に掲出して置いたものと思はれる。但し風葉抄出の二首を含む物語原名が桂中納言物語

といふのであつたか(類字鈔にはそれを河海花鳥所見の同書と簡単に認定してあるが、その理據は何等説明せられてゐない。)或は桂宮君物語といふのであつたか乃至桂物語といふのであつたか、それともそのいづれでもあつたか、又はそのいづれでもなかつたか(少くともそのいづれかではあらうと推測せられ得るが)嚴密には確證が無い。物語ぶみの數々(狩谷多佳子「物語書名寄(岡本保孝)等にも」かつら中納言物語の名で、風葉と河海とを所據として出してあるが、類字鈔と比して格別異見は認められない。(名寄の方は國朝書目類字鈔物語ぶみの數々等に併せ據つたものである。)朝倉氏の日本小説年表の「散逸物語目録」の「か部」に「かつらの宮物語」(色葉集)、「かつら中納言物語」(風葉集)と二書別目に掲出してあるのが、現在のところではやはり無難な取扱ひであらうし、又「かつらの兵衛佐」かつらの關白北方といふ詠み人の稱呼以外、詞書にも宮とも中納言とも呼ばれた名稱が残つてゐない以上、風葉抄出の物語原名を「かつら物語」として置くのが(中野莊次氏著、校本風葉和歌集「物語別風葉和歌集」寧ろ穩當な態度であるかも知れない)。

さて桂物語と桂宮物語と桂中納言物語との各二者、或は三者が異名同書か、或は三者共各別書か、そのいづれであるに關らず、又風葉集所載の二首の原據の書名が桂中

納言物語と呼ばれたものでは縦しなかつたと假にしても、桂中納言物語といふ古物語が四辻左大臣の頃までは或は傳存したらしいし(若し河海から引用したのでなかつたら、一條禪閣の眼にも觸れたのかも知れぬが、花鳥の記述文面が簡単に過ぎて明確には推斷し難い)、傳存の有無は措くも、少くともその内容の一端が知られてゐた事だけは確であると言はねばならぬ。而も管見のおよぶ所、その以前にも以後にも同書に關した記述が他に見當らぬのは如何にも残念であり、近古の中葉頃は夙くも散佚して跡を留めなかつたものであらうか。

然るに此の稀觀書らしい(?)ものを偶然瞥見する幸運を恵まれ、而も詳細に調査する違なくして、その唯一度の機會を永遠に逸し去つた懺悔譚を此處に報告せねばならない。想起すれば今から約二十年程以前、大正四年頃であつたかと記憶する。卒業論文の資料として義經物を捜査する傍ら、近古の小説類をも涉獵してゐた當時、一日大橋圖書館で藏書目録を検索してゐる際、不圖桂中納言物語の題名に遭遇した。珍しい散佚書名なのに狂喜したが、當面の義經物の資料蒐集が主目的であつたので、これに割愛する時間の餘裕が十分に無く、ざりとてそのまゝにして置くのは惜しいし、取り敢へず、借覽して冒頭の數行だけノートに書き抜いてだけ置いた。上中下合

一冊の袋綴古寫無畫の横本で、普通の御伽草子式の體裁であつた。題簽には「桂中納言物語」とあり、内題は無く、所藏主の

伊勢國伊射和  
里御民吉葛圖  
竹川政胖圖書

の朱印が捺されてあつた。そして起首の文は、

しも月のついたちころ残れるきくの宴きこしめしけるにみこたち上達部參給博士文人等めしてふみつくらせ御あそひなとし給大將のおとよのみ参り給はず

といふのであつた。唯何となく此の文詞は何かで讀んだことのあるやうな氣がしたので、その後若しやと思つて照合してみると、果して豫想した通り、それは宇津保物語菊の宴卷の冒頭に——最起首の「かくて東宮」の一句を缺いただけで——全然吻合したのであつた。(宇津保には嵯峨院卷の中部にも殆ど同文の箇所があつて、菊の宴卷のそれと重複するが、その方の文詞とは稍小異があつて、同一とは見做し難い。)そこで又興味は大に削減せられて、何人かが宇津保の零卷或は菊の宴卷の抄寫、乃至はそれを御伽草子風に改作したものに、さかしらに「桂中納言物語」の題名を附してしま

つたものでもあらうと考へ、そのうちに暇を獲て通讀し、場合によつては複寫して置きたいと、念頭には懸けながらも、卒業後は匆忙の生活が引續いて意に任せぬうちに、大正十一年病に斃れて愈、機を失ひ、快癒したらば今度こそはと、褥中に期待してゐると、大震災である。かくて竟に問題の「桂中納言物語」の正體眞偽の程を確め得ることなくして、これを祝融氏の手に委し了つたことは、今も時折回憶に還つて來る恨事の一である。

或は併しやはりそれは宇津保の一卷若しくはそれに准ずるもので、恐らく散佚古物語の「桂中納言」とは似ても似つかぬものであつたかも知れない。さうであつても、それと確知し得るだけでも徒勞でなく、多少とも同學をも後生をも益せぬではなかつた筈である。ましてその冒頭が宇津保に借りられ、或は初めの數葉に宇津保が誤つて綴入れられてでもあつただけで、主部分は一「桂中納言」乃至その古物語の輪廓を推知し得るやうな手懸りを含む小冊子でもあつたのだつたら、遺憾は更に倍大するを否み難い。燒失前に讀破した篤學の士があつて、幸に示教を蒙ることが出来るなら望外の喜である。更に他に何處かに眞正の此の散佚古物語が傳存してゐるやうな事があるならば、一層それは、中古乃至近古物語研究の上にも、源語解釋の參

中世文學

隨筆と物語

考としても、資することが尠少でないであらうと信ずる。

## 義經記論

### 第一章 義經記の性質(一)

義經記は一般に文學史上軍記物の名目の下に取扱はれる慣行になつてゐる。併しながら之を他の同じ稱呼によつて總括せられてゐる一群の作品の個々、即ち保元物語・平治物語・平家物語・源平盛衰記・太平記等に較べてみると、それらの何れもが、本格の所謂戰記物語であるに對して、稍異色を呈してゐる觀がある。

已にその性質の一斑が題名によつても示されてゐるやうに、保元・平治の二書は、保元の亂と平治の亂との由來經過、平家盛衰記は源平の盛衰榮枯、太平記は南北朝の治亂興廢、太平記理盡抄の記載に従へば、安危由來記、國家治亂記、國家太平記、天下太平記と書名が四轉した由であるが、何れも略同様の意味を題號に與へようとしてゐるやうである。之をそれ／＼敘述してあるが、義經記は即ち戰爭を主題とする作ではなく、個人英雄の傳記を主題とする一種の歴史小説といふ方が當つてゐる。この點曾我物語と共通した性質を有してゐて、二者が併稱せられる主なる理由の一も亦此處に

存する。たゞ、後者が十郎・五郎兄弟の傳を敍するのを目的としてゐることは論なき所であると同時に、全篇の重心が敵討といふ特異の題材に置かれてある——復讐譚といふ角度から物語られた兄弟英雄の武勇傳である、そして又、これを外にしては曾我物語は無いと言つてもよい——のが顯著な特性で、この屬性の方がおのづから英雄傳としてよりは、より多く曾我物語の存在を價值づける決定的な意味を要求してゐることも明らかかな事實である。義經記も亦、直接には父兄の間接には源家祖先の名譽の爲に、大復讐戰を遂行した大孝子源九郎義經の事蹟を物語る作ではあり、此處でも亦おのづから曾我物語と相通するものを有してゐるのではあるけれども、作者の描出の意圖なり、全説話の中心なりは又明瞭に、復讐乃至はその具現としての戰鬪行爲といふ如き方面に存せずして、不遇の英雄の浪漫的な一生に涙を灑ぐといふに在る。即ち所謂「判官最良」で——この心持は無論曾我兄弟に對する曾我物語作者に於ても看取せられ得る。「判官最良」は取りも直さず「曾我最良」でもある所以である。が、敵討をクライマックスとする曾我にあつては、「曾我最良」の集注は寧ろ父を討たれた幼時から、復讐遂行に至るまでの道程に存し、十八年が天つ風所謂優曇華の侍待ち得て、多年の本懐を晴らした瞬間に、讀者の緊張も兄弟と共に満足の中に弛む他面に

於て、更に天満大自在天神の例に倣うて、富士の裾野に復讐神としていは、れるに結末する(曾我物語 卷十一)に至つては、愈、豫期以上のめでたい果報であらねばならぬ。然るに義經記の場合は、曾我物語に於ける復讐に恰當する平家討滅の功業は却つて省筆せられ、それ以後に屬する義經主従の流離落魄の窮狀に、「判官最良」は惜しみなく同情の誠を致すこと、前半生の幼少時代に對するよりも猶遙に哀切甚大なるものがあるばかりでなく、擱筆に際して、背信忘恩の秦衡兄弟の誅伐に抑へ難い餘憤の一端を霽らして纔に慰めてゐる(義經記 卷八)だけで、伏見の雪路の艱苦から高館の自刃に至るまで、終始運命に殉じた一個の悲劇人義經として之を憐み之を讚へ之を追慕してゐる。否、義經記作者はその「判官最良」を義經記八卷に於て注ぎ注いで猶盡くさず、無限に永遠に書後にまで餘溢せしめてゐるのである——そして甚だ面白いことに、此處に見る所のものは、全く平家物語作者の平家一門に對する所のものそれである。

前掲五種の軍記物は所謂本格の戰記物語であるに相違ないが、その中で、平家だけは又特に独自の品姿を有してゐることは注目に値する。即ち平家物語は源平盛衰記と同材を取扱つてはゐるけれども、そして盛衰記は平家の異本の一種と見られ得べきものではあるけれども、嚴密に言へば、後者の如く、源平の盛衰を忠實に記述して



行くといふよりは、平家一門の榮枯の跡を偲んで、轉變の夢に驚き、蘇々の怨を傾けて、  
淨く美しい挽歌の一曲を奏せようとするのが作者——一個人たると合成人たると  
に關せず——の志願である。而してそれ故に、軍記物中最も浪漫的傾向の濃い、最も  
藝術味の豊かな國民詩として中世文學に光を放つてもゐるのである。獨り盛衰記  
と對比しての問題に止まらず、主題に對する如上の態度の意識的に明確な——他の  
四種でも臚げには、又統一されないまゝの散漫な姿では看取出來る場合は屢、あるが  
——事が確に平家のみが際立つて他の四種から自身を抽んでさせ特異づけてゐる  
點でもある。これと同じ姿態を他の軍記物——曾我物語をも含めて——に見ずし  
て、獨り義經記に於て觀ることは、そして尙言はば、軍記物中本格でない義經記に於て、  
軍記物の典型であり上乘たる作品の特質の唯一の相似を見出すことは、頗る興味深  
い現象と言はねばならない。この意味からすれば、義經記こそは本格的でこそなけ  
れ、軍記物としての平家物語の直系且無二の様式繼承者であり保持者であると言ふ  
べきである。畢竟題材上平家と義經とは相似た運命の所有者であるからでもある。  
が、猶それは之を取扱ふ作者の動機及び態度の問題でなければならぬ。

平家物語は結局、平家といふ一族——集團として、集合人としての平家といふ悲劇

的人物——の傳記を綴つたものと觀られ得るが故に、斯うした觀點からは、初めに義  
經記の軍記物としての異色として指摘した點が、少しく狹められて來なければなら  
ぬのである。が、これは軍記物といふ形態を取る一群の作品が——特に平家物語は  
——單なる戰爭文學ではなくして、一面平安時代に華咲いた抒情物語と及びその  
後を承けた歴史物語の各の流れを汲み、各の構成要素をも併せ含んでゐる文學史的  
現象からも亦極めて自然に説明せられ得る筈である。抒情物語の完成者源氏物語  
は光源氏の君の一生並びにその後日物語である。その前身として抒情物語の發足  
の片歩を踏み出したとも言ひ得る伊勢物語は昔男——在原業平を主體として之に  
類化せられた幾多の准業平から形づくられてゐる合成人——の生活斷片の連續的  
話譚である。歴史物語の粹を成す榮華物語及び大鏡は、集合人としては藤氏個人と  
しては特にその中の御堂關白道長の榮華の來由と現實とを語るのがその目的であ  
る。表現に於て形態に於てと共に、題材の掴み方、主題の狙ひ處に於て、これらの勝れ  
た先進文學が又同じくその傳統を追ふ次代の勝れた文學に範を垂れる事の自然さ  
可能さは容易に理會出來る所である。當代に傑出した萬人の讚仰理想の指標たる  
人物を傳すること、それは先蹤無くとも範例なくとも、原始時代以來、何時の世にも何

れの國でも、英雄主義的な民衆の間にあつては等しく翹望せられる所である以上、我が國でも已に古事記がこの傾向の中に育ち、爾後、その主人公が實在したとせぬとに關らず、勝れた文學が屢、斯うした姿に於て成生して來て居ることは怪しむべきではない。但、如上の物語の主人公等は何れも成功者であり強者であるが、平家と義經とは失敗者であり弱者である點に、一般の同情と感傷とが色濃く集められるのである。義經は——殊に史上の義經は——日本有數の武人であり軍將であること言を俟たぬが、義經記の主人公としての義經は、甚だしく理想化せられ貴族化せられ可憐化せられ、史人としての彼の積極的な男性的半面は、時折片鱗を閃かすだけで、愈、稀薄となり、消極的な優美な女性的半面のみが一層誇張せられて、殆ど平家の公達と相擇ばざるものがある。否、光源氏在中將とすらさまで大なる距りを見出し得ぬ如き觀がある。義經記を繙讀して受ける全體的な感じの貴族的、浪漫的、抒情的、感傷的であることが、又他の軍記物の何れによりもやはり最も平家に近接してゐる。そしてこの抒情味物語文學味といふ點でも、他面、同時代の御伽草子と連接してゐると共に、亦平家を通して伊勢、源氏等平安抒情物語の世界への憧憬を多分に示してゐる。而して史實と詩想——抒情文學的空想との渾化といふ點に於て、平家が孰れかと言へば

猶史實的成分が克つてゐるに比して、これはその逆であることが一層軍記物から再び抒情物語への還元の道を辿らうとしてゐることを語つて居り、此の路程に於て合流してゐる抒情物語直系の御伽草子と共に、物語文學——小説の傳統維持者としての職能を完全に分擔し、同時に歴史記述者の領域へも跨つて、此處に新しき文學様式たる歴史小説の一體を創り出さうとしてゐるのが、義經記独自の異色と言ふことが出来る。

更に軍記物の形態的特性として——伴隨的な要素ではあるが併し甚だ顯著な——その何れにも通有し、流布本會我物語の如きはその極端な形にまで進展して、之を一個の傳記體小説として觀る場合は殆ど救ふべからざる混亂煩雜にまで陥つてゐる彼の挿話的説話の羅列から、義經記のみが殆ど解放されてゐると言つてもよい程にこの伴隨物が清算せられてゐる珍しい事實は、愈——そして作者がそれを意識してゐたとすれば尙更——兎も角纏つた一個の傳記體の歴史小説への進展乃至完成を促してもをり、又既にその域へ一步を踏み込んでゐると觀られ得べき注目すべき現象として指摘されねばならぬ。若し作者が十分に意識してゐなかつたとしても、軍記物としての斯様な特異の所産の出現は文學史的に閑却され得ない、否甚だ示

峻に富む事象である。そして此處でも亦御伽草子の長篇とも言ひ得べき意味に於て、物語文學の亞流として、且軍記物中での最も小説的形態を備へた純小説史の系列に就くことを憚りなく主張してゐる唯一の作品として、御伽草子と共に、そして御伽草子よりは却つて物語文學の規模と高級さとを傳へてゐることによつて、中世小説を代表してゐる。即ち他の軍記物と撰を異にし、併稱せられる曾我物語とも亦おのづから同じくない境地に住するところに、やはり義經記の獨特の價値が存する。

尙、上述の如く義經記は軍記物の中で平家に近似した姿態を有つてはゐるが、その文學値に於ては平家に比肩すべくもない。思想に於て表現に於て、その稚拙さといふ點から觀れば、平家よりも亦他の軍記物よりも寧ろ御伽草子と幸若舞曲の詞章とに類型を見出すのである。(曾我物語に就いてもこの點共通した所があるが)

松明を振つて差上げ見ればいつくしきとも斜ならず。南都山門に聞えたる兒鞍馬を出で給へることなれば、極めて色白く、鐵黒に眉細く作りて、衣被き給ひけるを見れば、松浦佐用姫が領布振る野邊に年を経し、寝亂れて見ゆる黛の鶯の羽風に亂れぬべくぞ見え給ふ。玄宗皇帝の代なりせば、楊貴妃ともいひつべし。漢の武帝の時ならば、李夫人かとも疑ふべし。(中略)ともかくても遁るまじと思召し、太刀を抜き、多勢の中へ走り入り給ふ。八人は左右へさつと散る。由利の太郎これを見て、女かと思ひたれば、世に剛なる者にてありけるものとて、散々に斬合ふ。一太刀にと思ひて、もつて開いて

むずと打つ。大の男の太刀の寸は延びたり、天井の縁に太刀打貫き引きかぬる所を、小太刀を以てちやうと受止め、弓手の腕に袖をそへてふつと打落し、返す太刀に首打落す。(義經記卷二、鏡の宿にて吉次宿に強盗入る事)

そのかたち、容顏美麗にしていつくしく霞に匂ふ春の花風に亂るゝ青柳の糸たをやかに、秋の月に異ならず。(中略)横笛櫻重ねの薄衣に紅の袴のそばをとり、身を押しつけて出でたる形、嬋娟として楊貴妃李夫人もこれにはいかで優るべきとぞ覺えける。(御伽草子、横笛草子)

いつしかもとより御手らし、かゝりの松に押當てて、ゆらりと張つて素引して、鐵の御てうづを打番ひ、的には御目をかけられず、歡樂して居たりける別府の臣に目をかけて、大音上げて仰せけるは、如何にや九國の在應等、我をば誰れとか思ふらん。古へ島に捨てられし、百合若大臣が、今春草と萌え出づる。道理に委せて我や見ん。非道に委せて別府や見ん。如何に〜とありしかば、大伴諸卿松浦黨一度にはらりと畏まり、君に従ひ奉る。(舞曲、百合若大臣) (義經記所述と同材の舞曲、折の文、が一般相似してゐること勿論である。)

三者の文を取出して、斯う並べてみただけでも、その一斑は窺知せられるであらう。加之、題材に於ても是等と共通したのもあり、殊に幸若舞曲四十四番(山中常守、相模川を加算す、若しくは四十六番、又幸若舞入、昔舞も舞曲ならば四十八番、且この四舞、何れも判官物語は之に準ずる曲である。)、中判官物はその三分の一以上の十五曲(四十八番とすれば十九曲)といふ壓倒的勢力を占めてゐる。それら同材のものに就いて比較すれば、一層義經記との關係の親近さが會得せられる。例へば辨慶物語と卷三の辨慶生立の物語、又舞曲高館と卷八の衣川合戦辨慶立往生の條との如きそれである。後の例の如き

殆ど相互間の隔たりを識別するに苦しむほどである。(僅に舞曲の方が一段と語り物化せられて動的描寫である位の相違に過ぎない。)そしてこの角度から眺められても、史實の精緻主義を追はずして、英雄傳を主題とする稗史小説的形態を取つて進まうとする軍記物の成長過程に於ける義經記の役割が、矛盾なく容認せられねばならぬであらうと共に、それが一轉再轉しての淨瑠璃歌舞伎の劇詩的方向への展開が胚胎してゐる事由をも併せて看取せしめられるであらう。

唯如何にも義經記は讀者をして御伽草子のなるものと、舞の本的なるものと、何れをも感じさせるものがあることは否定し難いものではあるが、さればとて又御伽草子ほどの思ひきつた幼稚さ、ナンセンス味にまでは墮してゐない。文舞の本ほどの粗雑さ、超現實味にまでは到つてゐない。即ち物語文學的抒情味に於ては御伽草子と、英雄的氣分と敘事的表現とに於ては幸若舞曲と、それと流通し合つてゐることは、確であるが、同時に人物の性格描寫の如き、御伽草子よりは少くとも統一性と具象性が認め得られ(辨慶の豪快さとユーモラスな性格の如きは一貫してゐ、鬼一法眼や勸修坊の人物も躍如としてゐる。)且、小説的構想と統制、及び潤ひと氣品と非不自然さが、舞曲に於けるより又勝つてゐる。而も右の意味に於ける兩者に對する優越さの度合は、亦曾我物語よりも一歩進めてはゐようとも決して劣るものではないと言ふを憚らない。

## 第二章 義經記の性質(二)

斯く義經記は軍記物としては少しく類を異にした作品であり、少くとも本格的な軍記物でないことは前述の如くであるが、然らば截然として他の軍記物から區劃せらるべき界線を具有してゐるかと言ふに、必ずしも然らずと答へざるを得ないのである。餘程特異な位置には在るが、全然獨立した別箇の文學形態として觀るには、猶質量共に異常性に於てかなり不足してゐる。前章に言及したやうに、思想に題材に表現に、互に相通し交錯してゐる甚だ親近な同時代の他種文學が存せぬではなく、殊に幸若舞曲の判官物とは全く同母兄弟の如き關係にすら立つてゐる感が興へられるのではあるが、猶何れの點からしても、最も近接した最も相似性の多分な文學形態を求むれば、やはりそれは軍記物の他に出不いといふことに歸着せしめられるのである。

軍記物の中でも、義經記が平家に追隨してゐること、そしてそれは題材と、それを取

扱ふ作者の態度とに於て特にさうであることは既に論じた。八巻立ての構成は寧ろ獨特で(この點流布本曾我物語の方が平家を模してゐる)あるが、敘述の様式、表現の傾向は、明らかに平家を粉本としてゐる。例へば

本朝の昔を尋ぬれば、田村・利仁・將門・純友・保昌・頼光・漢の樊噲・張良は武勇といへども名をのみ聞きて目には見ず。目のあたりに藝を世にほどこし、萬事の目を驚かし給ひしは、下野の左馬頭・義朝の末の子源九郎・義經とて、我が朝にならびなき、名將軍にておはしけり……

といふ書起しは、言ふまでもなく平語の卷首の例の「祇園精舎の云々」の名文に於ける遠く異朝をとぶらふに、秦の趙高・漢の王莽・梁の周伊・唐の祿山、これ等は皆舊主先皇の政にも不從樂しみを極め、諫をも不<sub>レ</sub>思入、天下の亂れん事をも不<sub>レ</sub>悟して、民間の憂ふる所を不知りしかば、不久して亡じにし者共なり。近く本朝を窺ふに、承平の將門・天慶の純友・康和の義親・平治の信頼、これ等は奢れる事も猛き心も、皆とりくたりしかども、間近くは六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申しし人の有様傳へ承るこそ、心も詞も及ばれね……

の體を學んだものである。而も平家と同文になつてゐる盛衰記を除き、他の軍記物を取つて檢しても、それごとく、

爰に鳥羽禪定法皇と申し奉るは……(保元物語)

竊に惟れば、三皇五帝の國を治め……(平治物語)

爰に本朝人皇の始神武天皇より九十五代の帝……(太平記)

それ日域・秋津洲は、これ國常立尊より事起り……(曾我物語)

といふ形に始まり、その何れもが少くとも直接には平家とは近くなく、寧ろ別様の形式を踏まうとしてゐる。この點でもやはり義經記は平家の唯一の模倣者だと言へる。

併し、義經記が徹頭徹尾平家に倣ひ、或は平家をのみ摸してゐるといふのではない。盛衰記にも平治物語にも密接に交渉を有してゐる。<sup>(註一)</sup>尤もこの兩書は平家と共に素材上既に義經記とはおのづから不可分離の關係に在るものであるから、それは寧ろ自然且必然のことであるかも知れないが、太平記にすらも亦詞章上のみならず構想上にまで往々範を仰いでゐるところがあると推斷したい條章を含むのを看過することは出来な<sub>レ</sub>い。<sup>(註二)</sup>

既に題名の義經記の記は、即ち盛衰記の記であり、太平記の記である。即ち題名だけは却つて平家には採らずして非平家型の二書の先蹤に就いた如く見える。但し、若し義經記の原名乃至は別名が判官物語、或は義經物語と呼ばれたのであつたら、愈々題號まで平家と同型で且物語文學の繼承者として名實共に相應することになるのであるが、併しながら又、義經記の記は盛衰記・太平記の記である——嚴密には二書の

場合と全然は同義ではないから、或はさうでないとも言はれ得るけれども、二書の題號に影響せられてゐるであらうことも確信出来るし、従つてその意味で斯く言つても許されるであらう——と同時に、少くとも寧ろ將門記の記でもあることを併せ考へれば、この題名にも必ずしも興味ある問題が含まれてゐるわけではない。そしてこの意味でも此の名が原名であると然らざるとに關せず、この名で通行してゐるといふ處に又、所謂軍記物中、義經記がやはり獨自さを——と敢へて言はぬまでも或異色を——有つといふことになるであらう。(新撰曾我記の名稱などは、勿論義經記から影響せられて移生したものだと思はれる。)

文體上詞章上から觀ては、又何としても義經記は軍記物の範疇に入れなわけに行かない。縦ひ本格の軍記物に對比して、一面御伽草子に、他面幸若舞の本に近接して來てゐる傾向を濃厚に見出すとはいへ、やはり全體を通じて、又部分的の文勢筆致に於ても感じ得られるところのものは、疑ひもなく軍記物のスタイルである。そしてこれは曾我物語も亦同斷である。前掲卷首の文の如く、意識して平語に摸した部分とは言ふまでもない。

大衆これを見て、覺籠こそ受太刀に見ゆれ、いざやおり合ひて助けんと言ひければ、尤もさあるべしと

て、おり合ふ大衆は誰々ぞ、いわう禪師常陸の禪師、主殿助やくいのかみかへりさかの小聖、治部の法眼、山科の法眼とて、屈強の者七人をめきて懸る。(卷五、忠信吉野山の合戦の事)

鏝に矢の立つ事數を知らず。折りかけくしたりけれど、鏝を倒さまに着たるやうにぞありける。黒羽・白羽・染羽、色々の矢ども、風に吹かれて見えければ、武藏野の尾花の秋風に吹き靡かるゝに異ならず。(卷八、衣川合戦の事)

等の文例を見ても、亦

……熱田の宮を過ぎ、なにと鳴海の鹽干潟、三河國八橋を打越えて、遠江國濱名の橋をうち眺めて通らせ給ひけり。日頃は業平・山蔭中將などの詠めける名所々々は多けれども、牛若殿、打解けたる時こそ面白けれ思ひある時は名所も舊跡も何ならずとてうち過ぎ給へば、宇津の山を越え過ぎて、駿河なる浮島が原にぞ着き給ひける。(卷二、遮那王殿元服の事)

唯假初の旅だにも、主の跡は物憂きに、飽かて別るゝ面影を、何時の世にかは忘るべきと歎けど、甲斐ぞなかりける。剛の者の癖なれば一筋に思ひ切りて、やがて御供してぞ下りける。下野の室の八島をよそに見て、宇都宮の大明神を伏拜み、行方の原にさしかり、實方の中將の、あたり野邊の白眞弓、押張り素引し肩にかけ、馴れぬ程は何れをそれん、馴れての後はそのぞ悔やしきと詠めけん、あたり野邊の野邊を見て過ぎ、淺香の沼の菖蒲草影さへ見ゆる淺香山、まづ(經物語)馴れにし信夫の里の摺衣など申しける、名所々々を見給ひて、伊達の郡阿津賀志の山越え給ひて……(卷二、伊勢三郎義經の臣下に初めて成る事)

の道行文に見ても、直ちに首肯せられ得るであらう。英雄的男性的な豪壯な描寫と

しては、忠信最期の條（義經記卷六、忠信最期の事）と、村上義光が大塔宮の御身替に討死する條（太平記卷七、吉野城軍事）とを對照するとよい。抒情的な優美感傷の方面としては、靜御前との吉野山別離（義經記卷五、判官吉野山に入り給ふ事、靜吉野山に捨てらるゝ事）及び鶴岡の舞樂（同卷六、靜若宮八幡へ參詣の事）と、妓王妓女（平家物語卷一、妓王）或は小督（同卷六、小督）とを併讀すれば足りる。

平治物語で有名な光頼參内の條の左衛門督光頼が弟の別當惟方との對話、

「さて主上は何處におはしますぞ」「黒戸の御所に」「上皇は」「一本書所に」「内侍所は」「温明殿に」「劍懸は何處に」「夜の御殿に」と左衛門督次第に尋ね給ひければ別當漸くぞ答へられける。（卷一、光頼參内事并許由事、清盛六波羅上着事）

は簡潔快適さと、生動した白のやりとりを端的に示す軍記物の行文の特徴的好例證として屢々指摘せられるが、義經記の

「義經に心許しもせざりけるござんなれ。まことは法眼に子は幾人有ると問ひ給へば男子二人、女子三人、弟二人、家にあるか」「はやと申す所に、印地の大将して御入り候」「又三人の女子は何處に有るぞ」「所々に幸ひて、皆上臈婿を取りて渡らせ給ひ候」と申せば、婿は誰「嫡女は平宰相信業の卿の（北の）義經物語」方、一人は鳥洞の中將に幸ひ給へると申せば、何條法眼が身として、上臈婿取る事過分なり……」（卷二、鬼一法眼の事）

といふ御曹司と法眼の召使幸壽前との問答も、亦全く同じ様式である。更に曾我物語にも、頼朝の箱根參詣に敵祐經を知らうとして、御供の人々の姓名を一々箱王が介錯の僧に問ひ聞く條に、

「君の左の一の座は誰ぞ」「彼こそ秩父の重忠よ」「右の一の座は如何に」「これぞ三浦の義盛よ」「さてその次は誰人ぞ」「里見の源太と言ふ人よ」「さてその次は」「豊島の冠者と云ふ人なれ」「只今もの仰せられしは誰やらん」「これこそ當時聞ゆる梶原平三景時とて、侍共の鬼神に思ふ者よ」「又馬手の方に少し引退きて、半裝束の數珠を持ちて、香の直垂着たるは如何なる人にてあるやらん」「彼こそ御分達の一門、伊東の主工藤左衛門祐經よ。御分の父河津殿とは從兄弟なり、御前去らぬ切者とぞ教へける。（卷四、箱王祐經に遣ひし事）

の文があるのを發見する。斯うした軍記物の特色ある手法（これは或は一面謠曲などの劇文學的手法の移入であらうと察知し得られるのであるが、兎も角軍記物の寫實的動的な手法と認められて不都合はない）に恰當するものを有してゐる點でも、これらの三書が互に類縁をなす同部屬的作品であることは否まれないであらう。

更に前に義經記は戦争を主題とする——これがその名稱の由つて來る所である程、軍記物の重要な特性である。——作ではないと斷じたが、それは戦争そのものを作の中心として取扱つてゐないのを指示したので——特に平家討伐の戦争記事の如きは全く略せられてゐる。原形からさうした姿態であつたらしく讀まれるか

ら若しさうであつたとすれば、その部分は平家盛衰記等に詳記せられてあるからこれを意識的に省いた(兩書の記事が豫想せられてあることも確である<sup>(註六)</sup>)と思はれ、これが作者が軍將としての義經を傳する意圖を有してゐなかつたに因由するものとして、所詮戦争を最重要視してゐないことは愈々肯定せられねばならない。——あるけれども、且、これは他の軍記物全般に就いても、嚴密に論ずれば、必ずしも常に戦争のみに最も重點を置いてあるとは言ひ難いものがあり、それが即ち軍記物が單なる戦争文學でないといふ本質的の説明にも觸れて來る點でもある。平語に於て特にさうであり、義經記が又それに近い事も前述の如くで、改めて繰返す要はないが、同時に此處では右の意味で、反面から、義經記が戦争を主題としてゐないことが、單にそれだけで必ずしも軍記物の特性を絶對に否定してゐる證左とは又ならないことにおのづからなるであらうといふことを言ひ添へた<sup>(註七)</sup>ればとて決して戦争の記事を全然拒否してゐるのではないのみか、平家追討の部分だけこそ缺けてゐるが、戦争記事は事實相當含まれてゐるのである。即ち堀河夜討(卷四)、住吉大物二箇所合戦(卷四)、吉野山合戦(卷五)、忠信最期(卷六)、衣川合戦(卷七)、泰衡追討(卷八)、と列擧することが出来る。尙その上に、鏡の宿の強盜誅戮(卷三)、鬼一の妹婿湛海が一類との殺陣(卷三)、辨慶と出

遭うての三回の勝負(卷三)、奈良法師但馬阿闍梨一味の膺懲(卷六、判官南都へ忍び御出ある事)等、亦之に准すべき鬪戦の記事である。而も以上は皆に事件としての争鬪軍戦の記事といふに止まらず、その描寫に至つても、皆紛れもない軍記物的手法である。就中堀河夜討と忠信吉野山の勇戦とは出色の文字で、前者に於ける義經の沈毅凜然たる軍將の姿、御厩喜三太が一世代の血戰、江田源三が悲壯の討死、ユーモラスな武藏坊が酔興、及び敗走の土佐坊を辨慶、片岡等が追ひ廻す小學生の遊戯めいた愉快な場面、又、後者に於ける義經忠信君臣の情と勇とを併せた武人的訣別、衆徒を前にしての忠信の堂々たる擬判官振り、並びに覺範との雪中の大立廻りは、これらの部分だけに就いて言ふならば、正に間然する所なき本格的軍記物の典型ですらある。そして他の軍記物に比して毫も遜色無きのみか、義經記独自の妙味すら遺憾なく發揮してゐるのである。衣川合戦亦舞曲高館と甲乙なき凄愴言語に絶した描寫である。直接戦鬪の記事でなくても、例へば大物浦難船の條(卷四、義經船落の事)の如き、動せず騒がぬ判官の下知に片岡八郎等が必死となつて風浪に拮抗する豪宕快絶の光景は躍然として眼前に彷彿して來、或は浮島ヶ原對面の前段、兄の旗擧げに加はらうと、秀衡が許から夜を日に次いで義經主従が打つて上る一節、



御曹司の郎等には、西塔の武藏坊、又園城寺の法師の尋ねて参りたる常陸坊伊勢の三郎、佐藤三郎繼信、同四郎忠信、是等を先として三百餘騎、馬の腹筋馳せ切り、脛砕くるをも知らず、揉みに揉んで馳せ上る。阿津賀志の中山馳せ越えて、安達の大城打通り、行方の原（し）ち（義經物語ナシ）を見給へば、勢こそまばらになりたるぞと仰せられけるに、或は馬の爪かゝせ、或は脛を馳せ砕きて、少々道に留まり、これまでは百五十騎御座候と申しければ、百騎が十騎にならむまでも、打てや。者を顧るべからずとて、とゞろがけにて歩ませける。きづ河をうち過ぎて、さげはしの宿に着きて馬を休めて、絹河の渡して、宇都宮の大明神伏拜み参らせ、室の八島をよそに見て、武藏國足立郡、三川口に着き給ふ。御曹司の御勢八十五騎にぞなりにける。板橋に馳せ付きて、兵衛佐殿はと問ひ給へば、昨日是を立たせ給ひて候と申す。武藏の國府の六所の町に着きて、佐殿はと仰せければ、一昨日通らせ給ひて候、相模の平塚にとぞ申しける。平塚に着きて、聞き給へば、はや足柄を越え給ひぬとぞ聞えける。いと心もとなく、て駿河國千本の松原浮島が原にと申しければ、さては程近しとて、駒を早めてぞ急がれける。（卷三、朝謀叛により義經奥州より出で給ふ事）

の如き、讀者を以て一行と共に息をはずませて、「脛砕くるをも知らず、揉みに揉んで馳せ上らせる旨がある。そしてこの動的なリズムミカルな敘述こそ、實に模範的な軍記物的文體ではないか。而も太平記、盛衰記のやうな過分な文飾が脱落してゐるだけに、却つて平調な自然味が寧ろ嫌味なく受け容れられるのを徳とせねばならぬ。又、義經記は個人英雄を以て主人公とする點に、且それが明白に意識的である點に

特異さがあることは事實であるが、その傾向は實は又、他の軍記物にも通有して既に成育しつゝあつたのである。唯それが十分意識的に或人物の上に常に中心を置かうと努力することの注意が完全に拂はれて居なかつただけである。保元物語は或意味では確に爲朝記であると言つても過言ではないであらう。平治物語はそれよりも英雄傳的意味が少し稀薄な都合に於て、——これは保元物語に於ける爲朝程の超人的英雄が存在せぬ史實的理由も大に與つてゐる——義朝、義平物語でもあると言つても許されるであらう。平家盛衰記は構成があのづから三部に分れて居、それぞれ清盛、義仲、義經を中心として語られてゐるとの見解に住する所論すら發表せられてゐる。<sup>(註七)</sup> 太平記に於ても散漫ながら正成、義貞等はあのづから全篇の重要人物たる觀をなしてゐる。而して多少の差はあつても、各の軍記物作者が、いづれもそれら勇士忠臣の失敗者方に同情しつゝ、筆を執つてゐることは蔽ひ難く認められる。保元物語の爲朝の如き殊にさうであり、平治物語でも、失敗者義朝の子孫が興隆して報復の幸運が終には廻つて來ることに卷をとぢめてゐる。不遇英雄に同情して之を傳せんとする意圖すらも、實は平家義經記だけではないのである。唯それが猶十分明確な姿を取るに至つてゐないだけである。即ち英雄主義時代の所産である以上、そ

して戦争そのものが英雄中心の事件である以上科學的又集團的戰鬪力が壓倒的的重要性を有つ現代にあつてすら滿洲事變に於ける多門師團長空閑少佐乃至は今大支那事變に於ける加納部隊長の如き個人英雄が顯著に尊崇し喧傳せられるのは、吾等の現に目睹した所である。況んや大將の威名、勇士の旗幟、それ自身が既に勝敗の決定者ですらあつた時代である。軍記物が斯かる傾向を帯びて來ることは極めて當然の事である。義經記及び曾我物語の出現は即ちこの傾向が一層歴然と或具體的な形を取つて凝成して來た成果であるに過ぎない。そしてその主人公に、時代民衆の熱愛崇拜の理想的な標的として劃切な兩者をそれ〴〵に捉へ得たに因るものであるに他ならない。この觀點からしてならば、保元物語から義經記、曾我物語への進展は、眞に一舉手一投足の勞であつたと論斷しても大過ないであらう。要するに作者の明確な意識の有無がその限界であつたのである。

義經記に挿話的説話の無いのも確に異數ではあるけれども、それは他の軍記物に對比して形態上から考察しての論結で——尙詳しく言へば、類似聯想から内外古今の説話を煩瑣なほどに並列する軍記物常套の手法のまゝではないのが異數とすべきであるといふ意味で——挿話的説話の要素が皆無であると言ふのではない。例

へば、吉次が述べ立てる前九年役の昔語（卷一、吉次が奥州物語の事）、或は吉野山での辨慶の談義（卷五、吉野法師判官を退掛け奉る事）等は明らかに説話的成分の挿入である。唯、それが作中の人物の談話中に織込まれてゐて、少くとも外形的な不自然さからは免れてゐるのである。

尙贅するまでもなく、全篇の物語的説話的敘事的である事、及び語り物的である事、又、文章上のみならず思想的氣分的にも英雄的分子と抒情詩的分子との混融してゐること等、既に言及した點もあるが、そしてこれらは又軍記物全體の特質として、物語文學及び舞曲と密接な關係を有つ點でもあるのであるが、義經記の場合はその關係が一層顯著である事前章に論じた通りである。概括して依然義經記には軍記物の色調の蔽ふべからざるものがあることを認めざるを得ない。斯く内容的にも形態的にも、亦總括的にも個別的にも、他の軍記物の何れとも多分に共通性を分擔し、互に交流し合つてゐる限り、義經記が軍記物——或は本格的と言へないまでも、少くとも准軍記物——の名目を以て取扱はれることは、決して不當ではないと言はねばならぬ。

之を要するに、吾人の見によれば、

軍記物 (平家型) 平家物語 (准) 義經記  
 (太平記型) 太平記・盛衰記・保元・平治 (准) 曾我物語

右表の如く、大略軍記物は平家型と太平記型との二種に分類し得ると思ふのであるが、義經記はその平家型に屬するものとして觀られ得べく、而も平家とは又少しく性質を異にする別格の作で、曾我物語の太平記に於けると相應じ(曾我物語を太平記型とするのは必ずしも妥當ではないが、これもその別格の意味で姑くこの型に屬せしめて置く。)同時にその曾我物語と同胞關係の如き位置を保ちつゝ、又それとも同型でない、即ち軍記物にして軍記物に非ざる一種特異の存在たることが、義經記の眞面目であり、而して軍記物的成分五、舞の本的成分三、御伽草子の成分二の比率が義經記の本質の分析表として掲げられねばならぬであらう。結局、義經記は軍記物の庶子ではあらう。畸形兒であるかも知れない。併し同時に義經記は正に一代記風の義經文學の始祖たる地位と共に、中世文學活動に於ける、歴史小説の新體試作者としての独自の一旗幟を掲揚する特權を主張し得るであらう。

註一 二三四頁義經記構成表及び拙著、義經傳説と文學、六五九―六六二頁參照。  
 二 同書六六三―六六八頁參照。なほ註三・四・五參照。

三 太平記卷七、吉野城軍事の義光奮戦の描寫の文に摸したと思はれる。  
 四・五 これも太平記卷二、俊基朝臣東下りの落花の雪の文の影響を受けてゐるであらうことは一讀直ちに氣づかれる。  
 六 義經傳説と文學、六五九―六六一頁參照。なほ義經記卷三、賴朝義經に對面の事の末文と同義經平家の討手に上り給ふ事の書起しとの連絡から觀てもさう言ひ得られる。  
 七 山田孝雄博士、平家物語序説校定平家物語・古典全集本平家物語上卷。

### 第三章 義經記と義經物語

義經記の性質並びに内容を論考するに當つて、當然一應の査定を経なければならぬのは、所用の本文に關してであるが、この問題は幸にしてさまで煩瑣な手續を要せぬのである。

義經記の異本に就いては、平家物語或は曾我物語に於ける如き、特記すべきものが無<sup>(註一)</sup>。流布本のみが餘りに有名である。少くとも、義經記の名によつて論評せられる限り、猶流布本の本文——但し通行板本は必ずしも善本と言ひ難<sup>(註二)</sup>いが——に就いてそれがなされるべきが妥當であらねばならぬであらうと共に、義經記の所謂異本類は、現在までの資料では、原本批評の問題には關與すべき重要性を殆ど有せぬので

ある。唯、最近紹介された義經物語(註三)に關してだけは、茲に一言して置く必要を感ずる。義經物語は高木武博士藏の大形、江戸時代初期頃の古寫八卷本であるが、併しこれとても流布本義經記と全然別系統の異本と觀るべき程のものではないのである。次に引用する卷頭の一節を、前章(二〇八頁)に掲出した流布本の詞章と對比しても、その辭句の上の僅少の出入異同に過ぎないことが知られるであらう。

ほんてうのむかしをたづぬるに、たむらとしひとまさかどすみともほうしやうらくわうかんのは  
 んくわひちんへいちやうりやうは、ぶようといへども名をのみきよてめには見ず。まのあたりには  
 いを世にほどこし、はんしのめをおどろかし給ふは、しもつけのさまのかみよしとものすゑの子にけ  
 ん九郎よしつねとて、わがてうにならびなき、めいしやうぐんにてぞをはしける(註四)

その他も特に卷八の一部と各卷時に流布本と異なる箇所のある他は、概して大同小異である。卷數も全く同じである。併しながら、この書には尙看過され得ない四五の點があることを指摘せねばならない。

第一は題號である。題簽に、よしつね物語一、内題に「義經物語卷第一」とある(每卷同斷)。この題名は全く珍しい。義經記が判官物語或は牛若物語といふ古名或は別名で呼ばれたらしいといふことは知られてゐるが、義經物語(註五)と異稱せられたといふ文獻は未だ所見が無い。けれども判官物語と名づけられ、牛若物語と呼ばれる以上、義經物

語とも稱せられるのは極めて自然のことであらう。況んや義經記の題號とは轉換或は移植せられ得るに一層の容易さと自然さとが、あつから存してゐる。唯、その何れが原名であつたかは、猶斷は許されない。

第二は各卷章節を分たぬことである。この體裁上の同様式であることと、義經物語といふ題名の同型なものと、卷八の首(義經記では「嗣信兄弟御事」の一節)を缺き、同卷の結末が流布本と異なる點とによつて、この書が判官物語(註六)の系統に屬するものであることは推知し得られる。(全篇に互つて判官物語より又稍敷衍されてゐるらしいが、今判官物語の本文を對比することが出來ぬのを遺憾とする。)そしてこの章節を立てない體裁が、古い形のやうにも一應は考へられるのであるが、一方又、義經記の章段の切り方も大體に於ては當を得てゐると言へる上に、他の先進の物語や軍記物にも章節が立てられてゐるものが多いのであるから、この點のみで先後を決することも少しく早計に失するであらう。

第三はその卷八の結文である。流布本では、頼朝の奥州征討によつて泰衡兄弟の滅亡した事を敍した末に、

親の遺言といひ、君に不忠といひ、惡逆無道を存じ立ちて、命も亡び子孫絶えて、代々の所領他人の賈と

なるこそ悲しけれ。侍たらん者は、忠孝を専らとせずんばあるべからず、口惜しかりし者共なり。  
と擱筆して比較的單純である。然るに義經物語では、

おやのゆいごんをそむき、ひあんのまんしんにぢうして、はうぐわんをうちたてまつれば、わが身もほどなくほろび、しよりやうもつしゆのちとなりて、しんぶのちとうめんくになされけるこそあさましけれ。さればかいりきまさりたるおやのはからひゆいごんをたがへん人々は、けんらうち神にもそむけられたてまつるべきなり。

と稍冗漫な詞句になつてゐる上、更に續けて、

〔か〕ればかぢはらも、はうぐわんの御いきどをり〔とて、一人ものこさず流人になりけると〕。〔さ〕れば人はよくのいたどきたかくして、しうをあ〔さむ〕けげ、すなはちぢやうごうのきはまるむくみなり。しうをあざむかず、おやのめいにしたがふ事人のためにあらず。むかしよしもを、おさだのしやうじうちたてまつれば、きよもりのくんこうにやがてかうべをはねられける。世にはきよつたへても、うんのつきぬれば、かゝる心のいでくる事こそうたてしけれ。はうぐわんのぼうこんあれたまひて、をんてきにくわはるもの、一人ものこさずとりころしたまふ事こそおそろしけれ。

といふ一節が添加せられてゐるのである。この最後の一文は、流布本に缺けてゐるのは脱落とも見られようが、この條の記事内容に徴する時は、少しく唐突の感がないでもなく、無理に接木したかの觀すらあつて、蛇足と言ふも不可なきものであらう。けれどもこの一文のみを後人の加筆と見做すことは又許されない理據が存する。

この一節が判官譏言の應報としての梶原の没落に關してゐることそれである。即ちこれが抑もこの章の末文として唐突感を與へる所以のものなのであるけれども、實は本書の作者からすれば、決して不用意に添加せられた蛇足では無くして、否、これこそ或意味では作者の言はんと欲する主要な辭句であつたと思はれるのである。本書製作の主動機が、恐らく其處にあつたのではないか——そしてその點が流布本との相違の要點なのではなかつたか——をすら思はしめる。何となればこの末文に示された作者の意圖は、本書の他の部分にも一貫して看取し得られるからである。例へば南都勸修坊の許に義經が滯留した條の文が義經記では、

判官申させ給ひけるは、度々仰せ蒙り候へども、今一兩年もつれなき髻つけて、つらく世の有様見んとこそ宜ひけれ。(卷六、判官南都へ忍び御出ある事)

とあるのに、本書では、

はうぐわん申させ給ひけるは、たびくおほせかうぶり候へども、いま一りやうねんもつれなきもとよりをつけてこそ、つらくあたられける。かぢはらに、さりとともとそんじ候へと、おほせられける。こそおそろしけれ。

となつてゐる。而も義經記の文の方が寧ろ單純且自然で、この方に却つて原文らしさがあるのは如何であらう。更に次項に關聯しても上に下した推斷の根據が深められねばならない。

即ち第四に、これは結文ではないが、同じく卷八の、そして義經記では最終の章「秀衡が子供御追討の事」の初頭に相當する部分であるが、義經の首級が鎌倉へ到着した記事として、本書には、

しせつあだちの四郎きよたかは、くび共もたせてかまくら殿へはせまいる。かまくら殿はさすが御きやうだいの御事なれば、あはれとやおぼしめされけん。さてあるべきにあらざれば、くびのじつけんにさだまりぬ。され共やけたるくび共なれば、はうぐわんどの、御くびを、さうなく見わたたまつらず。かぢはら申けるは、はたけ山殿は、さりとも見わけさるべしと申ければ、いそぎめされけり。しげたゞ御ぜんにまいり、御まへにありけるくび共をとりあげ、つく／＼と見たてまつり、あるくびをとりあげ、かうがいぬきて御くちをおしあけて見、これこそうたがひもなきはうぐわん殿の御くびにて候へとて、はら／＼とぞなかれける。さすがよりも、御なみだをぞながされける。しかればはうぐわんの御くちのうち、二つうの交をぞくわへ給ひける。はたけ山これをとり、御まへにかしこまり、たからかによみあげたてまつれば、そのほか大みやうせうみやう、みななみだをぞながされける。よりもいよく御らくるいかぎりなし。はうぐわんのけうやうには、くれ／＼かぢはらふしが、かうべをはねられ、よしつねがしやうりやうにくだしあづかるべし。しからずはあくりやうとなつて、たうけをほろぼしたてまつらんとかゝれけれ。やがてきりてもすてばやとおぼしめしけれ共、たび／＼のちうせつふかきものなれば、しさいにもおこなひ給はず。うむのきはめのかなしさはまとのまへをとるとて、いころされてしにけり。これひとへにはうぐわんどの、御いきどほりと人々申あひけり。

と見えてゐる。この史實は吾妻鏡にも、

十三日辛丑、泰衡使者新田冠者高衡持參、豫州首於腰越浦言上事由、仍爲加實檢遣和田太郎義盛、梶原平三景時等於彼所、各着申直垂相具、甲冑郎從二十騎、伴首納墨漆櫃、浸美酒、高衡僕從二人荷擔之、吾蘇公者自擔其糝、今高衡者令、人荷彼首、觀者皆拭雙淚、濕兩衫云々。(卷九、文治五年六月)

と出てゐるのに應ずるのではあるが、内容からも表現からも、明らかに近代的な感じが濃く、義經記の原形としては十分な疑惑が懸けられる。且右の文中、高館の舍狀の傳説が語られてゐるのが、却つて原文の痕跡を稀薄ならしめる。同傳説は腰越狀傳説の轉化又は派生と考へるのが穩當であり、その發生は寧ろ江戸時代初少くとも室町末に屬するのではないかと思はれるのであるが、同傳説を取扱つた作品では、舞曲舍狀や、元祿二年刊の金平本義經記(七之卷六段目)などが早いやうで、その後では近松の大磯稚物語(二段目)、最明寺殿百人上臈(一段目)に取材せられ、竹田出雲の右大将鎌倉實記(四段目)には忠信の妻安督の訴訟に應用せられてゐる。その他義經一代記(黄表紙)、泉親衡物語(讀本)、義經新舍狀(淨瑠璃)等にも素材を提供してゐる。而して舍狀の文面は即ち腰越狀の模擬で、稚拙言ふに足らざるものである。但し、本書所載の文面は少しく異なつてはゐるが、梶原成敗の惻願が主部を成すことは全く同じである。萬一本

書の原形に右の一文が含まれてゐたとすれば、本書を以て義經記流布本より新しいものと見做すのでなければ、合狀傳説の成形の時期を更に引上げねばならぬことになるわけである。

そしてこの部分の義經記の文を對比すると、前章「兼房が最期の事」の末段……「焼死するこそ無慙なれを受けて、僅かに

かくて泰衡は判官殿の御首持たせ鎌倉へ奉る。

とだけの簡單なものである。之に續けて「頼朝仰せけるは、抑もこれらは……」と頼朝が怒つて泰衡の使者を斬り、奥州追討の命を下すといふ敘述に移るのもよく統一してゐる。それが義經物語の方では「……ほのほに入こそふびんなれ」と兼房最期の略、同文の記述から、前掲の一節に續き、更に「しかれば」といふ接續詞によつて、「かまくら殿のたまふやう、これらはふしぎのやつばらかな……」と、又義經記と略、同文の一節に連繫せられてゐる。この梶原に關聯した合狀の一段が、後の挿入に係るとしても、此の條の前後の記述に毫も破綻撞著を來さないのみか、却つてさう考へる方に無理が無いほどに、流布本の文が整つてゐる。「しかれば」の一句の如きも、この一段の挿入の無理を曝露してゐるかに見える。

なほ前項にも論じたやうに、梶原についての報復思想が、此處でも強調せられ、この點のみは義經物語に於て一貫してゐる。(義經記にもそれが出てゐないと言ふのではない。併し決して本書のやうに露骨で強烈ではない。)そしてこの事に觸れた箇所が特に流布本と異なつた詞句を含む部分であることは、本書の價値を批判する上に、相當重要な契機をなすものと考へられる。即ち判官最良が愈、深厚となり、げぢぢの梶原に對する國民的憎惡の極端化した江戸時代初頃(少くとも室町中期以前ではあるまい)に、この意識の下に義經記が更に部分的に敷衍改變せられたものが義經物語であるとも見られなくはないと言へるのである。

が、假にさうであるとしても、本書の價値は又別にある。即ち第五に、假令義經記が敷衍せられ、膨大して本書を成形したことが眞であつても、それは現行板本(十種位あるが、正保二年板、寛文十年板、元祿二年及び十年板等が最も流布してゐる。)乃至その底本が敷衍せられたのではない確證があることである。何となれば、本書の流布本と異同ある部分は、梶原關係以外の箇所にも互つて居り——勿論、梶原關係以外の部分は、内容的には甚だしい變動はないやうで、主として脱行或は辭句の上の差異であるが——そして板本の誤脱を補正し得べき場合が屢、あるからである。

例へば板本は卷一「義朝都落の事」の義朝の敗北が「平治元年二月二十七日」となつてゐるが、本書では「十二月二十七日」とあり、平治物語(卷一・卷二)とも一致してゐる。而も義經記の古活字本及び古寫本(家藏)にも「十二月二十七日」と明記せられてゐるから、通行板本に「十」の一字を脱してゐること明白である。卷四の腰越狀の文詞も板本は吾妻鏡所載のものに比べると誤脱があるが、本書の方は比較的それが正しく一致してゐる。又、卷七「大津次郎の事」の一節が板本には

白鬚の明神をよそにて拜み奉り、參河の入道寂昭が詠みける、

鶉鳴く眞野の入江の浦風(註八)に尾花なみ寄る秋の夕暮

と言ひけんふるき心も今こそ思ひしられけれ。

とある。「鶉鳴く」の歌は、誰も知る源俊賴の名吟で、

堀河院の御時、御前にておのゝ題をさぐりて歌つかう奉りけるに、薄をとりて仕うまつれる

と詞書して、金葉集(卷三、秋)に出てゐる。之を入唐傳説で有名な大江定基の寂昭法師に傳會したのは滑稽であるが、義經物語では「寂昭云々」ではなくて、單に「まのゝうらすぎ給へば」とあり、この方が原文らしく推測されるのである。

又、義經記中重要人物の一人で、卷初には相當活動してゐる四條上人の終が、板本では少しく漠然としてゐる憾があるが、本書では卷三に、上人は捕へられ、義經は奥州へ

遁れた事を記したまでは流布本と同様であるけれども、その次に

さても四でうのしやうもんぼう、六はらにてとかくきうもんせられ共、つゐにおちざりければ、六でうがはらにてきられぬることそふびんなれ。かくて九郎御ざうしは、あふしうにてとしをへ給ひけるほどに、御とし廿四にぞなりたまふ。

といふ一節が見えてゐるので、首尾がよく通つてゐる。(但しこれは後の敷衍とも見られなくはない。)それから卷八「鈴木三郎重家高館へ參る事」の起首が、板本では突如として「重家を御前に召され」とあり、前章にも重家に關して何等記載が無いのが訝しいのであるが、本書では

さても物のあはれをとどめしは、すゞきの三郎しげいゑにてとどめけり。都のかたほとりにありけるが、はうぐわんどのをこひしのびたてまつり、はるくのみちのほどをわけくだり、七十五日にくだりつきけふのかせんに一ばんに、うちじにつかまつりけるとかや。すゞきの三郎を御まへにめし、

とあるので、兎も角一段明瞭にはなる。卷六「静若宮八幡へ參詣の事」の「静舞樂の一節」に至つては、

鎌倉殿白拍子は興さめたるものにてありけるや。今の舞ひやう歌ひやうけしからず。頼朝田舎に住みなれしかば聞き知らじとて歌ひける。賤のをだまき繰り返しとは、頼朝が世盡きて、九郎が世になれとや、あはれおほけなく覺えし人の跡絶えにけりと歌ひたりければ、御簾を高らかに上げさせ給ひて、輕々しくもほめさせ給ふものかな。



とある板本の文は、如何にしても意が通ぜず、明らかに脱文を思はせるが、本書では、

……あはれおほけなくおもひたる物かな。よし野山みねのしら雪ふみわけて入にし人のあとたえにけりとうたひたりければみすをたからかにあげさせ給ひて、かろくしくもほめさせ給ふ物かないふかさきもあり。

とあるので初めてかなり整備して來るのである。但し本書の文でも……おもひたる物かなの下に、尙脱漏があるのではないかと思はれる。「いふかさきも云々」も解し難い。尙又、この次には、頼朝を初め見物の人々が、争うて祿の物を山と積み、長持六十四枝に及んだのを、静は貪らずして、判官父子の孝養に神佛に寄進したこと、堀藤次親家が頼朝の命を受けて、静母子を京まで送つたことを、長々と記した流布本に無い敘述があるが、そのまゝが古本にあつたか多少疑問の餘地もあるやうな文詞であり、且、この段の結文(卷六の終)静往生の條が、

つぎのとしの秋のくれには、しうんたなびきをんがくそらにきこえて、わうじやうのそくわいとげにけり。ほどなくとも、にわうじやうしけるとかや。

と、流布本より拙劣な形になつてゐる點からも一概に本書の方が整つてゐるとも定められない。右の文の如き、義經記の他の部分の文勢に看て、却つて後世の俗惡に墮した姿態とすべきが穩當かと思はれる。卷二の鬼一法眼の條の結文も流布本の方

が善く、卷一の常磐の容色、及び清盛との關係を敍した文も流布本より稍詳しいが、これも後の潤色とも見られるやうな感じがする。

以上考察した所によつて、義經物語はその後世的着色の部分を除けば——この除去は餘り大きな困難なしに可能である——少くとも、流布本と一致した記事内容の部分に就いて言へば、流布本の原形を察知し得べき手懸りを與へる絶好の資料を提供してゐるもの、と言ひたいのである。この書それ自身は或は比較的新しいものかも知れないが、この書の母本は——必ずしも直接的關係でなくても——必ずや又流布本義經記の根元をなす母本でもあるべきことが確認せしめられるのである。この意味に於て本書の出現は洵に慶ぶべきものと言はねばならない。

即ち義經物語は、義經記の異本ではなくして、義經記の一本——判官物語の系統に屬する——である。そして概して流布本より増大して居り、又文詞も流布本の方が善い箇所もあるが、本文校訂上、及び成立研究上には甚だ貴重な参考本である。唯、後世的着色と推定し得べき部分を外にしては、義經記の内容論には殆ど大きな影響を及ぼさないものと言つてよい。

註一 義經傳説と文學六三八—六四〇頁参照。

- 二 家藏の古寫本（岩波文庫本底本）には板本の過誤を補正し得べき箇所も少くない。
- 三 日本文學大辭典、ぎけいきの項参照。
- 四 原本のまゝ。句讀・濁點は便宜附した。以下同斷。
- 五 義經傳説と文學、六三五頁参照。
- 六 八卷。阿波文庫藏。舊東京帝大圖書館本は大震災に焼失した。
- 七 舞曲などから漸次この傾向は見えて来てゐる。
- 八 金葉には瀆風となつてゐる。

### 第四章 義經記の構成と史實

既に説いた如く、義經記は生立から末路までの源義經一生の傳記を敘する物語である。そしてその中間を成す得意の戦功時代のみは缺いてあり、且後半生の失意時代に特に力が注がれてゐる。従つて義經記は構成上おのづから前後の二大部に區分され得る。

<p>鞍 常磐都落の事</p>	<p>卷一 義朝都落の事</p>	<p>軍 記 物 誦・舞曲・狂言・御伽草子 吾 妻 鏡</p>	<p>〔平治卷三、義朝敗北事・常磐注進・義朝青落着事・卷三、悪源太被誅事〕</p>	<p>〔腰越狀（卷四、元暦二年五月二十四日戊午）の文中所見〕</p>
<p>馬 牛若鞍馬入の事</p>	<p>正門坊の事</p>	<p>〔平治卷三、牛若奥州下事〕</p>	<p>〔盛衰記卷四六、義經始終有様事〕</p>	<p>〔附〕常磐問答（舞）</p>
<p>入 牛若貴船詣の事</p>	<p>吉次が奥州物語の事</p>	<p>〔平治卷三、牛若奥州下事〕</p>	<p>〔（参考）太平記卷二九、將軍上洛事附阿保秋山河原軍事〕</p>	<p>〔附〕鞍馬天狗（誦）</p>
<p>奥 鏡の宿にて吉次宿に強盗入る事</p>	<p>卷二 遮那王殿鞍馬出の事</p>	<p>〔平治卷三、牛若奥州下事〕</p>	<p>〔盛衰記卷四二、屋島合戦・卷四六、義經始終有様事〕</p>	<p>〔附〕關原與市（誦）</p>
<p>州 遮王那殿元服の事</p>	<p>阿野の禪師に御對面の事</p>	<p>〔平治卷三、牛若奥州下事〕</p>	<p>〔鳥帽子折（誦・舞）〕</p>	<p>〔附〕關原與市（誦）</p>
<p>生 義經陵が館を焼き給ふ事</p>	<p>伊勢三郎義經の臣下に初めて成る事</p>	<p>〔平治同上〕</p>	<p>〔盛衰記卷四二、屋島合戦・卷四六、義經始終有様事〕</p>	<p>〔附〕山中常磐雙紙（舞）</p>
<p>立 義經秀衡に御對面の事</p>	<p>鬼一法眼の事</p>	<p>〔平治同上〕</p>	<p>〔秀衡入（伽）（舞？）〕</p>	<p>〔同上〕</p>

〔卷一、治承四年十月二十一日庚子、頼朝・義經對面の條の文中所見〕

時代

卷三 熊野の別當亂行の事  
 辨慶生るゝ事  
 辨慶山門を出づる事  
 書寫山葵上の事  
 辨慶洛中にて人の太刀を取りし事  
 義經辨慶と君臣の契約の事

〔平治卷三、頼朝舉義兵事  
 盛衰記卷二〇、八牧夜討事・卷二  
 二、佐殿清會三浦事〕

辨慶物語(伽)  
 橋辨慶(伽)  
 橋辨慶(謠)

〔平治卷三、頼朝舉義兵事  
 盛衰記卷二三、義經軍陣來事〕

卷一、治承四年八月十七日  
 丁酉・二十三日癸卯・二十  
 四日甲辰・二十八日戊申・十  
 二日己巳・二十九日己酉・十  
 五日壬子・十三日壬辰・十  
 七日丙午・十五日戊申・十  
 月四日癸未・五日甲申・十  
 日乙丑、忠信討死の條の文  
 中所見

〔卷一、治承四年十月二十一日庚子〕

失(期後)

越腰 義經平家の討手に上り給ふ事  
 腰越の申狀の事  
 都 土佐坊義經の討手に上る事  
 義經都落の事  
 落 住吉大物二か所合戦の事  
 卷五 判官吉野山に入り給ふ事  
 靜吉野山に捨てらるゝ事  
 義經吉野山を落ち給ふ事  
 吉野 忠信吉野に留まる事  
 忠信吉野山の合戦の事  
 山 吉野法師判官を追掛け奉る事  
 卷六 忠信都へ忍び上る事  
 忠信最期の事

〔平家卷一、腰越・卷一二、土佐房被斬〕  
 〔平家卷一二、土佐房被斬  
 盛衰記卷四六、頼朝義經中違事・土佐房上洛事〕  
 〔平家卷一二、判官都落  
 盛衰記卷四六、義經行家出都〕  
 〔平家卷一二、吉野軍  
 盛衰記卷四六、義經行家出都並義經始終有様事〕  
 〔平家(八坂本)卷一二、吉野軍〕

腰越(舞)  
 正尊(謠)  
 堀河夜討(舞)  
 船辨慶・蘆屋辨慶一名四國落(謠)  
 四國落(舞)  
 〔附〕沼捜(謠)  
 笈探し(舞)

〔卷四、元暦二年五月十五日丁酉・二十四日戊午〕  
 〔卷五、文治元年十月九日戊午・十七日丙寅・二十二日辛未・二十六日乙亥〕  
 〔同卷、同年十一月三日壬午・五日甲申・六日乙酉・二十日己亥・二十五日甲辰〕  
 〔同卷、同年七月十七日丙申・十八日丁酉・十二月八日丁巳・十五日甲子〕  
 〔卷六、文治二年三月六日甲申〕

二人靜・法事靜(謠)  
 吉野靜(謠)  
 忠信一名空腹(謠)

〔卷五、文治元年十一月二十一日辛丑〕

愛壽忠信(謠)

〔卷六、同二年九月二十二日乙丑〕

時 意

期 忠信が首鎌倉へ下  
 出ある事  
 判官南都へ忍び御  
 坊修勤  
 關東より勸修坊を  
 召さるゝ事  
 鶴 靜鎌倉へ下る事  
 岡 靜若宮八幡へ參詣  
 の事  
 卷七

判官北國落の事  
 荒乳山の事  
 三の口の關通り給  
 ぶ事  
 平泉寺御見物の事  
 如意の渡にて義經  
 を辨慶打ち奉る事  
 直江の津にて笈さ  
 がされし事  
 龜割山にて御産の  
 事  
 平家(八坂本)卷一二、吉野軍

靜(舞)  
 鶴岡・安達靜(謠)  
 安宅(謠)  
 富樫(舞)  
 笈探し(舞)

同卷、同年二月十八日丙寅、  
 十月十日癸未・十二月十五  
 日戊子  
 卷七、同三年三月八日庚戌  
 卷六、文治二年三月一日己  
 卯・六日甲申・閏七月二十  
 九日庚戌  
 同卷、同年四月八日乙卯・  
 (參考)五月十四日辛卯・  
 九月十六日己未  
 卷七、文治三年二月十日壬  
 午・(參考)卷五、元年十  
 一月十七日丙申・卷八、同  
 四年十月十七日己卯

代

落 川・衣 合 戰

判官平泉へ御着の  
 事  
 卷八  
 嗣信兄弟御申の事  
 秀衡死去の事  
 秀衡が子供判官殿  
 に謀叛の事  
 鈴木の三郎重家高  
 館へ參る事  
 衣川合戰の事  
 判官御自害の事  
 兼房が最期の事  
 秀衡が子供御追討  
 の事

平治卷三、賴朝舉義兵事並平家退  
 落事  
 盛衰記卷四六、義經始終有様事  
 (參考)平治卷三、牛若奥州下事・  
 平家卷一、嗣信最後・盛衰記卷  
 四二、源平侍共軍時繼信盛政孝養  
 事  
 盛衰記卷四六、義經始終有様事  
 平治卷三、賴朝舉義兵事並平家退  
 落事  
 盛衰記卷四六、義經始終有様事  
 平家劍卷  
 平治同上・盛衰記同上  
 (泰衡征伐物語)

攝待・鶴若(謠)  
 八島(舞)  
 和泉が城(舞)  
 錦戸(謠)  
 清重(謠・舞)  
 附 語鈴木(謠)  
 追懸鈴木(謠)  
 生捕鈴木(狂言)  
 高館(舞)  
 譽判官一名衣川・義經一名高  
 館(謠)  
 合狀(舞)  
 野口判官(謠)

卷七、文治三年三月五日丁  
 未・九月四日壬寅  
 (參考)卷四、元暦二年二  
 月十九日癸酉  
 卷七、文治三年十月二十九  
 日丙申  
 卷八、同四年四月九日乙  
 亥・八月九日壬申・十月二  
 十五日丁亥・十二月十一日  
 壬申・卷九、同五年二月二十  
 二日甲午・二十五日丁酉・二  
 十六日戊戌・三月二十日壬  
 戌・四月十九日辛卯・二十  
 二日甲午・閏四月二十一日  
 庚戌  
 卷九、文治五年六月二十六  
 日甲寅  
 同卷、文治五年閏四月三十  
 日己未・五月二十二日辛巳  
 同卷、同年六月七日乙未・  
 十三日辛丑・二十四日壬子・  
 二十五日癸丑・二十七日

乙卯	七月十七日	乙亥	十月十日
九丁	八月廿七日	丙申	十一月廿四日
八未	九月十五日	丁酉	十二月十二日
辛酉	十月三日	戊戌	十二月廿一日
丁酉	十月廿一日	己酉	十二月廿九日
三庚	十一月九日	辛酉	十二月廿七日
癸亥	十一月廿七日	壬戌	十二月廿五日
癸亥	十二月十五日	癸亥	十二月廿三日
癸亥	十二月廿三日	癸亥	十二月廿一日

備考

最上段の目次と巻数は義經記、下段に對照したのは同村を取扱つてあるもの。「附」とあるは類材又は關係ある素材を用いたもの。最下段は史實との對比。(なほ舞曲山中常磐と合狀とは笹野堅氏の發表資料國語と國文學昭和七年九月號、同九年十二月號によつて補足した。)

以上の如く表解してみると、大體、一つの事件を中心としての纏つた説話が終つてから、更に新しい事件を中心とした他の纏つた説話に移るといふやうな行き方で、そしてそれが大凡時間的の推移に相應じて語られるといふ甚だ單純な話説法を用ゐてある。(他の軍記物とも略、同じ態度であるが、例の斷えず岐路に入りたがる挿話の攙入に煩はされないから、一層和易な氣持で繙讀することが出来る。)唯鬼一法眼の件が一小章として、奥州下りと辨慶の傳との間に介在してゐると、吉野落に於て三方に分れた義經、靜忠信の各の上を、先づ靜の身の上を、次に、居残つた忠信に就いて述べ、次に落ち行く義經主従に就いて語り、更に前を承けて都へ逃れた忠信の動靜を報じ、又南都に隠れた義經に轉じ、これに關聯して勸修坊の鎌倉下りを敘し、最後に始に返

つて靜のその後と終焉とを記す交錯法を採つてゐるので、辛うじて變化あらしめてゐるだけであるが、これもやはり編年的に語らうとする態度から自ら斯かる形に結果したものであらう。又辨慶に關して傳すること特に詳しく、その部分は獨立した一箇の物語を形成し、後半にあつても辨慶が最も活躍してゐて、岡部精一氏をして、義經記に非ずして辨慶記なりと言はしめた程(註)であり、又辨慶の生立が辨慶物語乃至橋辨慶(傳)の内容を成す傳説を稍機械的に採入れたのではないかと疑はせる程に、兩書と親近な關係が認められるのではあるが、併し全篇の主人公は猶義經を措いて無い。辨慶は依然ワキ役である。而も本書に於ける義經、辨慶は殆ど一身同體の觀があり、辨慶の活動の著しいことは、少しも怪しむに足りない。

その時見參に入り初めてより、心ざし又三つなく身に添ふ影の如く附添ひ奉り、平家を三年に攻落し給ひしにも、度々の高名を極めぬ。奥州衣川の最後の合戦まで御供して、終に討死しける武藏坊辨慶これなり。(卷三、義經辨慶と君臣の契約の事)

とは、義經記作者も附言してゐる所である。

この辨慶の生立物語の如き、英雄出生型の傳説を根幹としてゐる。所謂橋辨慶傳説に進展した義經との武藝競べも、童話味に満ちたものである。鬼一法眼の一條の

如きも、御伽草子鬼だ一法眼を介して、御曹司鳥渡りの蝦夷の鬼王傳説との關係をすら想測せしむるに足る空想的神話的成分に包まれてゐるものである。總じて前半少年青年時代は傳説的童話的色彩が濃厚である。後半と雖も空想的傳説的氣分と事實とは過大に含まれてゐる。然るにも係らず、義經記は全然の架空小説とは決して看做し難いのである。全體的に史上英雄を傳せんとする意圖があるばかりでなく、部分的に確固たる史實の根據に照應する事件の種々をその素材としてゐるのである。前表で知られるやうに、義經記の前段は、平治盛衰記、中部は平家盛衰記と共通した素材を——或はそれら先進の軍記物の記述を敷衍した形でと言ふ方が適切であらう——取扱つてゐる。既にこれら半史實半傳説の文學——それが即ち軍記物の本態であるが——と同材且同型である以上、その共通した或は潤色された部分が、多少とも史實的骨子を基本としてゐることは當然であるが、義經記に於て特に顯著に注目を惹くものは、それ以上に吾妻鏡、玉葉等に散見する史料と少からず一致する部分を見出すことである。特に中部から後半へ互つての素材の一半は、吾妻鏡の記事にその所據を求め得べきものが相當あり、直接吾妻鏡の記述からの影響すら推測し得べき點までも存する。頼朝政子は自ら別として、獨り時政にのみ「北條殿」と敬稱を

附する(義經物語も同斷)如きも、その有力な一證となり得るであらう。(註三)兄頼朝との對面は、平治にも盛衰記にも載せ、義經記の記述は盛衰記に近いが、吾妻鏡に記す所も亦大略同様である。

今日弱冠一人、御旅館之砌、稱可奉調、鎌倉殿之由、實平宗遠、義實等推之不能、執啓移冠之處、武衛自令聞此事、給思年節之程、奥州九郎、早可有御對面者、仍實平請彼人果而義經主也、即參進御前、互談往事、催懷舊之淚、就中、白河院御宇、永保三年九月、曾祖陸奥守源朝臣義家於奥州、與將軍三郎武衛同四郎家衡等、遂合戰于時左兵衛尉義光、候京都傳聞此事、辭朝廷警衛之當官、解置弦袋於殿上、潛下向奥州、加于兄軍陣之後、忽被亡敵訖、今來臨尤協彼佳例之由、被感仰云々、此主者去平治二年正月、於襦襦之内、逢父喪之後、依繼父一條大藏卿長成之扶持、爲出家登山鞍馬、至成人之時、頻催會稽之思、手自加首服、侍秀衡之猛勢、下向于奥州、歷多年也、而今傳聞武衛被送宿望之由、欲進發處、秀衡強抑留之間、密々遁出彼館、首途秀衡失格惜之、衝迫而奉付、繼信忠兄弟之勇士云々。(卷一、治承四年十月二十一日庚子)

腰越狀は勿論吾妻鏡に載せて有名で、義經記のは殆どそのまゝであり、但し直接吾妻鏡からでなく、平家所載のものを採つたらしい形迹がある。義經物語の方が一層吾妻鏡の原文に近いことは前章にも言及したが、その申狀の前文には、

源廷尉(義經)如思平朝敵訖、剩相具前内府參上、其賞兼不疑之處、日來依有不儀之間、忽蒙御氣色、不被入鎌倉中、於腰越驛、徒涉日之間、愁鬱之餘、付因幡前司廣元、奉一通狀、狀廣元雖披覽之、敢無分明仰、追可有左右之由云々、彼書云、

と見えてゐる。その他堀河夜討（玉葉卷四・百練抄第十等にも見える）、都落及び大物の難船、吉野入、別離後の静、鶴ヶ岡舞樂、忠信の最期、山伏姿の奥州落、秀衡の死去（玉葉卷五四・北條九代記・保曆間記等にも見える）、衣川合戦（玉葉卷五六・百練抄第十・北條九代記・鎌倉大日記・保曆間記等にも見える）、泰衡追討（愚管抄卷五・北條九代記・保曆間記等にも見える）等、すべて表示したやうに吾妻鏡の記事と一々相應じてゐる。就中吾妻鏡の史實を採つたもので、他の軍記物、謠、舞曲にも取材せられず、後世文學にも展開して行かなかつた義經記特有の記事は、南都の勸修坊得業の鎌倉召喚である。

十八日丙寅、豫州、隱住多武峰、事風聞。依之彼師壇鞍馬東光坊阿闍梨南都周防得業等有同意之疑、可被召下之云々。（卷六、文治二年二月）

十日癸未、去月朝宗等打入南都、雖復求聖佛得業邊、不獲、義行（本名義經、去比改名之間、空以歸洛、依之南都、頗物忿、衆徒成蜂起、含鬱、訴可停止、維摩大會之由、風聞云々。（同年十月）

十五日戊子、當時、比企藤内朝宗已下御家人、差置郎從等於南都、寺聖佛得業坊、是爲尋、義顯也。而去比、山階寺別當僧正企參、洛、此事已可爲一寺滅亡之基歟。早可尋索之趣、申請之由、右武衛所被申送也。（同年十二月）

八日庚戌、南都周防得業聖佛、依召參向、爲豫州師壇之故也。日者小山七郎朝光、預置之、今日、二品有御對面、直及御問答、仰曰、豫州者、欲置邦國之凶臣也。而逐電之後、復求諸國、山澤、可誅戮之、旨度々被宣下、華。然者、天下尊卑、背彼之處、貴房獨致祈禱、利有同意、結構之間、其企如何者。聖佛答申云、豫州爲君御使、征平家、刻、合戰、屬無爲之、樣、可迴祈禱之旨、感、勳、契約之間、年來、抽丹誠、非報國之志乎。爰豫州稱蒙關東、證責、逐電之時、以謂、

師壇之好、來南都之間、相構、先遁、一旦、害退、可被謝申于二品之由、加諷訓、相訓下法師等、送伊賀國、畢、其後、全不通音信、謂、祈請、不、祈謀、叛、謂、諷、詞、和、逆、心、畢、彼何被處、與、同、哉、凡、情、案、關、東、安、全、只、在、豫、州、武、功、歟、而、聞、食、讒、

訴、忽、忘、奉、公、被、召、返、恩、賞、地、之、時、發、逆、心、之、條、人、間、所、堪、可、然、事、歟、連、翻、日、來、御、氣、色、就、和、平、之、儀、被、召、還、豫、州、

兄弟、令、成、魚、水、思、給、者、可、爲、治、國、之、謀、也、申、狀、更、非、引、級、之、篇、所、求、天、下、靜、謐、之、術、也、者、二、品、依、感、得、業、直、心、給、

早爲勝長壽院供僧職、可抽關東御繁榮、御祈禱之由、被仰含云々。（卷七、三年三月）

之を義經記の本文に對比して併讀する時、義經記の同條に於て、靜の舞樂の段と共に、讀者の胸鬱を一時に散じて、判官最員の精髓を發揚して餘蘊なき感を與へしめられ、ると同時に、當時實存の人物中にも、亦斯くの如き判官最員の代表者のあつたことが知り得られる愉悅の禁じ難きものがあるに關聯して、此の條に觀ても義經記が吾妻鏡に據つた跡の歴然たるを確め得るのである。靜の所生の男子の殺されたこと（義經記卷六、靜鎌倉（下る事）も、

二十九日庚戌、靜産生男子、是豫州息男也。依被待期于今、所被抑留、歸洛也。而其父奉背關東企謀、逆逐電、其子若爲女子者、早可給母。於爲男子、今雖在襁褓内、爭不怖畏、將來豈未熟時、斷命條、可宜之由、治定、仍今日仰安達新三郎、令弁由比浦、先之新三郎御使、欲請取彼赤子、靜敢不出之。襁衣抱臥、叫喚及數、尅之間、安達頻證責、磯禪師殊恐申、押取赤子、與御使、此事、御蒙所御愁歎、雖被宥申之不叶云々。（卷六、文治二年閏七月）

一行は山伏に變し、北方をば稚兒姿にして奥へ下つたことも、

伊豫守者假山臥之姿、逐電訖。（卷五、文治元年十一月十七日丙申）

十日壬午、前伊豫守義顯、日來隱住所々、度々遁追捕使書訖。遂經伊勢、美濃等國、赴奥州。是依恃陸奥守秀衡入道權勢也。相具妻室男女、皆假委於山臥並兒童等云々。(卷七、三年二月)

とあるによつて架空でないことを知るのである。(叡山の悪僧仲教承意等が義經に同意したことは卷六、文治二年八月三日丁丑、又同じく俊章が一行の奥州落に伴うたことは卷七、文治四年十月十七日己卯の條に見え、卷八、十二月十六日丁丑にも、俊章召捕の命の下つたことが出てゐる。)

斯く義經記は、確に吾妻鏡に據る所があつたやうに思はれるが、必ずしも、一々吾妻鏡に准據し、乃至は正確な史實を調査して筆を下したものであるのではないやうである。吾妻鏡と一致する記事でも、人物地名等に小異があつたり、(註四)泉三郎忠衡の義死が、義經記では衣川合戦の前であるのに、吾妻鏡の史實では、その以後の卷九、文治五年六月の條に、

廿六日甲寅、奥州有兵革、泰衡誅弟泉三郎忠衡。(年二十三。是同意豫州之間、依有宣下旨也云々。

と見えて前後してゐ、靜に關しても、その生んだ男子の殺害せられた事と、舞樂の事とが、吾妻鏡と義經記とでは前後してゐたり、或は靜女が梶原景茂が宴席の戯れを面責した痛快な場面(卷六、文治二年五月十四日辛卯)や、義經の母常磐が京都で尋ね出されて捕は

れた珍しい事實(同、六月十三日己未)や、義經の掣伊豆右衛門尉有綱の敗死(卷六、文治二年六月二十八日甲戌)、或は義經の名が義行(卷六、文治二年十月十日癸未、十一月五日戊申)・義顯(同、十一月二十九日壬申)等と幾度も改められた事等には觸れてゐなかつたり、又、前記俊章の事が語られず、都落及び大物の難に行家並びに前記有綱(卷五、文治元年十一月三日、六日兩度二人共明記してある)が加はつてゐないなど、これらは意識して省かれたものもあらうが、既に口碑傳説化した事實に、より多く據らうとしたに因る場合も多いのであらう。

即ち義經記は全然の假作小説ではない、而も亦純史實を録した史書でも無論無い。結局虚實相半ばした、換言すれば、史實に文學的潤色を施した、英雄傳的歴史小説である。なほ嚴正に言へば、義經を傳する意圖の下に、彼に關する傳記資料が、純史實たる(註五)と傳説たるを問はず、出来る限り、網羅的に集成せられた成果が、即ち義經記なのである。作者は忠實に感激を以て義經傳の資料を集成することに努めたが爲に、往々にして全體としての統一を破るやうな所傳があつても、猶難助捨て難く、各個の傳説をすべて主人公義經といふ名によつて結合しようとして試みた嫌はなかつたであらうか。鬼一や辨慶と出會うたのは、鞍馬時代ならば容易に納得が出来るとも、東下り以後の事件としては頗る疑惑を懸け得られぬではない。一方東下りは嚴たる史



實であり、他方鬼一や辨慶の件も餘りに知られた興味多い傳説であるが故に、而して後者を幼年時代とせずして、青年時代とすることによつて童話らしさ、或は傳説らしさから多少とも救はれる意味に於て、之に事實の證認を與へようとする——謠曲作者は最早遠慮なく鞍馬時代として橋辨慶を作つてゐる。——が爲には、一旦吉次の誘引で秀衡の許に下つた遮那王をして、再び密に上洛せしめて、平家の動靜を探らしめる他なかつたのではあるまいか。義經記は傳説味、童話味に彩られてゐるとは言へ、猶史實もかなり尊重せられてをり、そして非現實、非人間らしさが謠舞曲、御伽草子ほどになつてゐない。鞍馬の<sup>(註七)</sup>大天狗も未だ出現してゐないのである。牛若丸は蝦夷ヶ島渡りも<sup>(註八)</sup>地獄極樂廻りもしてはゐないのである。兎も角、極端に荒唐化してゐない程度に、猶史實らしさを根幹に失はない程度に、傳説的材料は殆ど漏らすなく蒐集せられてゐることだけは事實であり、そしてそれが義經記の一大特色である。所謂義經傳説の種々は、その主なるものを大抵は義經記に求め得る。完形ならざるものも、その原形は此處に既に生成してゐて、後來の多様の義經傳説の展開の本源をなしてゐる觀がある。義經記は實に義經傳説の淵藪である。<sup>(註九)</sup>

註一 歴史地理第二四卷第三・四・五號、義經記に現はれたる地理。

- 二 義經傳説と文學六六二—六六三頁參照。
- 三 同、六五八頁參照。
- 四 同、六六二頁參照。
- 五 義經記の記事内容に矛盾のあることは、中央公論第四一卷第一〇號、柳田國男氏の、義經記成長の時代にも別の立場から指摘してある。
- 六 謠曲鞍馬天狗、舞曲未來記。
- 七 御伽草子、御曹司島渡り。
- 八 御伽草子、天狗の内裏。
- 九 義經傳説と文學、六八〇頁及び日本文學聯誼(第二期)一九〇—一九五頁參照。

### 第五章 義經記と義經傳説の成長

義經記は義經傳説の集成者である。同時に義經傳説の母胎でもある。謠舞曲、御伽草子の判官物と同材或は類材の説話或は記事は、殆ど皆義經記中に見出されること、前に表示して對照した所によつても明らかであらう。逆落し、弓流し、八艘飛等戰功時代に屬するものを除き、有名なもので之を義經記に缺くのは、淨瑠璃十二段草子の淨瑠璃姫との情話、御曹司島渡りの英雄求婚説話、及び末路に關する蝦夷渡傳説等

に過ぎない。これらとても、義經記の内容と全然無關係のものではない。淨瑠璃姫傳説と島渡傳説とは、共に鬼一法眼傳説と交流し合つて居り(後者は特に密接な交渉を有し、或は本據は同一ならざるかを想はしめる。)蝦夷渡りは又その島渡りの變容乃至逆輸入的成形とすら推定せられてゐる。(註一)

義經記以前に既に成形して引繼がれたものの一例は、伏見常磐傳説である。平治所載の形の方が詳しい程で、舞曲の伏見常磐は直接それから進展したものの如く見える。陵兵衛伊勢三郎の件も平治から引繼がれて、これは前者は改變せられた姿で、又後者は更に詳しい形で採入れられてある。平治にその片鱗或は暗示の含まれたもので、義經記に於て結象したものに鏡の宿の夜盜誅戮があるが、これはその夜盜が藤澤入道・由利太郎一類で、それが一轉化して、或は異傳として謠舞曲に取材せられて此處に熊坂長範傳説が完成した。併し單に藤澤の名が熊坂に置き換へられたに過ぎない程度で、説話内容は既に義經記に於て完成してゐると言つてよい。

義經記に於て最早完全に成形してゐる——或はこれも恐らくそれ以前に完成したのをそのまま採入れたのであらうが——のは、鬼一法眼傳説で、唯、娘の名が未だ皆鶴でないだけである。(別に鬼一法眼(名、判官都通)として獨立した物語となつてゐる

のは注意すべきである。勿論同書は義經記以後のものではあらうが)辨慶の生立傳説も同斷である。(これも既に説いたやうに、別に纏つた辨慶傳としての辨慶物語及び橋辨慶があり、同じく義經記よりは後の作であらうが)その辨慶の最期に關する立往生傳説も亦完形で、且前にも觸れたが、舞曲高館に語られてゐるものと全く同様である。そしてこれは平家物語の

されども有國は餘りに深入りして戦ひけるが、馬をも射させ、かち立ちになり、甲をも打落され、大童になつて、矢種皆盡きければ、打物抜いて戦ひけるが、矢七つ八つ射立てられ、敵の方睨まへ、立死にこそ死にけれ。(卷七、篠原合戦)

と見える平家方の勇士武藏三郎左衛門有國の立往生と同型のもので、或は有國のそれが轉化したのかも測られない。故意か偶然か人名まで同じ武藏なのも面白い。(併し盛衰記では有國は篠原合戦以後、八島合戦の時まで生存してゐる。)さなくとも勇士立死の信ぜられるのは、武人時代としては相應の事であり、隨つて誇張して傳へられるに傳説英雄僧として條件の十分な西塔の荒法師が選に入るのも奇とすべきではない。腰越狀堀河夜討・吉野靜・鶴ヶ岡舞樂・忠信最期等、事實的成分の相當濃厚なものも亦大抵完形を看てる、事實の明確な根據はないが幾分の事實は含んでゐるらし

い吉野山の忠信身替説話の如きは、城方本（八坂本）平家（卷二）以外には見えてゐないから、義經記が最初の収録者かも知れない。（これらと同材の舞曲腰越堀河夜討、静、謡曲二人静、鶴岡安達静、忠信、愛壽忠信等は義經記の記述よりも更に傳説化せられ、或は改變を加へられてゐる。謡曲法事静の如きは、二人静と義經記とを併せて作られてある。）奥州落に關するものでは、笈探し傳説が既に成形し、舞曲笈探しと同材をなしてゐる。

次に義經記に於て成長しつゝあるものに、橋辨慶船辨慶安宅等の諸傳説がある。橋辨慶傳説は辨慶物語、橋辨慶（例）橋辨慶（謡）等と同材であるが、唯未だ所謂五條橋でない。故に嚴密には、未だ橋辨慶傳説ではないわけである。そして謡伽の橋辨慶は所謂牛若千人斬の系統に屬するに對し、これは辨慶物語と共に、辨慶太刀奪——後これは辨慶千人斬と轉向した——の系統に屬する。面白いのは、太刀奪——而も同じく義經の太刀を辨慶と相遠からざる悪僧が奪はうとして失敗した説話——が義經記には今一箇所ある。奈良法師の但馬の阿闍梨の件（卷六、判官南都へ忍び御出ある事）がそれで、これは歸順して判官の勇臣となる代りに、耳鼻をそがれて、追ひ放たれる不名譽を贏ち得た。事實、世相の反映でもあらうし、類話があつても不思議ではないが、橋辨慶傳

説の成生にも何等かの交渉を有つ説話であるかも知れない。船辨慶傳説は、吾妻鏡

（卷五、文治元年十一月）に、

六日乙酉、行家、義經、於大物濱乘船之刻、疾風俄起而、逆浪覆船之間、慮外止渡海之儀、伴類分散、相從豫州之輩、纒四人、所謂伊豆衛門尉堀彌太郎、武藏坊辨慶並妾女宇静一人也、今夜一宿于天王寺邊、自此所逐、電云云、今日可尋進件兩人之旨、被下院宣於諸國云々。

とあるのが史實の本據で、それが盛衰記（卷四六）には、

折節十一月の事なる上、平家の怨靈や強かりけん、度々船を出しけれども、波風荒うして、大物が浦住吉濱などに被打上て、今は不及於出船。

と見えてゐる。この「平家の怨靈や強かりけん」といふ時人の解釋風説が、漸次具象化して來て、義經記（卷四）では悪雲となり、舞曲四國落で初めて悪靈の姿を現じ、笈探しでは、宗盛父子これにあり。東國の九郎冠者戀しや」と名告りかけ、謡曲船辨慶では例の「桓武天皇九代の後胤」と堂々として知盛が勇姿を海上に浮べて來るのである。そして之を辨慶が武術或は法力を以て鎮壓することは、何れにも共通してゐる。安宅傳説の完形は言ふまでもなく、謡曲安宅に於て求められるのであるが、その構成要素は既に義經記に於て大略整つてゐると言つてよい。もとよりその本據の一は、或は外來傳説でもあらう、又完成を助けた他の諸要素もあることは、同材を取扱つた舞曲富

樫及び笈探しを通して推知し得る。けれども三の口關(卷七、三の口關を通り給ふ事)平泉寺(平泉寺御見物の事)井上左衛門との出遇(同)安宅の富樫が館(同)如意の渡(如意の渡にて義經を辨慶打ち奉る事)直江津の笈探し(直江の津にて笈探されし事)念種が關(同)と要するに義經記に記述されてある奥州落の途次、各所の數回の厄難を一箇の說話として凝成せしめたものが即ち安宅傳説である。勸進帳讀こそないが、如意渡の難が支那說話の變容である(註二)ないに關せず、同傳説の骨子は半ば以上基礎が成つてゐるのである。念種が關でも強力姿の判官を辨慶が打擲することがあり、又三の口關での辨慶と判官と二人のみが居残つて、最も後から關を通過し、且辨慶が態と落着き拂つて法羅貝を吹き、判官をこの道に懸らせて關守の手柄になさしめ給へと神佛に祈る豪放さ、或は測らず途に遇うた井上左衛門の情義、東大寺勸進と偽つて單身富樫が館に向ひ、人々を勧めに入らせた辨慶の勇智、渡場の主君折檻後、奈吳の林での血涙、平泉寺の長吏が送つた好意の瓶子に戒心して之を受けぬ武藏が用意等、義經記を披けば、安宅傳説を形づくる種々の素材の所據は直に一々指摘し得られる。

更に義經記所傳のものがその原形で、これからやがて胎生或は轉化したと思はれるものには、鞍馬天狗傳説(平治及び太平記には完形で出てゐる。)と攝待傳説(謠曲攝

待及び鶴若よりも、舞曲八島の方が義經記に接近してはゐるが、同舞曲は即ち植南齋の東遊記(卷二)に見える甲冑堂の由來傳説と同材を取扱つてゐる。)があり、

判官も、さては義經にも思ひかゝらんとて、武藏坊を召して廻文を書かせらる。九州には菊池原田白杵緒方、急ぎ參るべき由を仰せられて、雜色駿河の次郎に賜びぬ。夜を日につぎて京に上り、筑紫へ下らんとす。如何なる者か言ひけん、此由六波羅に聞きて、駿河を召捕りて下部廿餘人差添へて關東へ下されけり。(卷八、秀衡が子供判官殿に謀叛の事)

とある簡単な記事が、舞曲では清重といふ一番の題材として詳敘せられてゐる(謠曲にも同名同材曲がある。但し、この謠曲は曲名は清重であるが、内容は伊勢三郎義盛と二人に關するもので、義盛の最期は玉葉(卷四七)、盛衰記(卷四六)にも見える史實に略相當する)。同卷の泉三郎義死の簡単な記事も亦舞曲泉が城、謠曲錦戸の各曲となつてゐる。又、靜が胎内をあけ、子を取つて失へ、梶原と命じた頼朝の一語(卷六、辨鎌倉へ下る事)が、舞曲靜・金平本義經記(五之卷四段目)を経て、胎内拵傳説に進展し、近松の櫛靜胎内拵にも取材せられるに至つた。

又、義經記で成形したのから更に成長して行つたものでは、忠信最期傳説からの碁盤忠信傳説、それよりも大きな進展と變容とを遂げたのは、同じ忠信の身替傳説からの狐忠信傳説、藤澤乃至熊坂傳説から派生したのは山中常磐傳説——常磐御前殺

害傳説(舞曲山中常磐)、鞍馬出からは關原與市傳説(謡曲關原與市・舞曲鞍馬出)、腰越狀からは前々章にも言及した含狀傳説、船辨慶傳説からは沼搜の怪異譚(謡曲沼搜)の素材で、辨慶が沼底の平家の怨靈を鎮める話が派生、或は轉成してゐる。

以上説き來つた所によつて、義經記は義經傳説の藏庫であると同時に又、搖籃でもあることが理會せられたであらう。嘗にそれのみでない。義經記は義經傳説の故郷であると同時に、やがて又義經文學の淵源でもある。中世から近世へ互つての義經文學の一切が、義經記を以て發祥地としてゐると斷じたら、それは少し過言に偏するであらう。併しながら、謡舞曲・繪卷・御伽草子・浮世草子・黄表紙・合卷・讀本・實録・講釋落語・淨瑠璃脚本・歌曲・あらゆる形態に展開した夥しい義經文學は、多かれ少かれ、直接か間接かに義經記を宗として是に緣由を有せぬものは殆ど無いとは、躊躇なく言明し得られるであらう。直系の、而も文學値は甚だしく低劣な金平本義經記・義經一代記(黄表紙)・同(合卷)・義經興廢記(小幡邦器作、元祿十七年刊)・義經勳功記(馬場信意作、正徳二年刊)・義經勳功圖會の類のみに局限せられる必要を認めぬのである。そして量に於て豊富を誇る義經文學が、質に於て殆ど言ふに足らないのは、如何にも遺憾であるが、猶能に安宅があり、更にそれから出て勝れた舞臺藝術の完璧を示してゐる歌舞伎の勸進帳があり、

義經記の流れを酌んで、之と照應して義經文學と義經傳説に光あらしめてゐる。

その他にも小説では馬琴の讀本俊寛僧都島物語(文化五年刊)・種彦の合卷熊坂物語(文政四年刊)・浮世草子に風流誑平家(自笑、正徳五年刊)・義經風流鑑(同、同)・義經倭軍談(其磧、享保四年刊)・花實義經記(同、同五年刊)・互先碁盤忠信(自笑・其磧、同九年刊)・風流誑軍談(補佐、同十二年刊)・鬼一法眼虎の卷(其磧、同十八年刊)・風流西海硯(自笑・其磧、同二十年刊)・風流東海硯(其磧、元文二年刊)等の諸作が拾出され得るけれども、元來義經記乃至その主題たる義經の一生が、傳説的であると同時に、戲曲的題材に満ちたものであるが故に、やはり劇文學の方面に最も著しく展開してゐる。謡舞曲は前に表示し、又隨時説明を加へた通りであるが、それらには義經記と同材或は類材のもの——それも義經記から出たものが多からうと思はれる——と、明らかに義經記から出たものとある。戲曲脚本時代となつても、主なもの(便宜、歌曲類をも含ませる)として、伏見常磐傳説に於ける源氏烏帽子折(近松、元祿十二年一月竹本座)・平家女護島(同、享保四年八月竹本座)・恩愛積守(常磐津、所謂「宗清」、文政十一年十一月市村座)、鞍馬天狗傳説に於ける鞍馬山だんまり(安政三年十一月市村座)、鬼一法眼傳説に於ける鬼一法眼三略卷(文耕堂、享保十六年九月竹本座)、熊坂長範傳説に於ける所作事熊坂(明治十五年十一月猿蓑座)、同傳説及び是に關聯した山中常磐傳説に於ける十二段(近松、元祿三年三月竹本座)・燦靜胎内拈

(同、正徳三年閏五月か。竹本座)末廣十二段(海音、元祿十五年か。豊竹座)勝時榮源氏(明治二年十一月森田座狂言)・熊坂長範物見松(嘉永元年正月中村座狂言)・辨慶生立傳説に於ける辨慶誕生記(山本角太夫正本)・御所櫻堀河夜討辨慶上使(文耕堂、元文二年一月竹本座)及び三略卷橋辨慶傳説に於ける孕常磐(近松、正徳三年七月竹本座)三略卷嫩窠葉相生源氏(鬼外、安永二年四月肥前座)橋辨慶(文化八年三月中村座、歌右衛門七變化の内)・橋辨慶(長唄)、腰越狀傳説に於ける新腰越訴狀乃至新板腰越狀(近松か、元祿十年四月竹本座)及び擬義經物の義經腰越狀堀河夜討傳説に於ける胎内拵義經千本櫻(田雲、延享四年十一月竹本座)・御所櫻堀河夜討船辨慶傳説に於ける千本櫻渡海屋(吉野靜並びに忠信身替傳説に於ける吉野忠信(近松、寶永四年二月竹本座)・吉野靜人目千本(松貫四、安永四年一月肥前座)及び千本櫻それから出た常磐津富本清元等の吉野山道行碁盤忠信傳説に於ける右大將鎌倉實記(田雲、享保八年十一月竹本座)・鶴ヶ岡傳説に於ける同戯曲胎内拵傳説に於ける胎内拵人目千本安宅傳説に於ける凱陣八島(近松、宇治加賀藤正本)胎内拵皇合十二段(元祿十五年二月中村座狂言)御攝勸進帳(安永二年十一月中村座狂言)並びに歌舞伎十八番の勸進帳(天保十一年三月河原崎座狂言及び長唄)及び他の勸進帳劇のいろいろ、攝待傳説に於ける門出八島(改題津戸三郎、近松、義太夫正本)凱陣八島忠衡最期傳説に於ける凱陣八島と列擧することが出来る。(そして以上の中には歌舞伎・浄瑠璃・長唄等の典型的なものとして、今日と雖も

断えず繰返されるものも少くないのは周知のことである。)新歌舞伎十八番中にも、虎の巻伊勢三郎船辨慶山伏攝待があり、又、中車の爲には安宅關が脚色せられ(榎本虎彦作、舞曲の系統で胎内拵と長唄限取安宅松とから來てゐる)、その後、延若友右衛門幸四郎等によつて上演せられた。大正昭和に及んでも、松居松翁の堀河夜討六韜三略戀兵法(菊畑と義經記とに取材したもの)・義經記(大津次郎の件を脚色したもの)、或は昭和七年十一月歌舞伎座上場の吉田絃二郎氏の出陣繪卷など數へ上げられる。以上のものは勿論直接義經記のみから胎生したのではなく、多くは謠・舞曲等を通して、或はそれらを併せての影響と観るべきではあるけれども、義經記精神の伸び行く力の及ぶ所、實に壯觀と言ふべきである。

註一 金田一京助博士蝦夷傳説源流考(國學院雜誌第十九卷第九號)及び義經入夷傳説考(東亞の光第九卷第六、第八號)

二 聯講一八一—一八四頁(安宅傳説發探し傳説の項及び拙著羅生門の鬼安宅の辨慶參照)

## 第六章 結語—義經記の延長

國文學史の展開を眺める時、作品としての義經記の價値は餘りにも貧弱である。僅に中世文學の特殊形態としての軍記物の一異態として印象づけられるに過ぎな

い。併しながら義經記の内容を成す義經傳説と國民的精神とが後代に貽した感化の深さと廣さとは、洵に測り知るべからざるものがある。この意味に於て、義經記は永遠に生きてゐる。この意味に於て義經記のたましひは不滅である。

前章に述べたやうに、義經記以後義經傳説は大きな成長と展開とを遂げた。又義經記は後世文學に驚くべき影響を與へた。而も義經記の延長は、この義經傳説史と義經文學史との二方面に於けるだけに止まらないのである。吾人は更に二つの方向に於て義經記の延長を看する事實を之に添加せねばならぬ。

一は義經高館生脱傳説の發生及びその無限の進展である。謠曲にも既に野口判官が作られて、義經生脱説話の緒をなしてゐるが、大天狗に救はれて播州野口の里に通れ、教信上人と號して韜晦したといふ内容で、義經知緒記にも載せてある口碑。今昔物語卷一五の「播磨國賀古教信往生語」に見える傳説が、義經の末路に附會せられたものらしい。これは猶消極的で小規模である。それよりも一段積極的に、英雄譚的に、且寧ろ可能な自然さを以て展開したのが、所謂蝦夷渡傳説である。御伽草子御曹司島渡りが「淨瑠璃」として蝦夷地に流布したものの逆輸入がこの傳説を誘導し、一面アイヌ祖神と義經との傳説的類似からの融化が愈、同傳説の確立を容易ならしめたに

は依るであらうが、末路を憐み、その死を信じ得ぬ英雄崇拜の汪然たる熱狂が、終に義經を驅つて海を越えしめたものであることは疑ふ餘地はない。而してこの想像は頼朝の追伐を蒙つた泰衡が蝦夷へ遁竄せんとして失敗した事實を、吾妻鏡（卷九、文治五年九月三日庚申の條）に遺してゐるに看ても、全く奇想的のものでないことが容認せられねばならないであらう。内地にあつては薄運の一生を過さざるを得なかつた絶世の名將は、斯くて北海の一島に、オキクルミ大明神として夷地の尊仰を一身に集めたに満足せず、後又海を渡つて大陸の野に進出し、或は金の範軍國大將軍となり（鎌倉實記卷一七所引、金史別本（註二）の金史列將傳・奥羽觀述聞老誌卷七二、義經事實考（註三）等）、宋の胡王となり（義經磐石傳、將た清祖（註四）となり（國學志貝所引圖書輯勘序（註五））、終に世界的英雄成吉思汗となつて（内田彌八譯述、義經再興記・小谷部全一郎氏著、成吉思汗ハ源義經也）宇宙の歴史を震撼せざんば止まざるに至つた。義經記以後の義經の活躍の如何に雄大で華々しく、義經記以後の義經傳の如何に恵まれた輝やかしいものであるかを想ふ時、それが兒戯に近い空想に満ちたものであるとはいへ、我等の鬱懷が我が判官主従と共に愉しく消散し去ることに、果して何等の意義を見出し得ないであらうか。義經生脱説話は即ち義經記作者の注ぎ盡くさなかつた判官最良を、國民が繼承し増大して、義經記作者が綴り得なかつた義經記續篇を書いてゐる

のである。

今一つは義經記の我が小説史上に於ての新しき更生現象である。第一章に論述した如く、義經記は軍記物の一異態として、特に傳記中心の歴史小説の創始に寄與してゐると觀られ得るのであるが、唯惜しいことに、義經記に於て試みられた歴史小説の様式が、更に意識的に促進せられ達成せられる機運が相踵がなかつたことが、この形態の發生を殆ど無意味に近いものにしてしまひ、僅に皮相的な外形に於ては信長記、太閤記の如き後繼者を出したけれども、これらは縦ひ多少なり純史傳とは言ひ難い分子をも含有するとしても、小説の範疇には入れ難い。寧ろ軍記物の中で盛衰記、太平記の類の特質の一たる史的事件の精銳主義を偏重した——それが併し主目的であるからであるが——實録物と呼ばれるべきである。眞書太閤記の如きに至つては、通俗小説と呼ぶことは許されるであらうが、猶實録體の讀物の通俗化と目するが妥當であらう。眞の歴史小説史或は傳記小説史は終に展開を見るに及ばなかつた。併しこの義經記の蒔いておいた種子は空しくはならなかつた。遙に降つて殆ど忘れられた頃になつて新しく芽生した。馬琴の讀本こそは或意味で義經記の再生であり——馬琴は義經記を初め軍記物の愛好者でもあつた——義經記作者の企

圖した如き小説様式の完成であると言へる。弓張月がさうである。巡鳥記がさうである。八犬傳が又さうである。馬琴の讀本を純粹な意味での歴史小説とは呼ばれ得ないであらう。けれども題材を史實に或は史上英雄に採り、之に文學的潤色を施して語り將た傳するといふ限り、歴史小説乃至は傳記小説、英雄小説といふ稱呼は必ずしも不當ではない。少くとも義經記も亦この意味での歴史小説であり、傳記小説であり、英雄小説であり、而して馬琴の讀本が——又その悉くが——全然義經記と性質を同じうするものとは、勿論言ひ得ないのであるけれども、そして又馬琴の讀本を完成せしめるに與つた要因は他にも數々挙げ得られ、獨り義經記と言はず、粉本となり範例を示した内外先進文學は、多過ぎる程多いのも事實であるけれども、我が歴史小説史の足跡を顧みて、義經記から馬琴の英雄小説への成長を識認せしめられることを此處に強調しても、それは過大な言辭では決してないと信ずる。加之、一般に馬琴の專有物視せられてゐる儒教的教訓主義すらもが、既に義經記を形成してゐる中樞的思想として作品を特色づけてゐる（馬琴ほどに露骨でないだけに、却つて自然さに於ては勝つてゐる位である。）のは、愈、因由の淺くないことを想はしめるものがあ



に著しい中世思想——の主な一要素——の傳統が江戸時代の武士階級の道德觀によつて明確に凝結固定せしめられたものの反映に外ならないのではあるが、中世文學中寧ろ佛敎的色彩よりは珍しく儒敎的論調のより顯はな特質の一面が、思潮史的にも義經記から馬琴への展開を、如實に且自然に見せてゐることを證する契機を、吾人に掴ませてくれるのを指示したのである。以上の如き觀點からして、義經記は又、異色を有する軍記物であるといふだけでなしに、國文學史の上で、新に注意を促すに値する一作品であるといふことを力説してこの小論を結ばうと思ふ。

註一 第五章註一參照。

二 この書が偽作であることは、篠崎東海(東海談)によつて觀破せられた。

三 この書名及び序も偽妄であることは、桂林漫錄・安齋叢書等によつて論破せられた。

## 小督と小原御幸

### —平 語 餘 錄—

平家を讀む度に、私の聯想をいつもさまつてあそ、こへ運ばずに措かない場面がある。その場面とは、平家の中で最も知られたロマンティックな挿話の、一で、そして又私の最も好きな哀詩の、一であるあの「小督」の一節である。さうしてあそ、ことは、源氏物語の首卷で誰にも親しい、そして又私の最も好きな名文の、一である、あの靱負の命婦が帝の御使として桐壺の更衣の母君を訪ふ一節である。

と、これだけでもう十分かも知れない。いづれも詞章を引くにも餘りに有名な部分であるのだけれど、

比は八月十日餘の事なれば、さしも隈なき空なれ共、主上は御涙に曇せ給て、月の光も瞳にぞ御覽せられける云々。(平家物語卷六)

と調べ出される美しい詞曲は、寮の御馬に跨つて明月に鞭を揚ぐる、彈正大弼仲國が、「峯の嵐か松風か」幽かに響く琴の音をしるべに、尋ぬる人を探し出でて、主上の御書を

傳へ、御返事賜はつて内裏へ歸り參る様をあはれ深く語り續けて、

今は定て御寢も成つらん誰してか可申と思ひ南殿を指て參る程に、主上は未夜邊の御座にぞ坐ける。南翔北翺、難附寒温於秋雁、東出西流、唯寄瞻望於曉月と御心細げに打詠させ給ふ處に、仲國つと參つゝ、小督殿の御返事をこそ參せけれ。主上不斜に御感有て、さらば汝體て夕去具して參れとぞ仰ける云々。

と敘してゐるあのくだりの情景と文詞とを、

野分だちて、俄に膚寒き夕暮の程常よりも思し出づる事多くて、靱負の命婦といふを遣す。夕月夜のをかしき程に出し立てさせ給うて、やがてながめおはします(桐壺卷)

夜半を、その月影ばかりぞ八重葎にもさはらずさし入る蓬生の宿を尋ねて、御文をば母北の方に奉り、入方の空清う澄み渡つた月の色、流るゝ涼風、催し顔の蟲の聲々、立ち離れにくい草のもとを、涙の中に後にして、御返り事を齎し歸つて參つたが、

命婦はまだ大殿籠らせ給はざりけるを、あはれに見奉る。御前の壺前裁のいとおもしろき盛りなるを御覽するやうにて、忍びやかに、心にくき限りの女房四五人侍はせ給ひて、御物語せさせ給ふなりけり。この頃あけ暮御覽する長恨歌の御繪亭子院のかかせ給ひて、伊勢貫之によませ給へる大和言の葉をも、唐土のうたをも、唯その筋をぞまくらごにせさせ給ふ。いとこまやかに有様を問はせ給ふ云々。

と、あの物語が展げてくれる相似た麗しい繪卷の一端と並べて眺めずにをれなくな

るのである。「御歎不斜、晝は夜の殿にのみ入せ給て、御涙に沈ませ御座す。夜は南殿に出御成て、月の光を御覽じてぞ慰せ坐しける」かの主上は「程經るまゝに、せん方なら悲しう思さるゝに、御方々の御宿直なども絶えてし給はず、たゞ涙にひびて明し暮させ給ふこの帝である。「羽をならべ、枝をかさはさむと契らせ給うたのは亡き更衣であつた。「天に栖まば比翼鳥、地に有らば連理枝と成んと、天の河の星を指て、さしも御契淺からざりし」は高倉院の小督ではなくて、秋の霧に被侵て、朝の露と消えさせられた後白河院の女御建春門院ではあつたが、それは同じ條の小督の物語に引續く平曲の敘説の詞辭である。

小督局の哀話がもつ史實的(註)分子の量の如何は暫く措き、又相似た悲詩的の事件の經過と背景と情趣との自らな一致が生じ來るものがあるとしても、平安文學の流れをも容れて其の味にも豊かな否源氏の影響を明示してさへある箇處をも有する平家の作者の詩想の中に、かの紫女の示してくれた情景の摹本が、一つの見えざる(或は寧ろ有意的であつたかも知れない)力となつてはたらいてゐなかつたことを、誰が斷言出來よう。

そして又、右の二つの場面を比べる時に、やはり其處に、争はれない二つの物語がも

つ各の色とにほひと音楽とをそれ〴〵明らかに感ずることが出来るやうな氣がする。

註 小督が禁中から姿を消して、嵯峨野に隠れた史實に關しては、俊成女の建春門院中納言日記、永安四年春、御方違行幸の條參看。

これも有名な、そして平曲では最も重要とせられてゐる灌頂卷、小原御幸の一節、

庭の若草茂合ひ青柳糸を亂りつゝ、池の浮草浪に漾ひ錦を暴すかと謬たる。中島の松に懸れる藤波の裏紫に開る色、青葉交の遅櫻、初花よりも珍しく、岸の醜醜ウツクシさき亂れ、八重立雲の絶間より、山郭公の一聲も、君の御幸を待顔也。法皇是を寂覽有て、かくぞ被遊ける。

池水に汀の櫻散布て浪の花こそ盛なりけれ

あの名文句を誦する度に、いつも私の記憶が喚起されて來るのは、流布の狭衣物語の冒頭である。これはたゞ文章上の影響ではあるが。

少年の春は惜しめども留まらぬものなりければ彌生の二十日餘にもなりぬ。御前の木立なにとなく青み渡りて木暗きなかに、中島の藤は松にとのみ思はず咲きかゝりて、山郭公待ち顔なるに、池の汀の八重山吹は井手のわたりに異ならず見渡さるゝ云々。

そして「池水に」の後白河院の御製は、千載集(卷二、春下)には、

みこにおはしましける時、鳥羽殿に渡らせ給へりけるころ、池上花といへる心をよませ給うける。

と詞書して載せられてある。

野村八良博士の鎌倉時代文學新論に論じてあるやうに、閑居友卷下「建禮門院御いほりにしのびの御幸の事」と平家の此の條との關係あることは疑ひ無く、乃至は、閑居友のその原文とみるべき「かの院の御あたりの事をしるせる文」があつたとすれば、平家と閑居友との先後を直ちに定めずとも、少くとも其の存在の想定の可能性を遺筆めいたもの——そして其の内容は閑居友の文に略、其のまゝ寫されてゐると考へてもよささうに思はれる——を、上に述べた狭衣の文と、法皇の御製との後に連繫してくれば、かの小原御幸の一段の敘事詩的素材の骨子が出來上つてくるわけである。

### 御伽草子・假名草子・舞の本

御伽草子・假名草子・舞の本、此の三つは、それ／＼異なつた立場に在る作品の一群に便宜的に與へられてゐる名辭であるけれども、仔細にその内容に立入つて考察する時は、その餘りに近似し交錯した分類的稱呼であることに驚かされる。そして此の三つのものが一括して取扱はれても不都合でないばかりか、却つて便宜である場合が屢あるといふことが容認せられねばならぬ程、相互の間の境界が混沌としてをり、相集結して一種の不思議な色彩と味はひとをもつて擴がりながら、國文學の一分野を領してゐる事實を否定するわけにはゆかないのである。時代からいつても、様式からいつても、互にかけ離れたものでなく、縦にも横にも密に交渉を有してゐるのである。

先づ御伽草子といふ名は、普通室町時代の短篇小説の汎稱に用ゐられてゐる。江戸時代から最も普通には所謂

- |      |      |      |        |
|------|------|------|--------|
| 文正草子 | 鉢かづき | 小町草紙 | 御曹子島渡り |
| 唐糸草子 | 木幡狐  | 七草草紙 | 猿源氏草子  |

- |      |      |        |                          |
|------|------|--------|--------------------------|
| 物臭太郎 | さゞれ石 | 蛤の草紙   | 小敦盛                      |
| 二十四孝 | 梵天國  | のせざる草紙 | 猫の草紙                     |
| 濱出草紙 | 和泉式部 | 一寸法師   | さいき <small>(刊本誤)</small> |
| 浦島太郎 | 横笛草紙 | 酒吞童子   |                          |

の二十三篇の稱呼になつてゐたが、室町時代同種の他のすべての作品を蔽はせて然るべき恰當の名稱である。(鎌倉時代に互らせてもよからうし、少くとも内容は鎌倉期に既に語られたものも随分あるのであらう。)御伽は即ち伽婢子あまのこ御伽物語の御伽では「Nurse's Tales」である。純童話乃至は「Märchen ; oder Kinder- und Hausmärchen」といふよりは、やはりもつと範圍の茫漠とした御伽噺、所謂老人婦幼の慰みばなしといつた内容を極めて利便に表示してゐることばであると思ふ。

併し事實についてみると、その蔽はるべき範圍が如何にもはつきりしてゐるやうではつきりしてゐない。所謂假名草子との限界は殊に模糊としてゐる。假名草子は普通一概に江戸時代初期の作物の總稱とされてゐるやうであるが、その創作の目的と態度はやはり訓蒙にあり、御はなしに在る。だから前に挙げた伽婢子・御伽物語のやうな名を却つて假名草子の中に見出すのである。(此の心持は浮世草子から讀本へ、又、赤本・黒本・黄表紙の類から草雙紙・合巻へも流れてゐる。否、すべての Narrativeの

中に多少とも含まれる心持でもあるが、御伽草子・假名草子にあつてはそれが重要な意義をその存立の上に有してゐる。

學智ある人の目をよるこばしめ、耳をすくぐためにせず、只兒女の聞を驚かし、自ら心を改め正道に趣く一つの補とせんとなり。

といふのが伽婢子の了意が自序である。御伽草子の立場と選ぶところはないのである。又、その假名草子といふ名目の因由する、平俗な假名文字に和けて説き聽かせるといふ側から言つても、平安朝の假名文學の末流をなしてゐる御伽草子と假名草子とを同時代同型の刊本について併せ讀むならば、一寸その屬種を分つ必要を感じないほどである場合が屢々ある。畢竟、假名草子と御伽草子とは、各異なつた方向からいつか無造作に附けられてそれが行はれてゐるといつた名目である爲、互に交錯し重なり合ふ部分が出来ても不思議はないのである。

御伽草子とは繪卷や、奈良繪本や、繪無しの古寫本で讀まれてゐたのであるが、江戸時代になつて大抵は刊行された。例の御伽草子の二十三部のやうに、所謂御伽草子式の横本の體裁で板行されたものもあるが、多くの假名草子が創作せられ且刊行せられた寛永正保から明暦萬治寛文へかけて、同じやうな體裁で續々室町期の小

説類が上梓せられた。だから前にも言つたやうに、既に創作の動機と表現の様式とに於て親近なものが刊行書としての形式の上でも亦同じ型で而も同時に並出されたのであるから、一層兩者は茲で混錯させられる機會と可能性とを増したのである。單に刊本の形の上から一概に假名草子と呼ばれるに至つては一層煩雜で紛らはしくなる。併し取扱の上からはやはり大體兩者を對立的に用ゐておきたく思ふ。いづれにしても便宜的な分類ではあるが。

時代で限界を區劃すれば一番簡明であるが、そして大體はそれによるのが普通であるのだが、御伽草子の大部は創作年時の不明なものに屬し、中には刊本のみ傳はつて古寫本の存在を推測することは可能であつても、微證のないものもあり、又事實、創作年時も様式も全然兩者の限界に立つと思はれるやうな作も少くない。そればかりではない、從來概括的に御伽草子の名を冠せられたが故に室町時代の小説として取扱はれて怪しまれないものの中にも、江戸時代の作品の混入してゐるものが或は意外に少くないかも知れない。例の二十三部の内ですら、例へば猫の草紙に

まづ慶長七年七月中旬に、洛中に猫の綱を解きて放ち給ふべき御沙汰あり云々。

とあるが、慶長七年は家康の將軍宣下の前年であるから、室町季世として取扱つても

許されるとしても、右の文は其の年に書かれたとは讀まれ難いのみか、

天下太平國土安穩かゝるめでたき御代にあふこと、人間は申すに及ばず、鳥類畜類に至るまで、ありきたり御政道なり。まことに堯舜の御代にも勝れたることなり。

と書きおこし、

かやうの御政道は昔が今にいたるまで、ありがたき御事なり。君もゆたかに民さかえ、久しくめでたき事ばかりにて、心ゆるがせなるのみなり。

と筆を止めた文詞は、假令かの小説が何等かの時代諷刺を含む性質のものであるにせよ、又此の賛辭に類型的な多少の誇張があるにせよ、江戸幕府の勢威略、確立し、政令行はれるに至つた事を語るものであると考へられる。兎も角純然たる室町期小説とは言ひ難いのである。

又、後にも無論用ゐられた語でもあるが、「御行水よ」「御湯殿してまゐらせよ」と言ふ、鉢かづきの人々の上に、其の物語の内容と共に平安末から鎌倉頃の氣分に近いものが漂ふのに比して、「藥の風呂の候ふに」「其日の風呂の奉行には」と物語る「唐糸草紙」は、全作の詞章に見ても吉野朝以前に溯らせる事の無理であるは言ふまでもないばかりか、「大御所さま」の敬稱も家康に始まつたのでは勿論ないけれども、特に此の小説では「大

政所」のやうな意味に用ゐてあるのも却つて慶長以後のものである反證のやうにも思はれ、又、松が岡殿が縁切寺の東慶寺である事も容易に想像がつくが、同時に、秀頼の息女で元和元年家康の命に依つて廿世を継ぎ正保二年に寂した天秀泰和尚などが聯想せられぬでもない。(少くとも此の小説の内容がそのまゝ、頼朝時代の傳説ではなく、北條時宗の後室覺山志道和尚の東慶寺開基の弘安八年より後の成生或は創作であらう事は確と言へよう。)但し右はなほ疑問を添へて附言しておくだけで、論斷の材料にすることは避ける。

ところで私は、猫の草紙を前述の理由から假名草子の部類に入れようとは思はない。それは因襲的な名稱にこだはる爲からではない。内容の性質上、徳川初世の小説としての假名草子とは自ら異なつた感じ、そしてそれはやはり他の二十二部乃至は室町期小説のすべてがもつと同じ氣分の中に裹まれてゐる作であるからである。(その中では併しかなり徳川初世の氣分も混つてゐるものではあるが。)私は年代が明らかに徳川期のものである徵證のある作でも、室町期の説話的短篇小説即ち所謂御伽草子に準ずる同系のもの、をなほその名の下に屬せしめて、徳川初世に於ては所謂假名草子と並行させて取扱ひたいと思ふ。平出氏の近古小説解題にも漏れてを

り、朝倉氏の日本小説年表(舊版)には年代不詳部に「〇かくれ里 二(元祿五年板の廣益書籍目録(五之巻)舞並草紙部には「二、かくれ里」と見えてゐる)」とある。惠比須、大黒の滑稽合戦譚は、同氏の<sup>新</sup>日本小説年表では「〇かくれ里の物語、二」として、卷末に「明暦二年、ぬ屋仁兵衛」と附記してある。それと同じ物であらうが、これは明暦の新作ではないと思ふ。東大國文學研究室蔵の上下二卷の奈良繪古寫の横本の方が古からうと思ふ。他の奈良繪入御伽草子本同様に、それが後に刊本になつたのであらうと思はれる。が、その創作年時は文中徒然草を引き、太平記の文を借りて用ゐてあるから、兩書以後であるは勿論のこと、方廣寺の大佛の事が見えるのから推定して、徳川初世(恐らく再建の慶長末以後)かと考へられるのである。が大佛殿焼失の慶長七年十二月から秀吉創建の天正十四年まで溯らせれば論なしとして、よし徳川期の作であり、又假に明暦の刊行に程遠からぬ時の創作であつたとしても、私はやはり之を魚鳥平家系統の御伽草子として取扱ひたいのである。

序に附記するが、近古小説解題に漏れてゐるといつたが、同書三二〇頁鼠の草子の解題に附して、

余また別に鼠草子といふ繪巻物を見たることあり。断簡なり。中に京の大佛三十三間堂などの文句見えたれば、こは慶長頃のものならん。

とあるのが、どうも此の「かくれ里」と同じ物のやうな氣がする。

次に舞の本であるが、これは幸若舞曲の詞章であることに論は無い。此の點では他の兩者との限界が眞に明瞭である。併しながら茲に私が考へようとするのは、讀み物としての舞の本——舞の草子といふ方が此の場合或は適切かも知れない。——である。此の立場からすると、他の兩者との交渉が甚だしく密接になり、忽ち限界が漠として來るのである。特に寫本としては御伽草子の中に混融し、刊本としては假名草子の間に伍してゐる。

舞の本の曲目は貞享・元祿の書籍目録に載せてある所謂三十六番、それに群書一覽所載の三十六番中で前の三十六番中に無い二番(夢合劍鑽歎、それから靜切兼會我、較馬出、張良以上の内、泉が城を除く四十一番は國書刊行會本の新群書類從第八、舞曲部に收められてゐる。)、其の外未刊のものに日本記九けつのかひの二曲(この程藤井乙男博士蔵の古寫本を借覽することが出來た。<sup>註二</sup>)。内閣文庫にも日本記の節付の寫本がある。及び小うたひ物が數番ある。その他にもなほ幾番かあつたであらうと思はれる。<sup>(註二)</sup>

元來が舞の詞は、既に作られてあつた草子を用ゐたのもあらうが、亦新に作られた

舞曲の或物が別に読み物としても行はれたことも確である。前に引いた元祿五年板の廣益書籍目録などでも、謠曲は別に目を立ててあるのに、舞並草紙部として舞の本と御伽草子類とは同列に取扱つて怪しまないのも此の間の消息を語つてゐるものであると思はれるが、事實に於ても、刊本の三十六番揃は別として所謂御伽草子二十三篇中の演出草紙は即ち舞曲演出であり、又舞曲築島は新編御伽草子(下)中に收められてをり、繪卷としての繼信忠信記(二卷)(未見。新詳書類從舞曲部の幸田博士緒言、及び高野博士著日本歌謠史五九八頁所引)及び刊本としての八島にこう物語(上下)や新編やしませ合戦(上下)やが舞曲八島と同じ物であり、

附記。近古小説解題四三三頁には八島にこう物語刊二卷の解説中

諸曲攝待及び幸若舞草子八島と同じ事がらを寫せるもの、松會開板とあり、萬治寛文頃の刊行ならんか。

とあつて、別書のやうに讀まれるけれども、私の繙讀した松會開板本(上下二卷一册、一葉缺。舊東大圖書館藏、大震災焼失。恐らく平田氏の聞せられた原本)は、文詞全然舞曲八島であつた。なほやしませ合戦は大阪新町橋東詰、藤屋伊兵衛板とある帝國圖書館藏本。

奈良繪入古寫横本として全く普通の御伽草子の體裁になつてゐる築島(舊東大圖書館藏、燒失)、入鹿(高野博士藏、未見)、宙之卷(家藏)、景清(新詳書類從舞曲部緒言所引)などや、大形堅本の奈良繪

入古寫、烏帽子折草紙(京大圖書館藏。舞の本烏帽子折)やが傳はつてゐるのでも明らかである。(なほ奈良繪入の舞の本は他にも屢見受けるし、又丹緑のまどり本になつて板行せられてゐるものも随分あるが、今一々記憶してゐない。)即ち舞の本が内容から言つて、戯曲としての特殊性よりも、そのまゝ草子類として讀み物との共通性を多分に有してゐるが爲であることが知られる。

かくして以上三種の名目によつて代表せられてゐる三様の形態をなす文學は、別種の物であるが如くして別種の物でないやうな事由と實際とをよのづから提示してゐるのである。

私は少し輪廓ばかり眺め過ぎたやうである。三者の混融紛淆といふ事は、書冊の體裁や、刊行の事情やといふ外的の原因のみから偶然に生じた簡単な問題にとゞまらぬ事は、今まで述べた通りであるが、内容について改めて三者を通觀する時、其の素材の種類、品質、主題の取扱ひ方、表現の手法、對讀者關係等に於て、三者独自の儼然たる境域劃線を見出す前に、先づ三者に共通した、むしろ相倚つてつくり出してゐる一の特別な世界に導き入れられてしまふのである。

第一に其處は、傳説の世界、童話の世界であることである。訓蒙であり、御伽である



以上、さうであるのに不思議はない。そしてこれは又、同じ近古の謠曲や軍記物と頗つべき近古文學乃至近古思潮の一面を最もよく現す特色でなければならぬ。近古時代は實に我が國に於ける國民傳説・國民童話大成の時代である。上代以來の神話をはじめ各種の説話が單に地方的口碑として傳説資料として集録せられるといふ前代までの傾向から一步を進めて、一つ／＼がそれ自體まゝとまつた説話として獨立しようとし、一面それがいろ／＼の様式で作品化せられつゝ、國民的な播布遊動をおのづから盛んに營み始めた時代である。だから新しく發生した説話と竝んで、舊い説話や外來説話がさまざまの姿で替生し、接合し、分離し、俄に其の數量に於て増大してゐるのを見るのである。水江浦島子が物臭太郎並に改名させられたのも、栗津冠者が倭藤太に百足退治の功を奪はれたのも、此の時代であり、又御伽草子の世界でのことである。羽衣傳説や安宅傳説が謠曲を通して國民傳説として完成したのも此の時代である。桃太郎や舌切雀が國民童話の形態を成すに至つたのも室町から徳川初世へかけての間であらう。印度・支那の説話の移入は古くからあつて珍しくないけれども、泰西所産の説話が日本化して殆ど其の本據の痕跡を消してゐるやうなものに、例へば牛若丸地獄廻りに於けるエニード(大正五年十一月號 東洋文藝)や、又坪

内博士の所説に隨へば百合若に於けるオディッセイが在るのも(明治三十九年二月 國語學)此の時代で、前者は御伽草子、後者は舞の本に於てである。内國的にも上代神話にまで溯源し得る母形はあるとしても、一寸法師が世界的な遊離説話特に西歐の親指トムの傳説に關涉あるべき想測が可能であり、又その西洋一寸法師傳説中で物臭太郎の原形らしいものをグリム童話集が語つてゐたり、或は又狂言の暇の袋や竹子争に同じグリム童話にある百姓娘の御妃の智慧譚の片影を見るやうな氣がせられ(勿論グリムから直接移入したといふのではない)、少し後ではあるが、毛利元就矢束の遺言にイソップの寓話を見出す如きも、即斷は避けたいとしても、東西の精神交通史の上に考へらるべき資料とはなり得よう。

兎に角御伽假名舞々、此の三つの草子物の素材は、幾つかの類型的な分類の下に列べる事が比較的容易であるほど、概しては個性の少ない説話的なものばかりと言つてよい。即ち純童話異類物(寓話の要素を含む)本地物・繼子物・祝義物・戀物語及び兒物語・怪異譚・靈驗譚・懺悔譚・復讐譚・英雄譚等に分けるのが便宜であるが、舞の本は特に其の大部分は英雄譚に屬し、併し築島の如き本地物や、濱出の如き祝義物もある。怪異譚・懺悔譚は假名草子に至つて一段の展開を見る。(前者の代表には伽婢子・狗張子の

類、後者には三人法師の系統を引く七人比丘尼、二人比丘尼、四人比丘尼などを擧げねばならぬ。素材の上から観る時、三者殆ど其の異を見ないのである。

さうしてその三者の創つてゐる世界が通じて、思ひきつて單純で、幼稚で、蕪雜で、平俗で、魯鈍で、大げさで、馬鹿げさつてゐる事が、嗤ふべく、憐むべく、併し同時に、これら稚蒙なるものみに恵まれた、そして高く進んだ頭や複雑した心では産み出したくても産み出し得ない、貴い或物、雜然混沌たるもの、持つ面白味、くだらない、つまらないといふ感じに共存する一種の快さ、無意味の中に意味を讀まうとする不思議な努力の歡び、それらはやはり此の世界にひたることによつて味ふことが許されるのである。

第二に、これも近古文學乃至思潮の特色である佛教の通俗說法と儒教道德の形式的訓化の標本である事である。中には既にはじめから其の創作の目的が其處に在る物もあり、特に佛徒の手によつてたゞ說法の具として説話が語られ、草子が書かれてゐるらしい物もかなり多く、又内容に殆ど必然の關係ない説話を強ひて宗教的倫理的に色づけようとしてゐるものも随分あるのである。一卷の末尾に、

これたゞ長谷の觀音の御利生とぞ聞えける。今に至るまで觀音を信じ申せば、あらたに御利生あり

と申し傳へはんべりける。この物語をきく人は、常に觀音の名號を十返づつ御唱へあるべきものなり。南無大慈大悲觀世音菩薩。

頼みてもなほかひありや觀世音二世安樂のちかひ聞くにも (鉢かづき)

今は末世のこと、か程にこそはおはせずとも、神や佛を念ずる人は、やはか其のしるしの無かるべき。

南無藥師瑠璃光如來、おんころく、せんだりまとうぎそわか。 (さいれ石)

かゝるはかなきうき身をつらくくわんじ、これを御らんずる人は、御心をすなをにして、なさけのみちをほんとして、こしやうぼだひのことかんようなり。さればふるきうたにも

よの中はゆめかうつゝかうつゝともゆめともわかずありてなければ  
じやうこも今も末代も、ためしすくなき事共と、かんぜぬ人はなかりけり。 (朝顔の露の宮)

といつた常套の文詞が殆ど一種の約束のやうに附けられ、竟には、

毎日一度此の草子を讀みて、人に聞かせん人は、財寶にあきみちて、さいはひ心にまかすべしとの御誓なり。めでたき事なかく、申すもおろかなり。 (物臭太郎)

と、懶惰者の偶然の出世譚を經典化しようとするものも可笑しい。そして此の童話の内容なり、氣分なりと、此の思想とが餘りに簡易に接ぎ合はされて、しかも平氣なその心持が愉快である。おもかげ物語でも

此の物がたりよまむずるところには、十ばうのしよ佛あまくだらせ給ひまもり給ふとなり。

といふいやちこな御利益があるのである。即ちその物臭太郎が一名おたがの本地

と呼ばれ、おもかけ物語が又の名を辨才天本地と稱するにも現れてゐるやうに、作者の此の説法的態度は、内容の本地物靈驗譚・懺悔譚等に應ずるものであるは勿論である。二人比丘尼などになると一層作者の無常觀なり其の説法態度なりが意識的になつてゐるのを見る。だから此の空氣の中では、常磐でも（舞曲常磐問答）牛若でも（天狗の内裏法問）などは茶飯事であり、首の座に直つた荒武者の五郎時致が、聽聞の老若に「かうべをちにつけ」おがまぬ人はなかりけり」といふ老練振で三部經の功德を説いても（舞曲十番切）少しも妙ではないのである。（ついでに彼は箱根育ちとはいへ曾我物語でも凡ならざる佛法者となつてゐる。）

儒教道德の鼓吹は「仁義禮智信」の常用語の濫發にも一班が窺はれるが、此處では特に孝行談として著しくあらはれ、唐糸草紙・蛤の草紙・七草草紙・二十四孝・大悅物語・法妙童子・周防の内侍等。多くは神佛の靈驗譚に關してゐる。それに関聯して復讐精神の極端な形式化義務化をば、あきみち物語などに看る事が出来る。監物草子・恨の介に至つては、殉死の習俗の典型を最も如實に示すものである。

そして又、この佛法思想（垂跡思想を含めて）——各派の混濁といはうより常識佛説、素人説法の感あるものが多い。が先づ概しては淨土教であらう。——と儒教思想と

は、大抵の場合此處では無批判無頓着に提携交錯しゐる。人として報恩の心なき者は木石に譬へ、

只人には情あれ情のある人は行末めでたき由申し傳へたり。（浦島太郎）

と訓へてゐる草子は、その太郎は後に丹後の浦島明神と顯れて衆生を濟度し、龜も神と顯れて夫婦の明神となつたと述べてをり、法華經の妙文と六字の名號の功德をたへる寶滿長者が父母の鴻恩を説くことを忘れないのは、佛典の印度説話に本據があるかも知れないが、

かみをおもんじ、しもをあはれみ、おやかうく、にほとけををがみたてまつるものは、かならずさいごふあるべからず。（寶滿長者）

といふ作者の見解は正に此の世界の理想であり、信仰である。更に天狗の内裏の末文の如き、

かやうのことをきくからに、此よのうちにはじんぎれいちしんをおもてとし、うちにはごしやうぼだいをねがふべし。これもげんじすゑはんじやう、百代のごくわはうゆゑとぞみえたりける。

と思ひ出したやうに、ばら／＼のまゝに取つて附けた思想と説明とが、相變らず平氣で雜居してゐるところに、そして其の中にあつて、かの二大精神が無造作に當然の事として並べ訓へられるところに、此の世界が一段と遺憾なく露出せられてゐる感

がある。併し滑稽さと共に其處に感ぜられる一種の空虚な哀感即ち泡沫の現實性に懸る疑惑と、民衆の倫理生活に於ける形式的な安易無氣力の惰性とを前にして、一方に於て現世を否定して永世に憧れ、幻想に遊ばうとする欲求の徒らに概念化せられたやうな姿に、物足りなく齒がゆいながら同感する心持を、讀者は時折見出させられるのは皮肉である。

其の他、故實を重んじ、系圖を誇り、祕傳を尙び、過去を懐かしむなどをはじめ、世相と思潮の上にはあらはれた各様の時代意識を三種の草子の各作品について索めるのは容易な事であるが、それよりも三種に共通した第三の主要な點として數へねばならぬのは、作者の不明といふ事である。そして或物は、或はかなり多くの物は、數人の手によつて有意又は無意に改變せられてゐるといふ事である。御伽草子の作者は、繪卷の詞書の筆者として傳へられる僅かの人々(それも原作者たる確證はない)。或は極めて稀に作者に擬せられる人(例へば鴉鷲合戦物語の一條禪問があるのみで、殆ど皆不明である。舞の詞も幸若丸達<sup>が</sup>すべて本文まで創作した徵證は無い。假名草子に至つて、漸く明白な作家に、如備子や石平道人の鈴木正三や山岡元隣、淺井了意等を數へ得るが、大部分はやはり無名作家の手に成つてゐる。且、寫本が轉傳して刊本

となる間に少異錯簡續出し、同一書を諸本について對比すると殆ど全く同文の物はないと言つてもよい位である。三人法師などは數本あるが、何れも善本ではないといつた有様である。(此の期の物に限らぬ事であるけれども、作者が不詳であるだけ一層改變を受け易いのである。)即ち個性の磨滅、大衆の共同創作といふ意味が、内容の傳説の胎生進展の場合と二重に茲に考へられねばならないのであつて、これ亦近古文學特に敘事詩的作品即ち軍記物と相通する性質である。

第四に、個性の磨滅は模倣に墮して獨創に乏しい事を意味する。清新な感性の光らないところ、平板な卑俗さを免れない。三種の草子の素材が類型的な事は既に述べた。其の主題の取扱ひ方に於ても、表現の様式に於ても概して極めて一律である。平安朝文學とは其の思想、感觸を異にするけれども、なほ、多くの戀物語、兒物語、繼子物語の類は大體に於て前代物語文學の模倣踏襲であり、その崩壊したものと云ふも不可なきものである。又魚鳥平家鴉鷲物語、十二類繪詞、佛鬼軍、雞鼠物語、かくれ墨染櫻(二名)、草木太平記、河海物語等異類物の合戦記は軍記物の滑稽化であり、尤の雙紙、可笑記、仁勢物語、犬つれ、誰我身の上の如きは擬草子擬物語の一群である。文詞に至つても稀に整つたもののあるを除き、大抵は幼稚燕雜で紋切型である。語法も統

一のない事に於て統一を見、比喩の如きも著しく低級な常套語が繰返される。勇將は唐土ならば張良、樊噲、本朝ならば田村利仁、美人の形容は楊貴妃、李夫人ならずば衣通姫、小野小町、常に「物によくく」譬ふれば」と入念に説き明す煩勞をいとはず、「なかなか申すばかりはなかりけり」と言語道斷の歎稱を吝まらず、末繁昌に榮え給ふ「大團圓はめでたい限りであるが、悲しい時は必ず流涕こがれ泣かねばならない。舞の本にあつては多くが同一主人公に關する連續した物語である爲、その各曲さる間「さる程に」と語り出して、内容と共に「さても其の後さる程に」の古淨瑠璃に其のまゝ、聯接してゐる。

併し此の完全な情意の表出の出來かねる無自覺、單調な能力の奥に、伸びようとする完からんとする無意識な自己改造のあがきを潜め、新奇を求めてやまないあどけない心の跳躍を慰はせ、そして平凡な停滯の裡に變つた方向への流動展開の兆がおのづから含まれてゐる。御伽草子の中から所謂國民的な五大童話が胎生完成した。舞の本から金平本と共に大まかな時代歌舞伎味が生れて來ようとしてゐる。假名草子の啓蒙主義は心學隆盛の機運を導き、さのふはけふの物語、竹齋物語、棠陰比事、薄雪物語はそれ／＼新しい境地を文壇に拓き、浮世物語は續可笑記の名に假名草子の

奥を留めてゐると同時に、輸入浮世ばなしとも改題せられて、やがて展開して來る浮世草子の名に連つてゐる。

最後に、前に述べたやうに其の成立の過程に於て二重の意味の大衆——國民——の共同創作であると共に、除外例もあるが、それも少くとも一つの意味には該當すると言へよう。そして又それであるが故に、三種の草子が著しく大衆的な色調を帯びてゐるのは當然であらう。讀者も亦概して一般無知な民衆であつたと思はれる。(其の初は一部の好事の人々の間にのみ玩ばれた作もあつたであらうが)。だから、無識、粗野、凡俗、單純、安易、皮相、雜駁、雷同、輕浮、逸遊と、大衆趣味の諸性相は此の草子の世界に雄辯に自身を露呈してゐる。併しながら又その間に閃くほのかな理想、かすかな向上欲、熱烈な共感、純眞な同情、無邪氣な歡喜、正實な信仰、愚直な告白、それらに觸れる瞬間も屢々與へられる事を否み得ない。そして

此の人々の心中をば、きせん上下をしたへ、かんぜん人はなかりけり。

(舞曲、和田清盛)

といふ慣用句に代表せられる彼等大衆の聲は、御伽草子から舞の本を経て古淨瑠璃へと反響して行く形骸的な音頭であるだけでなく、同時に假名草子を経て浮世草子へ、又能から操、歌舞伎へ、和歌連歌から俳諧へとやがて推し移つて行く方向を指示し

つゝ、泯び忘れ去る、堂上貴族から目ざめかけて来た地下の民衆の手へと其の専有の文學藝術を奪ひ下し得た、そして此の樂土に在つては今や殆ど貴賤の境界を絶し得た誇らしい凱歌のどよめきでなければならなかつた。要するに平安朝の物語文學から徳川期の元祿文學への過渡期に於ける雜種の混態をなす文學の一團であるが、しかもなほ此の過渡期の草子文學にのみ看られ得る特殊の色合、王朝趣味の墮落の一面に於て、全部はまだ平民化し了らないところに残る一種の平俗な上品さ、ぼかされた古典味、大まかな逸趣といつた感じは、やはり捨て難く懐かしいものがある。さて、以上三種の草子文學が支持してゐる世界の大體の考察を終つた後に、其の中に在つて又おのづから三分して占めてゐる三者独自の領域を一瞥して、此の稿を結ぶ事にしたい。

三者の交錯する處に立つて、三方の邊端へ向つてそれ／＼眺める時、極めて大づかみにはあるが、稍はつきりした異色を捉へ得るやうである。概括して之を言ふならば、御伽草子はやはり平安末期の物語を承けて貴族趣味であり、舞の草子は軍記物に繋がつて武家趣味であり、假名草子は浮世草子に連なつて平民趣味である。いづれも比較的といふことが冠せられねばならないのは勿論の事である。そして御

伽――舞々――假名の順に排列して、その上に流れる思想的文學的傾向の史的推移を簡略に述べ示すとすれば、貴族的から民衆へ、懷古から新奇へ、感傷主義から現實主義へ、佛法的から儒教的へ、童話的から寓話的へ、御伽から啓蒙へ、妄想から理知へ、そして物語から小説へ、無名作家から有名作家へ、類型から個性へ、短篇から長篇へ、單純から複雑へと、大體に於て言ふ事が出来るであらう。

註一 二番共拙編著近古小説新纂初輯に収録刊行した。

二 其の後、山中常磐、合狀等の傳存が知られ、又皆鶴、相模川等、舞曲の疑ひある數番も發見されてゐる。

### 御伽草子論考

一

御伽草子の定義並びに範圍に關しては、その對象が稍漠然としてゐ、雜駁でもある爲、諸家の説區々で、極めて狹義に取扱はうとするもの、假名草子との限界を單に時代區劃に據らうとするもの、及び構成上性質上或は創作態度の上から等諸種の觀點から説かうとするものなど、様々ある。試に明治以後の諸説で主なものを擧げてみる。

- (い) 所謂文正草子以下の二十三篇 (日本小説年表)
- (ろ) 二十三篇に新編御伽草子所収の二十三篇を加へた四十三篇 (富山房名著文庫新撰御伽草子はしがき、關根博士) 但し同書には四十三篇外のものを二篇まで收めてある
- (は) 足利時代の小説の總稱 (國文學史概論、芳賀博士)
- (に) 室町時代の短篇小説 (日本文學大系第十九卷解説、尾上博士) 此の見地から同書には此の草紙を除外してある
- (ほ) 室町時代の通俗小説 (日本文學講座第七卷、佐成謙太郎氏)
- (へ) 「室町時代より戰國時代に互りて出でたる御伽噺の性質を帯びたるもの」(鎌倉室町時代文學史、藤岡博士)

(と) 「十七世紀(足利中世より徳川の初世)に出でたる小説の一種」(アストン著、芝野六助譯補、日本文學史)

(ち) 南北朝頃から徳川初世までの草子 (新編御伽草子はしがき、萩野博士)

(り) 「室町時代より江戸時代初期にかけて婦幼の讀物として述作せられし小説」の「概稱」(有朋堂文庫御伽草紙緒言、藤井博士)

右は狹義から廣義へ、又時代の範圍も説明も大體に於て漸次廣く詳密な方へと順序立てて並べてみたのであるが、發表の年代に隨へば、大略(ち)(い)(と)(は)(り)(に)(ろ)(ほ)かと推定せられるから、さう置き換へてみると、一層諸説が入り亂れて、今以て統一を看てゐないことがよくわかる。兎も角以上の諸説を更に整理すると、(一)篇數を限定するもの、(二)室町時代と限るもの(へ)も含めることにする、(三)徳川初世に互るとするもの、との三様に大體歸着するやうである。

さてその三の中、(二)は以下説く所によつても、當らざる事おのづから明らかである。又(三)は瞭然としてゐて、取扱上頗る簡便であるが、本質的に妥當であるか疑はしいものがあり、且大抵は製作年代不明の作がちであるから、室町期か徳川期かを認定する事困難な場合が多い點にも直ちに賛し難いものがある。(尙、前章「御伽草子・假名草子・舞の本參

照) 上掲諸家の説中ではやはり萩野博士及び特に藤井博士の見を先づ最も穩當として私は採りたいと思ふ。

二

御伽草子といふ名稱は何時頃何人によつて與へられたか詳らかでない。江戸時代初期の假名草子に御伽物語・伽婢子・續伽婢子・御伽比丘尼等の作があり、浮世草子になると、新伽婢子・御伽人形・御伽百物語・御伽平家・御伽厚化粧・御伽名代紙衣・御伽夜話・御伽太平記及び御前御伽・拾遺伽婢子・當世御伽會我・怪談御伽櫻等、御伽の語を冠し或は含んだ書名が盛んに流行した状態の中から生れ出た稱呼か(勿論此の稱呼の發生は同時にその實體の發生を意味するものではなく、それまでに存在し展開してゐた寧ろ前時代の小説の一群に適用せられただけに過ぎない)。若しくは逆に御伽草子の名が此等御伽何々流行の俑を作したのか、何れかであらう。前者の場合とする想像も大略自然として許されるが、それにしては御伽草子の名が以上の諸書名のどれもが單獨的なのに比して餘りに汎稱的である點が一考に値し、且、伽婢子の自序の文が「學智ある人の爲でなく、只兒女の聞を驚かし云々と宣言してゐるに觀て、婦幼の讀物たる事を豫想してゐる事明白である(伽婢子の書名が亦それを明示してゐる)か

ら、目的と態度とに於ては御伽草子と殆ど限界なきもので、従つて伽婢子の名も御伽草子や御伽物語に倣つたかとの推測も可能でない事もない。(少くとも御伽物語には倣つたのであらう。)但し、所謂御伽草子類を、室町時代から或は少くとも假名草子時代以前に、御伽草子と呼んだかは猶徴證が無い。例の正文草子以下の二十三篇も、寛文貞享・元祿頃の書籍目録には各篇それぞれ「草紙」の部に出てゐるのみで、未だ總括した御伽草子としては取扱はれてゐない(我博士、朝倉氏も既に指摘して居られる)ので——舞の本は既に三十六番として一括して載せてあるにか、はらず——此の點からは後者の假設を確める資料とはなり得ない。

三

けれども御伽草子の稱呼が江戸中期までには播布してゐた事だけは確である。そして大略室町時代の小説をその名で呼んでゐた事は認められる。かの二十三篇は享保の頃か大阪心齋橋順慶町の書肆澁川清右衛門が揃ひの體裁で同時にか或は次々に刊行した叢書の一群で(享保の頃とするは、有明堂、文庫本の扉に「此叢書は、有明堂、寛文十三年に刊行す」とある)、爾後現今まで、狹義には即ち此の二十三篇を指して御伽草子と稱してゐるのは誰も知る通りであるが、二十三篇に限る事は、此の叢書としての刊行といふ偶然の事實に基づく外、何等必然的な意味を見出し得



ない。又、その當時、此の叢書の總括的名稱として御伽草子の名が用ゐられたか、或は單に御伽草子たる各篇を一揃へとして出したが故に自然總括して此の叢書名を御伽草子と呼ばれるに至つたか、萩野博士の推測では、元祿の頃などにや名づけけん、尙考ふべし」とし、朝倉氏の小説年表には、享保以後に附せし名稱なるべしと言つてある。それも、明確な舉證が無いが、享和元年冬至日の自序ある尾崎雅嘉の群書一覽（卷之三、草子類）に、

御伽草子 二十三卷

一名御伽文庫といへり。中古の草子どもをあつめたるものなり。撰者つまびらかならず。として、第一文正草子から、第二十三横笛草子までの書名を挙げ、

以上二十三帖也。○此中第十六卷ねこの草子に云、天下たいへい國土安穩かゝるめでたき御代にあふこと、人間は申におよばず鳥類ちくるゐにいたるまで、有がたき御せいだうなり。まことに堯舜の御代にもすぐれたることなり。まづけうちやう七年八月中旬に洛中にねこのつなをときてはなちたまふべき御さたあり云々。○按ずるに此二十三帖のうち、文正はちかづきの類は中古のさうしにして、此類の草子などわちかきものなる事慶長の年號にてしられたり。猶此類の草子あまた有寫本にて流布するもの枚擧にいとまあらず。

と明記してあるから、その頃までには右二十三部が御伽草子若しくは御伽文庫の名で

一般に迎へられてゐた事だけは疑ふ餘地はない。但し、同じ享和元年十二月刊の合類書籍目録大全には、舞書草子の條に、舞はやはり三十六番で出てゐるのに、御伽は依然各篇個々の名で出てゐて、御伽草子の名稱は載せてないから、それら書籍目録が従前の慣行を踏襲してゐるに過ぎないが爲とはいへ、二十三部を總括しての御伽草子の名稱は却つて猶未だ玄人仲間に固定的には行はれてはゐなかつた——汎稱としての御伽草子の名稱は通俗に用ゐられてゐても——のではあるまいかとも思はれる。その代りに右の群書一覽の記述によつて、

(一) 中古——即ち現時でいふ近古乃至中世——の小説の一群を、兎も角御伽草子或は御伽文庫の名で蔽うてゐる事實、而してその一群とは例の二十三篇であること。

(二) その二十三篇を一團として取扱つた撰者は不明であること(出版者が撰者たることも有り得るが、そして澁川がさうであつたかも知れぬが群書一覽の著者は別に撰者或は集輯者の存在を豫想してゐると觀ていゝであらう。)

(三) 文正・鉢かづき等は明らかに徳川期以前の小説として認めてゐること及びその他に、更に

(四) 此の二十三篇以外に、寫本で流布してゐる同類の草子が無數に存する事實を認めてゐること  
が知られるのである。

四

二十三篇の撰者が出版者と同人であつたとしても、なかつたとしても、此の二十三篇が狹義の御伽草子といふ稱呼を占有するに至つた契機は、別に深い根據があつたのではあるまいといふ事は、上記の事由から想察するに難くないが、二十三篇以外をも御伽草子と呼んだ明證は他にもある。即ち享和元年から二十九年後の文政十三年冬十月の自序ある喜多村信節の嬉遊笑覽(卷三、書畫○繪雙紙)に、

(上略是等も古へ繪卷物にてありしなるべし。後世足利將軍の頃に至りても、さまざま作り出たる物多しと見えて、今しはやきぶんしやう鉢かづき淨るり。十二段の類、御伽雙紙と稱ふる物の内に收む。今女子婚禮の棚飾に用るは古風の遺れるなり。是を卷雙紙と稱ふるは……(下略)

又、同書同條に

御伽さうしの内には猫のさうしといふも有り。

とも見えてゐる。十二段草子は創始期の淨瑠璃詞章の一種でもあるが、新編御伽草子(下)にも收められてゐるのが偶然でないと言へる。萩野博士輯の新編御伽草子は、

其の名を題してある屋代弘賢舊藏の寫本で、古人の誰かが二十三篇の御伽草子に倣つて撰輯を試みたものであるが、と稱ふる物の内に收むといふのは叢書を意味する如き書き振である——御伽さうしの内にはといふのが、例の二十三篇の一群を意味するのは明白である——から、十二段草子を含む點からしても、或は信節は此の新編の方をも閲讀してゐて、それを指して斯く言つてゐるのではないかとも思はれる。何れにせよ、

- (一) 文正鉢かづき等を御伽草子と稱してゐること
- (二) 此の頃までには、狹義の御伽草子の名稱も多分漸次に廣まりつゝあつたらうこと

それに——そして最も注目すべき——

(三) 十二段草子をも何等怪しまずに御伽草子として取扱つてゐること  
だけは否定することは出来ない。(三)に就いては、幸若舞曲の濱出築島が御伽草子としての取扱をも受けてゐる事實に見ても、十二段草子が即ち草子といふ名でも呼ばれ、又淨瑠璃姫物語とも言はれてゐた事實に徴しても、奇とするに足らないのみか寧ろ當然と言つてもよいであらう。

ついでに、それから八年目の天保八年に出た種彦の修紫田舎源氏の二十五編下に、  
まづお伽草紙の出来はじめ、鉢かづき姫鹽賣文正、これを合せて言争ふ。  
といふ一節がある。これは繪合巻に擬したので、御伽草子の繪合とは恰好の思ひつ  
きであるが、文正・鉢かづきを御伽草子の祖といふのは、

まづ物語の出来はじめのおやなる竹取の翁に宇津保の俊蔭を合せて争ふ。

といふ源語の文をそのまゝ模したのであるから、考證的の意味は先づ無いとみる方  
が正しいであらうが、これを御伽草子中の最も古いものと見ようとしてゐる意志は  
認めていゝであらうし、群書一覽や嬉遊笑覽の記載と併せて、徳川期に於ける御伽草  
子觀の一並びに御伽草子といふ詞の出典の一資料としての價値は在る。

更に、文政十三年（天保元年）から十七年（天保八年）からは十年後の弘化四年に成つた山東京山  
の歴世女裝考（卷二、〔十五〕髮筋をかんざしといひし事）の文中に引いてある「富士人穴草子」の説明  
として、その下に「東山殿比のお伽さうし、寛永九年板全二冊」と割註してあるから、これ  
こそは二十三篇以外——そして亦四十三篇以外にも當る——でも御伽草子と呼び、  
而も室町期の小説を然く呼んだ事實に關する的確な資料を提供するものである。  
そこで、かの二十三篇に御伽草子の名を與へたのも、その撰者或は書肆澁川が初め

ではなくて、それまでに室町期小説に與へられてゐた汎稱を當然用ゐたまでで、又古  
書籍目錄類にも特に御伽草子の名の見えないのは、却つてそれが單獨書名でなくて  
汎稱なるが爲で（假名草子・浮世草子の場合も同様かと思はれる）あらうとも想像され  
るのであるが、前掲の資料が何れも比較的後世のもので、澁川の出版した享保以前の  
資料でない點に即斷を許さざるものがある。

が、要するに、御伽草子の名を近古小説の汎稱として用ゐる事は十分に妥當で、近時  
の文學史上の術語としての用法が、廣義に——即ち二十三篇以外にまで——擴張さ  
れてゐる事に、以上の資料は正しい史的根據を與へるものでなければならぬ。

五

猶、群書一覽所見の御伽文庫なる一名に至つては、果して一般にどの程度に行はれ  
たか一層不明で、他にこれを徵すべき文獻の資料に乏しい。それは兎も角として、此  
の名稱は或は嫁入文庫式の意味を含むものであるかも知れない事は、嬉遊笑覽の前  
掲の文と、嫁入文庫として御伽草子數種を入れた書庫の傳存する事實等からも想像  
を可能ならしめる。又、冊子の讀初めとして、正月に文正草子を女が讀む慣例があり、  
昔は家々に必ず一本を具へねばならぬことになつてゐた由が、やはり種彦の用捨箱

(卷上)に見えるが、恐らく結婚の際は、その草子類をも携へて行つたに違ひない。要するに御伽文庫の文庫は今日での所謂ビブリオテークの意味、又叢書としての意味の、それでもあると同時に、それよりは寧ろ婦幼の御伽——教訓と娛樂とを併せた——の爲の座右裝飾兼用の書庫の意味を有するものと解して差支なからうと思ふ。つまり飾棚の役目をも務める家庭文庫といふつもりであらう。現時では、森・松村・鈴木・馬淵四氏同撰の標準日本御伽文庫の名稱(これに類した名の同種の叢書は猶いくらもある)などがこれから出てゐると思はれる位のもので、御伽草子の一名として文學史上の術語としては殆ど用ゐられてゐないやうである。

## 六

體裁・内容・表現・思想、何れの視點からしても、御伽草子と假名草子とは密接し混合し交錯してゐるが、假名草子といふ名稱すらも、必ずしも御伽草子と區別する爲の稱呼ではないやうである。元來、假名草子は「假名法語」と同様の用法に依る名稱で、假名で書かれた乃至假名に和らげて説き語られた草子といふ程の便宜的な大まかな名稱であり、御伽草子も娛樂と教訓とを兼ねた婦幼大衆の讀物といふ程の意味で名づけられてゐる爲に、両者が相重なるとしても寧ろ當然でなければならず、表現様式(同時

に創作態度をも含んでゐるが)の側からと、創作態度の側からとの交錯分類的稱呼なるが故に、互にその分野を相犯しても却つて自然で必然であると言へる。即ち御伽草子は一面假名の草子——即ち一種の假名草子——であり、又假名草子に前に擧げたやうに御伽何々と題した作の續出してゐる現象、浮世草子にまで此の傾向が引續いてゐることも初めに觸れた。少しも矛盾ではないのである。

だから享保十九年に成つた寒川辰清の近江輿地誌略(卷一七、日吉社)に「秋夜長物語といへる假名草紙」と言つてゐるのなども、例の二十三篇のみを御伽草子とする考、若しくはもつと廣義の御伽草子といふ概念の上からの判然たる態度では恐らくなくて、單に漠然とか或は假名草子式體裁で行はれてゐる秋夜長物語(寛永十九年板本などは即ち假名草子の體裁である)を目してさう呼んだに過ぎないのであらうと思ふ。(芳賀先生の國文學史概論には此の物語を初め鳥部山・松帆浦等の兒物語を、中古物語の系統と觀て、御伽草子から除外してあり、日本文學大系も御伽草子の外として收めてあるが、これも一つの見解であり取扱ひ方であるから、無論それで誤ではないけれども、御伽草子中の戀愛物語の一種として取扱つても亦不當でなく——現に同種の辨の草紙・花みつ等は文學大系本にも御伽草子中に入れてある。——寧ろ便利とさ

へ言へる。日本文學講座「御伽草子研究」の佐成氏の態度もそれである。故にかやうな態度からは、廣義の御伽草子に屬すべき作をば一般には漠然と假名草子とも呼んだのもあらうことが想像せられ得る。體裁の上からならば寧ろその方が普通であつた筈で（小説年表の朝倉氏や假名草子に於ける水谷不倒氏の取扱態度もこれである。）貞丈雜記（卷一六）に

書物はかな草紙にても何にても數多見れば見る程智慧を増す也。なま學文の族はかな草紙などをば嘲り手にも取らざるはあやまり也。かな草紙にも能き事は如何程も有り。見ずして打置くは惜しき事也。

と言つてゐるそれも御伽草子——廣義の——を含むとみる方が正しいかと考へられる。

又、歴世女裝考の「東山殿比のお伽さうし」と言ふのも、群書一覽や嬉遊笑覽に徳川期に入つてからの御伽草子の存在を認めてゐるのと併せ考へれば、徳川期乃至は室町末のでない即ちかなり古い頃の御伽草子といふ意味にも解せられ——東山殿比とことわつてあるだけに——隨つてそれより新しい御伽草子をも豫想してゐることも考へられる。（尤も、ほんたうは中古の御伽草子と言ふ意味をもつと時代的に稍明

確に言はうとしただけなのでもあらうし、又新しい作が徳川期にまで互つて出ているといふ正確な舉證にはなり得ないが、この頃は所謂二十三篇の名稱としての御伽草子も、亦その中に「慶長七年」の語の見える猫の草紙の含まれてゐることも、京山は十分承知してゐた筈と思はれるから。）

七

汎稱としての御伽と假名との名稱の交錯してゐると同時に、個々の作品については一層界線が朦朧としてゐる。三人法師朝顔の露の宮などは假名草子の領域に近い作であり、おもかげ物語、法妙童子、萬壽の前などは寧ろ假名草子として取扱ひたい位近世的の臭のする作である。文正草子が鹽賣文太物語、二十四孝が二十四孝繪抄と、假名草子化した題號に改められて行はれたりしてゐる一方、一本菊は少將鞍馬物語と御伽草子風に改題せられてもをり、又、監物草子や藻屑物語は御伽草子めいた題號ながら、實録體の物で、強ひて何れかに屬せしめようとすれば、假名草子に入れる他はない。又御伽草子に潤色が加へられて假名草子になつてゐるものもある。「ふくろふ」乃至うそ姫物語のあだ物語に於ける、あめわかひこ物語の「たなばた」に於ける如きその例である。

併し、文學現象としては——且特に轉向期に於ける文學史的現象としては、此の事は當然過ぎる位當然で、特に相類した性質の小説群であるから、兩者の中間に位して雙方に跨るやうな作が幾多存在せねばならぬ筈である。結局、江戸時代初頭は、御伽と假名と兩種が相並行し相重なつて行はれた期間があると看るべきである。

八

前に御伽草子の範圍に關して藤井博士の説に左袒したいと言つた理由が、今まで論述し來つた所で、おのづから明らかにならざらぬと思ふが、猶これと同じやうな意味で、私は更に上へも——萩野博士よりも一層——延長して、鎌倉末から徳川初世までと時代の範圍を擴げたいのである。勿論、今茲に的確に鎌倉末の作と指摘し得るものは無いが、そしてその數も多くはあるまいと思はれるが、室町期に入つてから突如發生したと看ねばならぬ必要は無く、平安末期の物語文學の流れを承けた鎌倉期小説に引續いて、徐々に鎌倉末頃から御伽草子式形態が繪卷の冊子化と共に成生しつゝあつたと想像する事が自然でもあり、現存御伽草子類の小説中にも、鎌倉末の作ではないかと思はれるもの(例へば土蜘蛛草子の如き)或は原本がその頃に存したらうと思はれるもの、又は散佚物語でその頃の作にかゝると想像せられるもの等もあるからである。

からである。

平安	鎌倉	室町	江戸
物語文學……………	……………	……………	……………
		御伽草子……………	假名草子……………
			浮世草子……………

(繪卷)

故に私は、假に在來の慣行に隨つて御伽假名の名稱を用ゐる場合には——御伽假名浮世等の慣習的名辭を以てするが文學史の術語として最適であるかは疑問であるが——大體、御伽草子を鎌倉末から江戸初期に互る童話味を帯びた通俗小説、假名草子を江戸時代初頭に行はれた啓蒙文學(純小説と言ひ得ないやうなものもあるから)といふ概念の上に立つて取扱つてゐる。勿論、これは原則として本態としての觀方で、實際は簡約な定義的に總括することは甚だ無理であり、且、個々の作品に臨むと此の問題は一層面倒になること前に述べた通りである。

が、概しては無論、御伽草子を室町時代の小説の汎稱とする事は決して不當でない。御伽草子の特色を發揮してゐるのは室町時代に於てであり、又主なる御伽草子は多く室町時代の作であり、そして室町時代の小説の代名詞としてはやはり御伽草子を

以てするのが最適であることは、何人も容認する所であらう。假名草子と區別する最も主要因が、やはり室町と江戸といふ時代區分、同時にその時代色の差違であることも争はれない事實である。即ち、室町のもものは御伽草子、江戸のもものは假名草子といふ通念が、極めて普通の文學史的常識としては、簡便に用ゐられてよい場合が許されねばならぬであらう。

九

兒物語の類を中古物語系統の小説として御伽草子から除外する事に相當の理由があるとするならば、同じく中古物語文學の系統を引く今宵少將物語、鉢かづき小落窪、小町草紙等の戀愛物や繼子物や歌物語やをも同様の理由からして除外してよい、筈である。否、御伽草子のすべてが中古の物語文學の流れを承けてゐる小説と言つてよい。崩壞期に於ける物語文學の各種相が——他の諸種の文學形態との混融とによつて一層——此の雜然たる群小作品となつて名残を留めてゐる——同時に新興文學への萌芽を胎生させつゝ——と観ることが最も正鵠を得てゐると言はれ得る。

天稚彦物語・秋月物語・青葉の笛物語・若草物語・今宵の少將物語・櫻の中將物語・玉水物

語・依藤太物語・胡蝶物語等々の題名が直接物語文學を繼承してゐる徵證を示してゐるといふのでは必ずしもない。又、何々草子といふ題名でなければ純御伽草子とは言はれないといふ確然たる理由もない。御伽草子の題名としての「物語」と「草子」とは、内容上又は形態上その間に何等の相違は認め得られない。文正草子の「草子」はこれを「物語」と更へても形態上に幾許の變化を來すものでもなく、唐糸草子を唐糸物語と改め、若草物語を若草草子と改めても内容上些の不都合を生ぜぬのである。否、福富草子は一名福富長者物語である。三人法師物語は一名三人懺悔草子である。岩屋草子は即ち岩屋物語であり、辨慶物語は即ち辨慶の草子なのである。雨やどりも亦その一名しぐれのえんを更に略しては、しぐれの草子とも亦しぐれ物語とも兩様に呼ばれてゐる。十二段草子が淨瑠璃姫物語とも言はれてゐることは前にも述べた。呼び慣れてゐる爲固定してしまつてゐる題名を他にしては、物語と草子との轉換は甚だ自然に容易に行はれ得るほどに區別が無い。これ亦恰も御伽草子と假名草子との關係に似たやうな交錯分類的稱呼であるが爲で、内容と體裁とそれとの側からしての互に撞著することの無い名稱が、一作品の上に共存し得るのは當然である。

勿論、大體「物語」は小説の意味が、或は敘述の意味が強く、「草子」は記録隨筆の意味が勝つてゐるのではあらうし、平安時代では兎も角先づ區劃が認められてゐるが、後世に降るに隨つて其の劃線が模糊として來てゐる證は、弘安源氏論義に、

あるはみちのさゝはらのわりなきを人に言ひ、身をうぢ河にひきて世中をうらみ來つるに、浮舟も身を投げ宮も思ひやるかたなしと慰みにけりと聞く人は源氏の草紙を見てぞ思ひやりける。

とあるのでも知られる。これは古今序に模した文であるが、兎に角鎌倉中期にはもう源氏物語をすら草子と呼んでゐる以上、室町頃に「物語」と「草子」との間に境界線を絶して來てゐても毫も怪しむべきではないのである。

又同じ小説の意味としても、「物語」と「草子」とは、少くとも幾分心持の上で、長篇と短篇といふほどの區別があるとも見られ得るが、それも決定的ではなく、大略感じとしてのことである。田村の草子などは寧ろ長篇としての性質と分量とを有してをり、單に長さ分量の上からすれば、鶴の草子の方が玉水物語よりは大きく、富士の人穴草子は梅津長者物語の二倍の大きさである。源氏のやうな長い物語でも猶草子と呼ぶことが許されるのならば、それだけでさうした問題は殆ど問題にならないほど既に半ば以上解決してゐると言ふも不可ないであらう。

そして此の物語と草子との界線の撤せられて居る混沌曖昧な心持は又やがて假名草子との界線の朦朧としてゐるにもおのづから共通するもので、同時に、思想的、信仰的、道德的、各般に互つて、特に知的論理的に明確な判断力や選擇意識の稀薄になつてゐる近古思潮の一面を語つてゐると言へる。そして又御伽草子の内容種別が殆ど雜然混沌としてゐることに、構想、詞章が套型、不統一、蕪雜、一律なことにも、他の同代各種文學との連接が同様に混錯的であることに、亦相應じてゐるのである。

一〇

内容の性質、主題乃至取材等の上から便宜的に御伽草子を類別してゐることは或程度に可能である。作者の不明な、個性の無いやうな雜多の群小作品はおのづから幾つかの類型を成してゐる。

- (一) 童話 (一寸法師、物臭太郎、福富草子、文正草子等)
- (二) 寓話 (猫の草紙、魔佛一如繪詞等)
- (三) 異類物 (イ) 擬軍記物、魚鳥平家、鶉鷺合戰物語、墨染櫻、佛鬼軍等。(ロ) 擬歌合物、蟲歌合、鳥歌合、調度歌合等。(ハ) 戀愛物、のせ猿草子、ふくろふ玉蟲の草紙、朝顔の露の宮等)



- (四) 本地物縁起物 (貴船の本地・毘沙門の本地・熊野の本地・月日の本地・さよ姫等)
- (五) 佛教法談物 (さざれ石・寶滿長者・大佛供養物語・胡蝶物語等)
- (六) 遁世物 (イ)發心譚・硯破朽木櫻・さいき等。(ロ)懺悔譚・三人法師)
- (七) 繼子物 (鉢かづき・秋月物語・岩屋の草子・小落窪花よの姫等)
- (八) 戀愛物 (イ)横笛草紙・今宵の少將物語・櫻の中將物語・松風村雨等。(ロ)兒物語・秋夜長物語・鳥部山物語・幻夢物語・あしびき・辨の草紙等)
- (九) 歌物語 (和泉式部・小町草紙・橋姫物語・伊香物語・小式部等)
- (一〇) 怪異譚 (イ)變化物・化物草紙・付喪神・土蜘蛛草子等。(ロ)怪婚説話・鶴の草子・木幡狐・かざしの姫君・天稚彦物語等)
- (一一) 靈驗譚 (狐の草子・蛤の草紙・周防の内侍等)
- (一二) 英雄譚 (イ)怪物退治説話・酒顛童子・田村の草子・立烏帽子・俵藤太物語等。(ロ)地獄極樂廻説話・富士の人穴草子・天狗の内裏等。(ハ)武人傳説特記説・鬼一法眼・辨慶物語・秀衡入木・曾義高物語等)
- (一三) 復讐譚 (あさみちはもち中將てこぐま物語等)
- (一四) 孝行譚 (二十四孝・唐糸草紙・法妙童子等)

(一五) 祝儀物 (七草草子・大悦物語・梅津長者物語・濱出等)

右は各代表的な作品に就いて例示してみたのであるが、御伽草子の各篇を大體以上の類別に分屬せしめる事が出来るであらう。併し中には右の何れにも屬せしめ難いやうなものもある。又右の類別が已に便宜的な交錯分類である。その上に以上の諸作品各が互に共通した成分を多く有し過ぎてゐて、他の種別と重複し相跨つてゐるものがちであると言つてもよい。

即ち物臭太郎は本地物でもあり、幻夢物語は復讐譚でもあり、土蜘蛛草子は英雄譚でもあり、狐の草子は怪婚説話でもあり、人穴草子は法談物、蛤の草紙・周防の内侍は孝行譚、田村の草子・伊香物語は靈驗譚でもあり、佛鬼軍は法談物で又寓話、鉢かづきは童話で又戀愛物語でもあり、さよ姫は孝行譚で又靈驗譚でもある。

要するに、異類物は略一種の寓話でもあり、繼子物は大抵戀愛物語でもあり、本地物・遁世物並びに靈驗譚は勿論宗教物であり、復讐譚は英雄譚にも孝行譚にも連接してゐる場合が多いのであるから、もつと整理して、(イ)童話 (ロ)寓話 (ハ)宗教小説 (ニ)戀愛小説 (ヒ)英雄小説 (ヘ)怪談小説等と分つ方が妥當であるが、更にそれを各細分するとすれば、その場合亦必ず交錯を惹起して來ることを免れない。御伽草子の各篇

の内容を形成する要素は實に多樣的で、而も共通的で、それら各種の要素のいろいろの配合が、此の雜然混濁の御伽草子群を生み出してゐるのである。

## 一

此の御伽草子の世界を醸成してゐる諸要素は、又同代の他種文學の各、とそれら出入連繫してゐる同じ要素である。特に英雄譚、復讐譚及び説話的要素は軍記物並びに舞曲——前にも述べた如く濱出築島等は最早全然區別なく御伽草子中に伍してゐる。——及び謠曲の一部と分擔してゐるものであり、田村の草子、俵藤太物語辨慶物語、鬼一法眼等、いづれも軍記物中の一種型たる當代の歴史小説、義經記、曾我物語と類種若しくはその拔萃を成すが如きものである。異類合戦物は言ふまでもなく直接軍記物から派生したそのパロディである。本地物法談物、近世物、靈驗譚、怪異譚、孝行譚、寓話等は、今昔以後特に近古に最も異常の展開を遂げた説話文學及び之に密接な關係を有つ佛敎文學の領域であり、その通俗化、小説化であると言へる。謠曲の思想と取材とも相連ること亦詳述に及ぶまい。祝儀物も此の時代に限るわけではないが、神事祝言の能や舞曲の小ぶし物に通ずる氣分であり、當代から近世へかけての各種の歌曲類には缺かされない慣習のやうになつてゐる。語り物、謠ひ物として

の軍記、謠、舞曲と共に此の頃から新しく發生して來た淨瑠璃との錯綜も、亦前に説いたやうに已に十二段草子に於て歴然と例證して居り、そして近世初期の古淨瑠璃類の台本に御伽草子がそのまゝ、或は少改變を施されて使用せられた事實、又語り物化の痕跡を留めてゐる御伽草子の現存する事實、及び新作古淨瑠璃の世界も御伽草子や舞曲の創造する世界と相違からざる事實等は、此の方面に於ける兩者の交渉を十分に物語つてゐる。假名草子との關係及び平安朝物語との關係は既に述べた。以上の諸種の文學形態は各、それらの本質と分野とを有してゐるが、或は思想に於て或は素材に於て、或は表現に於て、或は態度に於て、將た鑑賞者の範圍に於て、御伽草子と各、頗る近似し密接してゐるものが多い。軍記物中の義經記、曾我物語や舞曲や古淨瑠璃の如きは文體まで御伽草子に非常に近い。童話の進出も神話時代の新しい再生であり、竹取、宇津保や源氏の玉鬘卷等の轉生でもあるが、平安末からの民間口碑の記録説話乃至文學作品化への成長であると共に、此の期には外來移入の地域が擴大せられて、素材にも種型にも内國的に局限せられることから更に一層解放されようとしてゐる。

畢竟、御伽草子は縦にも横にも其の隣接區域との界線が茫漠としてゐる。而もそ

れが此の特異な文學形態の著しい特色の一である。

一一

雜然茫漠としてゐる御伽草子の特質は、それながらに一種の面白味を生み出してゐる。混沌・蕪雜・無造作・無整理の無數種小群、その事が、そして又その現象が、何となく漠然たる暢達さ、生れながらのそしてあるがまゝの自然さ、而も不思議な一の大きな力の存在にも似たものを感じさせる。

それから御伽草子だけにしか味はれないやうな、半貴族的半庶民的な、かなり野趣に滲んではゐるが未ださうまでは物質的・肉感的になりきらぬ、何處かに大きな間の抜けたやうなノールブルなところのある、所謂「もとの根ざし賤しからぬが、安らかにといふほどではなからうが、身上だけの事は流石にあつて」とかはらかなりやと言ひたい位の程度に踏み留つてゐる姿、といつたやうなものを見せてくれるのが御伽草子から受けるさまで厭でない印象の一である。微温さはあるが、その微温さとしての味が如何にも上品であるからである。醜穢な低級に墮してゐない雅びな卑しさの味であるからである。

一二

今一つ御伽草子の興へてくれる有難いものは、それが有つ立派なナンセンス味である。狂言や落語や滑稽本やと共通したものを有してゐるのは言ふまでもないが——特に狂言とは最も近似してゐるが——それらは明らかに笑を目標として居、その爲に作意が感じられ過ぎ、屢意識的なくすぐりにすらなつてゐる。御伽草子のナンセンス味は、不用意で無自覺で邪氣が無いだけに一層愉快であり、眞正であり、それだけに價値が高いと概言してゐる。明るい喜ばしい馬鹿々々しさ、それこそは御伽草子が恐らく自身豫期しない独自の生産價値であり存在價値であらう。

東山道陸奥の末信濃の國十郡のその内につるまの郡あたらしの郷といふ所に、不思議の男一人侍りけり。其の名を物くさ太郎ひぢかすと申し候。名を物くさ太郎と申す事は、國に雙びなき程のものくさしなり。但し名こそ物くさ太郎と申せども、家づくりの有様人に勝れてめでたくぞ侍りける。四面四町に築地をつき、三方に門を立て、東西南北に池を掘り、島を築き、松杉を植ゑ、島より陸地へ反橋を懸け、高欄に擬ぼうしを磨き、まことに結構世に超えたり。十二間の遠侍、九間の渡廊、下釣殿、細殿、梅壺、桐壺、藤が壺に至るまで、百種の花を植ゑ、主殿十二間に造り、檜皮葺にふかせ、錦を以て天井を張り、桁うつばりたる木のくみ入には、白銀黄金を金物に打ち、環珞の簾を懸け、既侍所に至るまで、ゆゝしく作り立てて居ば、やと心には思へども、いろく事足らねば、唯竹を四本立て、藁を懸けてぞ居たりける。

(物臭太郎)

物臭太郎に「ひぢかす」といふ名のあるのも豪勢だが、眞面目に長々と述べ立てて、

釣り寄せて来た對手を土俵際で見事にうつちやる手際の鮮かさいろく事足らねばなどなか／＼ユーモラスである。その物臭太郎が京上りして、清水の大門で女房を擇取しようとして、足を棒にして終日あれこれと物色してゐるところへ、來かゝつたのは供を連れた十七八のあでやかな美人、

物くさ太郎を見て、爰にこそ我が北の方は出で來ぬれ、あつばれ疾く近づけかし、抱きつかん、口をも吸はばやと思ひて、手ぐすねを引き、大手を擴げて待ち居たり。女房是を御覽じて、供の下女を近づけて、あれは何ぞと問ひ給へば、人にて候と申しければ、あな恐しや、あなたりをば如何にして通るべきぞとて、よけ道をして通りける。物くさ太郎を見て、あら淺ましや、あなたへ行くぞや。手のびにしては叶ふまじと思ひて、大手を擴げてつゝと寄り、いつくしげなる笠の内へ、きたなげなる面をさし入れて、顔に顔をさし合はせて、如何にや女房と言ひて、腰に抱きつきて見上げければ、東西昏れ果てて更に御返事も宣はず。

變態性慾者の狂痴と言ひたいが、それよりも、物臭太郎のエムブレースにキッスなどを考へるだけでも全くナンセンスではないか。正に近時流行のエロとグロとナンセンスの跳向に交錯した典型的な場面である。否、御伽草子の世界は一體にエロ・グロ・ナンセンスの交錯場裡なのである。

擬軍記物にはナンセンスが特に多い。擬人した鳥獸蟲魚の嚴めしい名など皆さうである。又兵法の祕書を獲得しようとの目的で蝦夷ヶ島へ渡るのに、奥秀衡の許

から態、四國土佐の港へ出向いて其處から出帆する御曹司島渡りの義經なども、作者の地理的觀念の幼稚さから結果するのではあるが、御苦勞過ぎたナンセンスである。龜の夫といふ論理から浦島太郎が鶴にされたり（浦島太郎）、鷹の羽一つ賜はると夢みて孕んだのが武藏坊辨慶だつたり（辨慶物語）、或は小男の草子の主人公の本地が五條の天神、それが戀した人間並の女房はさいの神と、何れも話の筋には直接何の關係も無い素性を最後に種明しの説明して、

さて今の世までも戀をする人は天神とさいの神とに祈誓申せば、忽ちに夫婦の事は女男共に叶ふなり。かまへてくよくく頼み候べし。さてこそ今の世までも、きんせんくんじゆ（貴隠群集）し給ふなり。めでたしく。（小男のさうし）

と讀者を啞然たらしめるのは、御伽草子ならでは出來得まい。——小男の草子は一寸法師とそれから一名をばおたがの本地と呼ばれる物臭太郎との混血兒であるが、一段とナンセンスなものである。或は又小式部内侍が和泉式部の捨子なのも奇抜であるが（小式部）、その又母の和泉式部が紫式部の私生兒たるに至つては（同上）、ナンセンスも極まれりと言ふべしであらう。

最後に、御伽草子を童話文學として價值づける純眞な藝術心、言ひ換へれば御伽草子の眞生命を成す可愛い童話味は、やはり何と言つても最も重要な特色でなければならぬ。もつと精煉し、もつと醇化し、もつと淨化すれば、泰西童話とは又別種の美しい朗らかな我が古典的な句の高い童話文學のオアシスが、茲に莞爾やかな笑を湛へて、萬象が悉く成心に凡化乾化せられた人世の果てしなき沙漠旅行者の疲を慰してくれ、疑はぬ。足駄の下から物申さんと呼ばはる、いつきやうなる聲の主、幸運の祕密を藏した鉢を頭にかづいたたいけな御姫様、又は炭櫃の下から白い御手々を出して頂戴々々をする可愛い杓子の御化け、いづれか我等の懐かしい「たましひのふるさと」から呼びかける天使達でないものがあらう。

一五

推移期に於ける文學現象の説明者としての、又、新舊内外説話の貴い保持者としての、又國民の共作且大衆文學としての、更に、中世思潮、中世文化の描出家としての、それぞれの立場からの御伽草子の價値は改めて贅するまでもない。又、片々たる小作品の中でも、福富草子のやうな雅味のある滑稽——あの汚い事柄をあれだけに不快を印象させずに却つて可笑味を湧かせて描出してゐるのは決して拙い筆ではない。

——や、三人法師のやうな御伽草子としては不相應な位出色の作やも、拾ひ出せば稀にはある。けれども、さうした個々の作品についてよりも、私は此の御伽草子といふ特殊の展開を成してゐる文學の分野に於て、此の蕪雜さと、上品な平俗さと、そして可憐な童話味と、企及し得ざる愛すべきナンセンス味とを、特に捨て難く思ふものである。

註 この「とき」は津輕の十三湊であるとの説もあるが、それならば地理的には如何にも自然であるけれども、御曹司島渡りには、音に聞えし我朝四國土佐の港と明記してある。「十三」が誤傳せられたのかも知れないにしても、流布の御伽草子では最早四國の土佐として取扱はれてゐることは争ふべない。そしてそれには舟旅の記行文で著名な土佐日記からの聯想的影響を見逃せないと思ふ。

番外舞曲「相模川」

相模川といふ書名を初めて知つたのは朝倉氏の日本小説年表(舊版)であつた。同書三〇頁の假名草紙の「年代不詳部に」○相模川 二と出てゐる。(新日本小説年表にも出版年代未詳部の筆頭に其の儘掲げてある。寛文なり貞享なりの書籍目録から轉載したであらうといふことは後に知つた。)その頃私はまだ學生時代で頻りに義經物の作品を涉獵してゐたので、此の書名が目についたのである。そして唯漠然とそれは頼朝の相模川橋供養の變死事件を書いたものではないかと想つてみたのであつた。

併し唯それだけで其の本の存否すら判然せぬので、どうにもならなかつた。東大をはじめ諸方の官公私の圖書館の何處にも無い。平出氏の近古小説解題にも載せてないから内容を推知する手懸が全く無いのであつた。最早傳存してゐない物と諦めてゐた私が、其の後——たしか大正五年か或は六年頃かと記憶する——歸省の途、今は故人となつた大阪玉造の霞亭渡邊勝氏の宅で偶然同氏の藏書中に之を見出

した時は流石に驚喜したのであつた。貪るやうに読み通して漸く長い間の渴望を醫した。そして私の揣摩してゐた内容が當らずと雖も遠からざるものであつたのにも満足を感じた。

霞亭本の相模川は、上下二卷二冊、織物表紙の美麗な表装で、題簽に「さかみ川 上」ささかみ川 下(内題は無い)とある奈良繪入十行の寫本で、胡蝶装の堅本であつた。其の時は歸國を急いでゐた折とて略梗概だけを控へてゐた。それから後、復一兩度披閱の機會を獲て詳讀することが出来た。今度拙著近古小説新纂の續輯に收載する豫定で、稿を整へてゐたが、惜しい事に一部に脱漏があつて文の續きが可笑しい。が止むを得ぬから其の儘に上梓するつもりであると、幸に故平出氏藏の一本を手に入れた藤井乙男博士の厚意によつて、其の脱文の箇處を埋めることが出来たのは望外の喜である。同書は美濃版袋綴の寫本で、外題内題とも「さかみ川」とあり、奥書に

此さうし寛永六年閏二月吉日ニ是を書長松殿ニ被留也

筆者年五十七

とある由である。然るに又最近東京帝大國文學研究室の有に歸した一本が參考せ

られることになつて愈々本文校訂の資料が豊富になつたのは、重ねくゝの惠福と言はねばならぬ。此の本は題簽は無いが、内題に「さかみ河」とあり、卷末にこれも

さかみ河

寛永拾六年卯無神月十四日書之

とある寫九行(無畫)胡蝶装の堅本で、語り物らしい句讀の處々に附してあるものである。詞章は小異のある他、殆ど全く覆亭本と同じであると言つてよい。

ついでに本書の古書目の所見は、寛文版の増補書籍目録(舞並草紙部、一五七丁、オ)に二

さかみ川、元祿五年刊の書籍目録(五之卷「舞並草紙」部、二六丁、ウ)に二 相模川、又、正徳五年刊

の増益書籍目録(卷四、さの「假名」部、四三丁、オ)には、山本長さかみ川と出てゐる。山本長は太閤

軍記や八幡の御本地などの版元、山本長兵衛である。

そこで、此の草紙の内容であるが、今其の梗概を記してみると、

頼朝が將軍となつて天下を平定した後の事である。鎌倉に住んでゐたしやうはんといふ大慈悲心の聖が相模川の橋の崩壊してゐるのを憐れいて關東八ヶ國に勸進し、やがて願の通り修理が成つたので、若宮の別當、今宮の僧正を導師として、盛大な橋供養が営まれた。

しやうはんは、人に招ぜられて、頼朝も大小名を率ゐて之に臨む事になつた。先陣は嘉例により秩父の重忠と定まつたのを、梶原景時之を妬み、伏木隱の昔、石橋山の舊功を誇つて、子息源太の勸にまかせ密に謀叛の企をなす。此の由頼朝に聞えたので、重忠は強ひて君を説いて、景時に讓つた。梶原面目を

施して先陣を勤めたが、供養半ばに鎌倉八幡の棟から怪しの光り物が三つ飛來して相模川に入るよと見る間に、河水俄に五色に變じて逆流し、川上から流れて來た三個の鉦の無い提子ひきこが龍と化し、猛火と燃えて消え失せた。續いて十二三の天童、十六七の若武者、十丈許の大蛇など替るゝ水面に顯はれては消えた。雲中には北山から赤旗の兵、四五百騎、西山の方からは白旗の勢、四五十騎出現して闘を作る。

此の幻怪の光景を眼にするなり、頼朝は忽ち落馬して早人心地も無い。驚き騒ぐ人々に圍繞せられ、重忠の介抱に漸う蘇つた。頼朝は、危く冥府へ赴かうとしたのを、秩父殿の喚び返す聲を聞くと、齊しく復生しかへる事を得たと歡び、さてかの怪事の仔細を問はれる。要領を得ぬ梶原の答は、滿座の嗤笑を買ふたが、頼朝の懇請に、重忠は、やをら膝を立て直し、一尺二寸の長髯を三度撫で下して、滔々懸河の辯を振ふのであつた。

即ち秩父が演述によれば、かの三個の提子は、それゝ、清盛池殿、二位尼の亡魂、天童は安徳天皇、若武者は敦盛、大蛇は能登守教經、さて又赤旗は平家白旗こそは、御舍弟九郎判官殿の靈と、掌を指す明知に、諸國の大小名一度にあつと感じ合ふ。

頼朝も點頭きつゝ、只心得ぬは九郎が事何の怨を言はうとてか、重忠重ねて行向つて、今一度喚び戻して問ひ聞けとの御説である。無理な仰せながら、畏まつて川端に出、大音揚げて喚べば、不思議や義經の靈再び現れて、潸然として一生の不運を啣ち、景時の讒奸を訴へ、頼朝に怨は盡きねど、平家の惡靈に苦しめられるを見かねて、助勢に參りしに、今日の有りがたき供養の説法も承り得ず、よしなき者の先陣と見るより、惡業忽ち胸に餘り、修羅の苦患に沈む無念さ、義經が憂き日も、今日の頼朝の危難も、梶原故所詮景時は鎌倉中の爲には第六天の魔王ぞと、慨歎しつゝ、雲に紛れて影を隠した。伊勢熊井片岡、鈴木の面々、續いて奥州の泉の三郎殿りは、武藏坊次々に姿を見せ、靡々に怨を述べて消えて行つた。

辨慶は梶原の滅亡を茲三日が内と豫言までした。

頼朝は酔の初めて醒むるが如く、落涙をとどめ敢へず、即座に景時父子三人の誅戮を命じた。梶原父子は聞くより度を失ひ、夜に紛れて落ち行く途に、宇都宮彌三郎ともつなが、あつちの前を乗打したのを見て、彌三郎が怒つて放つ矢に、景時は瘞れ、源太兄弟は虜となつて、由井ヶ濱に斬られた。とも綱は勸賞に伊豫國北郡を賜はり、所知入と聞えた。

といふのが大體の筋である。つまり頼朝の相模川落馬の事件に梶原滅亡の痛快事を結びつけて、判官最良に満足を與へようといふのである。それに例の賢人の畠山が、早くも四相を悟る小手調に、「人間にてなかりけり」の讃辭を浴びながら、講釋師然とをさまつてゐるのが面白い。

相模川の橋供養に頼朝が落馬して疾を獲、程なく薨じたといふのは、略、正傳として知られてゐるところである。建久九年十二月、稻毛三郎重成が亡妻追善の爲の供養であつて、其の歸路馬から落ちたのである。そして翌正治元年正月、病革するに及んで薨髮し、五十三歳を以て薨じたのである。吾妻鏡には同年の條を關いてゐるけれども、建曆二年二月の條に此の事を明記してゐる。即ち

廿八日乙巳、相模國相模河橋、數箇間朽損、可被加修理之由、義村申之。如相州廣元朝臣善信有群議、去建久九年、重成法師新造之、遂供養之日、爲結緣之故、將軍家渡御及還路、有御落馬、不經幾程、薨給畢、重成法師又

逢殃、旁非吉事、今更強難、不有再興、何事之有哉之趣、一同之旨、申御前之處、仰云、故將軍薨御者、執武家權柄、二十年、令極官位、給後御事也、重成法師者、依己之不義、蒙天絕譴、職、全非、橋建立之過、此上、一切不可稱、不吉、有彼橋爲二所、御參詣要路、無庶、往反之煩、其利非一、不願倒以前、早可加修復之旨、被仰出云々。

といふのである。相模川の橋梁修理に關しての老臣連の評議である。之に對して下した實朝將軍の明快な裁斷は、洵に透徹した意見であるが、旁吉事に非ず、強ひて蠲蛇の事をするにも及ぶまいと巡遊するところを見れば、右幕下の命終は、兎も角尋常では無かつたらしく、少くともさう皆に信ぜられてゐたらしく思はれる。それは保曆間記に看れば一層よく知り得られる。

同建久九年冬、大將殿相模河ノ橋供養ニ出テ歸セ給ヒケルニ、八的ガ原ト云所ニテ被亡シ、源氏義廣義經行家以下ノ人々現シテ、頼朝ニ目ヲ見合セケリ。是ヲバ打過給ケルニ、稻村崎ニテ海上ニ十歳許ナル童子ノ現シ給テ、汝ヲ此程隨分罷ヒツルニ、今コソ見付タレ。我ヲバ誰トカ見ル。西海ニ沈シ安徳天皇也トテ失給ヌ。其後鎌倉ヘ入給テ、則病付給ケリ。次年ノ正月、正治元年正月十三日終ニハ失給ヌ。五十三ニソ成給フ。是ヲ老死ト云ベカラズ。偏ニ平家ノ怨靈也。多クノ人ヲ失給ヒシ故トツ申ケル。

これはかなり後のものであるけれども、そして頼朝當時の人々の噂してゐたところ、がやはり相似たものであつたか如何かまではわからぬが、少くとも先に掲げた相模川の梗概と併せ覽て、其の説話の素材としての傳説が、既に古く行はれつゝあつた



事の想測は許されねばならぬであらう。(其の時頼朝の乗馬が相模川に飛入つて死んだので、爾來馬入川と呼ぶやうになつたといふ地名傳説が、新編相模國風土記稿や東海道名所圖會などに見える。)

此の傳説を假に其の儘容認するとすれば、單なる偶然の落馬に附會して來た根無し言から結象したとしてもよし、又頼朝が幻覺に脅かされたと解釋しても通ずるが、廣益俗説辨(附編卷三、士庶頼朝夢遊の説)に載せてある所は、其の所據を知り難いけれども、甚だしく人事的、史的解釋に墮してゐる傳説である。即ちかの橋供養に際して、能登守教經が女装して近づき、頼朝を馬上から斬り落したのを、大勢困んで教經を討取つたといふのである。畢竟、景清・盛次乃至薩摩中務(長門本家卷一九傳説の變形、千本櫻の銀平なり、覺範なりと類を同じうするもの、所謂俗説たるや論無きものであらう。頼朝の薨去に就いては、別型の傳説が今一つある。即ち頼朝が白衣を被いで密に歸館したのを警吏が誤つて捕へて刺し、遂に薨じたのを暴疾と披露したといふので、刺した人物を安達盛長とするのは眞俗雜錄、畠山六郎重保とするのは頼朝最期物語であるが、其の死因の疑はしいところから、いろ／＼の傳説を生じたといふ意味の他、直接此處には必要が無いから略する。

景時の滅亡も亦史實に近いものがある。即ち結城朝光を護したのが導火線となつて、有名な鶴岡廻廊に於ける和田・三浦・畠山・安達以下鎌倉の名臣六十六士の會盟となり、

養鶏者不畜狸(狐)收獸者不畜豺狼云々。

の運署の訴狀を大江廣元に付して、景時の誅罰を迫つた當時の狀は、吾妻鏡(卷二六、正治元年十月廿五・廿七・廿八日、十一月十二・十三日等)にかなり詳しく記されてある。かくて梶原一族の鎌倉追放となり、所領相州一宮に退去し、更に脱出して謀叛を企つる由の聞えあり、三浦比企・糟谷等討手として後を追ふところに、景時父子駿州清見關の邊で、其の地近隣の誰彼的を試みに集つた者共の退散する折柄に行き逢ひ、彼輩に怪しまれ、箭を射懸けて追跡せられ、遂に狐が崎に返し合せ戦つて此處で景季・景高・景茂等に至るまで悉く滅亡した事が、やはり吾妻鏡(卷二六、正治二年正月廿日丁未)に詳記してある。但し、的矢を射てゐたのは、宇都宮彌三郎ではなく、蘆原小次郎・工藤八郎・三澤小次郎・飯田五郎といふ面々で、景時を討取つたのは、矢部小次郎と記されてゐる。なほ宇都宮は前述六十六人の會盟者の中に、宇都宮彌三郎・頼綱の名が見える。保曆間記の記述はやはり最も本書に近く、的を射てゐた連中に、的矢で景時は頸の骨を射られて失せたとし、

義經ヲ讃言スル怨靈トツ中ケル。

とあるのが、本書では一層敷衍されたといふ形をなしてゐる。

景時一族の末路に關しての正史の資料は吾妻鏡だけではない。玉葉・明月記をはじめ、愚管抄などにも、疎密の差はあるがそれ／＼に記述せられてゐるところで、兎に角相模川の末段の構想も、作者の全然の空想ではない事は明らかである。或は保暦間記などが粉本かも知れない。唯、これは二代頼家將軍の治世の出來事なのであるが、それも前將軍薨後間もなくの事で、即ち其の年の秋から翌春へかけて勃發し、景時の最期は恰も頼朝の一周年に當る月なのであるのも因縁が深い。

兎もあれ、此の草紙では、奸物の稻毛三郎入道が行基菩薩の再來めいた聖僧にまで進展する一方、源二位卿も重忠の力で回生の喜を見げぢ／＼の敵役が、頼朝在世中に橋供養が機縁となつて滅んでしまふのも皮肉ながら手廻しがよく、先づは鎌倉萬歳、判官萬歳、そして秩父萬歳めでたし／＼の物語である。

なほ、此の相模川橋供養の怪事を素材として、此の草紙に對應する謠曲に橋供養（二名、相模川）がある。（謠曲評釋、第一輯に收めてある。）これは謠曲としては船辨慶を學んでゐるものと看られ得る。秩父重忠が義經若宮別當が辨慶役である。鶴岡神鳩の冥助によ

つて平家の悪靈退散するに終り、特に頼朝落馬の事、義經亡魂の事、梶原の事などは述べられてはゐない。只此の平家の悪靈の先頭に立つて、船辨慶の知盛の代役を勤めてゐるのが即ち能登守教經である。これが前に引いた俗説辨の傳説に一致するので、さうした傳説に基づいて此の曲が成つたのか、或は知盛に代ふるに門脇殿の二男、平軍隨一の大勇士を以てしたのが、かの形の傳説を生むに至つたのか、何れかであらう。

さて、以上だけでは、近古小説としての解説に止まる。それだけでも悪くない收穫であるが、なほ舞の本としての問題が又別に述べられねばならない。

山崎美成の歌曲考といふもののある事を、藤田徳太郎君から聞かして貰つたのは、去年の十一月頃ではなかつたかと思ふ。其の中の幸若舞の本の曲目中に相模川の名が見える由も、其の時同君から聞き得たのであつた。新纂の初輯の原稿、校正や俗用やに追はれて、續輯の整理にかゝる暇が無かつたので、其の儘にしてゐいたが、此の程漸く着手する運びになつたので、調べてみた。所謂三十六番は、寛文・貞享・元祿の書籍目録と群書一覽のと、互に二番の出入がある事は周知の事であるが、歌曲考（上巻、幸若舞の條、「舞目録」）に擧げてあるのは、群書一覽（卷三、童子類）所載の分と一致し、右三十六番

と記した次に

鎌田 靜 相模川  
 泉城 切兼曾我  
 右五番外

と擧げてある。即ち古書目の三十六番中の鎌田と泉が城(和泉が城)とを數へる他、普通にも番外舞曲として現今知られてゐる靜切兼曾我の二番を加へ、更に此の相模川を入れてあるのが珍しい。三十六番は其の順序まで全く群書一覽の通りであるから、恐らく同書に據つたのかと思はれるが、番外曲は傳聞を録したのか、別に所據が在つたのか知り難い。

かく相模川を舞曲として掲ぐるもの、右の歌曲考の他に未だ所見が無いし、幸若家元の方でも之を番外曲に數へてゐる由を聞かぬのであるが、前に引いた古書目に就いてみても、『群書目録』は三十六番の次に、つるぎさんだん切かね曾我しづか夢あはせと、いづれも番外舞曲として今日知られてゐるものを掲げ、それに引續いて、からいと相模川を擧げ、次にうすゆきうらみのすけぶんしやうはちかづきさごるも朝がほの露といふ順に出してゐる。即ちからいと相模川は番外舞曲と草紙物との境界に

之を立たせてゐる。夢あはせまでの四種も、草紙としても行はれ、又特に番外舞曲と註しては出してないのであるから、或は相模川までを番外舞曲と見做す事も可能とも言へる。寛文版の書目でも、やはり三十六番の次が夢あはせまで、右と同じ順序で、さがみ川以下の順序も同じであり、又夢あはせとさがみ川との間にからいとが一つ挿入せられてゐるのも同じで、若しからいと(御伽草子の唐糸草紙である)以下を純草紙物と觀れば、夢あはせまでが番外舞曲といふわけになるのである。併しかの古書目の編纂者には草紙としての他、恐らく番外舞曲といふ意識は無かつたらしくも思はれるから、必ずしも順序に拘泥する要はないかも知れぬ。

一方、霞亭本のは純然たる讀み物の體裁であるが、研究室本はフシこそ附してないが、語り物らしい體裁に見られる事前述の通りである。又單に卒然として其の詞章に臨んだ時の感じは、やはり舞の本式表現と言ひたいものである。内容に於ても、和泉三郎の亡魂の述懐は舞曲和泉が城の素材をなす傳説と略同一であるが、更に辨慶の靈の出現する段の一節、

かく申すは、珍しからぬ武藏坊辨慶なり。あの言ひ甲斐無き者の謔奏、訴につかせ給ふ頼朝の御心の内こそ無念なれ。此の遺恨を散せんには辨慶あら人神となつて、ゐるなりにて牛頭馬頭の阿防羅刹婆

婆にては大天狗小天狗各、まんたんを語らひ、鎌倉に火の雨を降らし、人畜ともに焼き殺し、鎌倉をば信濃の岳ともなさんと思ひ候へども、我君は只今までも、親兄の禮を重んじ給ふ故に制し給へば、心にまかせぬ事の口惜しさよ。

といふ詞章を、舞曲富樫の

日頃我君七生までと契り置かせ給ひたる、愛宕山の太郎坊比良の山の次郎坊山々の小天狗、てんのやしむ八將神、牛頭馬頭、阿防羅刹、異形異類の鬼共を引具し候ひて、本望なれば、關東へ刹那が間に亂れ入つて、箱根山の峠より、黒雲をたなびき、電光を飛ばせ、玉を磨く鎌倉に、車軸の雨を降らせ、谷七郷を洗ひ流し、憎かりし梶原を、さうなくも殺さずして、百鬼神に仰せつけ、熱鐵の湯を沸かし、口の内へ流し入れ、六腑五臟を焼き拂ひ、七代子孫を取殺して、本望を遂ぐるならば、管丞相にてあらずとも、荒人神と武藏めが、仰がれんずる事共は、案の内と思ひければ、

といふ邊に對比すると内容から、筆觸、辭句まで、餘りかけ離れてゐる作とは思へないのである。併し舞の草紙であるとしても、比較的新しい方のものであるやうに感ぜられる。新しいと言つても、寛永六年以後のもので無い事は確であるが、恐らくやはり室町末或は徳川初世の作であらうか。

なほ、他に旁證が欲しいのであるが、兎に角、番外舞曲として相模川を認めるとすれば、現存幸若舞曲に更に一番を加へて計算せねばならないし、少くとも草紙物として現存近古小説の一には數へられねばならない。

## 幸若の曾我物

幸若舞曲の曾我物は所謂三十六番中に、元服曾我和田酒盛、小袖曾我夜討、曾我十番切の五曲が數へられ、群書一覽の所載に従へば、尙之に劍讚歎の一曲が加はる事になり、他に番外として切兼曾我があり、合計七番を算する。(曾我物語と關係があるといふ意味でなら、夢合もあるが、曾我物ではないから入れない。)之を義經物の十五番(末來記、笛之卷、鞍馬出、烏帽子折、山中常磐腰越、堀河夜討、四國落、靜富樫、宍探し、八島、清重、高館、舍狀)乃至十七番以上に伏見常磐、常磐問答を加へて、又若し秀衡入(但し、これは猶疑問で、御伽草子の秀衡入、乃至は古淨瑠璃の吹上秀衡入と同じものか、或は類似の作か不明、それとも若し下に擧げる和泉が城の前半の別名ならば重複)皆鶴(これも猶決定的とは言ひ難い)が舞曲として計上すれば十九番となり、更に准義經物としての和泉が城及び相模川(これも舞曲として數へれば)をも合すれば、最少に觀て十五番から最大に觀て二十一番に互る優勢さには及ぶべくもないが、兎に角、舞曲中では、少くとも番數の點に於てやはり之に次ぐ大立物たるを失はない。そしてそれは義經記と

曾我物語とが對立し、判官最良と曾我最良とが比肩してゐる中世の文學現象乃至思潮の一般傾向に相應じてゐる。

右の七番が曾我物語と同材を取扱つてゐるものであることは改めて言ふまでもない。今之を大體編年制的の順序に——隨つて曾我兄弟の成長年次にも略相應ずることになるのであるが——並列して、それ〴〵曾我物語の各卷の記載内容と對照してみよう。

舞 曲

曾我物語 (流布本)

- 切兼曾我 卷三 源太曾我へ兄弟召しの御使に行きし事・母歎きし事・祐信兄弟を連れて鎌倉へ行きし事(兄弟を梶原請ひ申さるゝ事)・由井の濱へ引出されし事・人々君へ參りて兄弟を請ひ申さるゝ事・高山重忠請ひ申さるゝ事(ちやうしが事にて兄弟助かる事)・兄弟曾我へ歸り喜びし事
- 元服曾我 卷四 鎌倉殿箱根御參詣の事・箱王祐經に遭ひし事……箱王曾我へ下りし事・箱王が元服の事
- 和田酒盛 卷六 和田義盛が酒宴の事(ふん女が事辨才天の事)・朝比奈虎が局へ迎に行きし事・虎が盃十郎に差しぬる事・五郎大磯へ行きし事・朝比奈と五郎力競の事
- 小袖曾我 卷七 (千草の花見し事)・小袖乞の事(しやうめつ婆羅門の事)・班足王の事(母の勘當宿さるゝ事)……鞠子川の事
- 劍 讚 歎 卷八 箱根にて暇乞の事(同じく別當に逢ふ事)・太刀刀の由來の事・三島にて笠懸を

射たる事

- 夜討曾我 卷八 富士の狩場への事……祐經を射んとせし事・高山歌にて訪はれし事・屋形廻りの事・祐經が屋形へ行きし事・屋形の次第五郎に語る事
  - 卷九 ……曾我への文書きし事・鬼王・だう三郎曾我へ返しし事・悉達太子の事・兄弟出で立つ事・屋形々々の前にて答められし事……祐經屋形を更へし事・祐經討ちし事・主藤内を討ちし事
  - 十番切 卷九 祐經に止めを刺す事・十番斬の事・祐成討死の事・五郎召捕らるゝ事
  - 卷十 五郎御前へ召出され聞召し問はるゝ事・犬房が事・五郎が斬らるゝ事
  - 卷十一 兄弟神にいはるゝ事
- 右下段の( )内は、小異又はその記事に觸れてゐるだけの場合を示し、又中間に直接關係の無い日次の條項のある場合は省いて……線を以て之を示した。

即ち題材から觀れば、除外例無く曾我物語の記事と全く一致する。(異本とも一致する部分はあるが、特に流布本と最も近接してゐる。)各曲に取扱はれてゐる説話内容も、物語のそれと殆ど大同小異で、主題として舞曲獨特の構想としての顯著なもの乃至舞曲にだけ採入れられた珍しい曾我傳説の新材料といふべきものも餘り無い。要するに縮冊版の曾我物語である。(尤もその意味では、挿話過剰の流布本曾我物語が清算されたやうなもので、且主要な題材はすべて集められてゐて、却つて氣が利い

てゐるとは言へる。この點、義經物が必ずしも義經記の縮冊でなく、別に未來記笛之卷山中常磐舎、狀常磐問答、相模川の新題材、清重和泉が城の潤色物——必ずしも義經記を潤色したといふ意味に限定せられなくてもよい。義經記と同材が潤色されたと言へば正確であらう。——等を含むに比して變化に乏しい憾がある。更に右の七曲は唯一つの劔讚歎を除き、他の六番悉くが内容の大凡は勿論、曲名まで謠曲の曾我物と又それ〴〵同一である。(但し、謠曲の夜討曾我には十郎討死、五郎生捕まで含まれてゐ、別に十番切があつて、これには夜討から十郎討死までが脚色せられてゐる。又謠曲元服曾我の如き、祐經との對面はないが、元服の件は曾我物語よりも舞曲に近く、確に兩者の關係の密接さを否定し得られない。)これ亦舞曲と謠曲との義經物が題名にも内容にも出入異同あるものが少くない(同材異名の一例は舞の未來記と謠の鞍馬天狗、異材同名は舞の八島——謠の攝待に相應ずる——と謠の八島——屋島合戦の義經を主人公とした修羅物——舞曲のみのものの例としては、笈探しがあゝる。)のに比べて、やはり單純である。總じて舞曲の曾我物は曾我物語との距離が餘りに遠く無さ過ぎ、又謠曲と比しても異色が少な過ぎ、且謠曲の曾我物の相當多様なものにも匹敵出來ないのである。曾我傳説の展開からすれば、かなり物足り無さを感

じさせられる。

表示した目次によつても推測が出来るであらうが、實際舞曲の各番は忠實に曾我物語の記述を逐うてゐる。試に切兼曾我の曲を取つてみると、

安元元年神無月の其奥野の狩場にて河津の三郎討たれし時、五つや三つの若ありしを曾我の太郎助延祐信養育し、兄の一滿十一歳の箱王九つの年物憂き事こそ候ひけれ。東八ヶ國の大名小名、頼朝の御前にて御物語のありし時、頼朝仰せけるやうは、天下に於て頼朝にまして果報の者は候まじ。それを如何にと申すに、保元の合戦に祖父爲義を初め一門皆討死し、中一年有つて父義朝、悪右衛門督に語らばれ、その軍に駆け負け、東國さして落ち給ふ……

と書起されてゐるが、之を曾我物語の方でみると、

斯くて三年の春秋の過ぐるも夢なれや、早くも一萬箱王九つにぞなりにける。その頃彼等が身の上に思はぬ不思議ぞ出で來たる。故を如何にと尋ぬるに、鎌倉殿侍共に仰せられけるは、保元の合戦に爲義義朝に斬られ、平治の亂れに義朝長田に討たれしより、この方驕れる平家を悉く滅し、天下を心のまゝにする事、我等が先祖におきては頼朝に勝る果報者あらじと、仰せ下されければ……

となつてゐて、舞曲の方は唯曾我物語の文を敷衍したやうな觀をなしてゐる。而も舞曲の方の冒頭は、これ亦曾我物語同卷の卷初、九月十三夜名ある月に一萬箱王庭に出でて父の事を歎きし事の起首

そも、伊豆國赤澤山の麓にて、工藤左衛門尉祐經に討たれし河津三郎が子二人あり。兄をば一萬

といひて五つになり、弟を箱玉といひて三つにぞなりにける。父に後れて後、いづれも母に付き、繼父曾我の太郎が許にて育ちけり。

とあるのから來てゐるやうである。物語で助命の仰せを蒙つた畠山は、その臣半澤成清を使として之を祐信に傳へさせるだけなのを、舞曲では半澤が刑場へ駆けつける敘述も、簡單ながら加へられてゐる。なほ細部に就いては、物語の方では梶原景季が命乞をして次に諸大名、最後に重忠の忠諫となるのであるが、舞曲では景季が、

なう如何に曾我殿それがしも御前にて事の仔細を申すとも、このまゝ御免は候まじ。御對面も候はば、取合せよきやうに申すべきにて候。疾く出で立たせ給へ。

と慰めて置きながら、愈、御前へ出ると、頼朝の嚴命急なので、何とも言ひ出し得ず宿所へ歸つたとなつてをり、又、祐信が幼き兄弟の成敗を赦されたいと乞ふ理由として、頼朝石橋山の敗軍に土肥の杉山の伏木に隠れたのを、景季の父景時と兩人で救うた舊功に替へたいと述べるだけ、物語にも亦他の文獻にも餘り見えない珍しい事實であるが、この舞曲以外、唯、相模川だけには見える如き、これは切兼曾我方が早いかも知れぬ。この場合祐信が景季と共に兄弟の助命を乞ふに申出る理由として、舞曲作者の思ひつきとしても、亦さうした傳説があつたとしても、極めて自然である。或は又、重忠の諫言の引例が同じく外國説話ではあるが、少し異なつてゐる。

(かういふ挿話的な部分は舞曲の方が遙に簡單である。如き斯うした小異はあるが、その他主な部分は殆ど曾我物語と變らない。兄弟の厄難が敵祐經の讒口に起因すること、使者の景季であること、祐信と同道することも、諸大名の愁訴、重忠が死を以ての諫争、母が別れの悲歎、救命歸郷の歡喜、兩者皆同じである。尤もこの曲は番外曲で、比較的後に出來たものかも知れないから、或は曾我物語の流布本から出たとしてもいゝかも知れない。劔讚歎に就いても同じ事が言へる。(そしてこれも寛文・貞享元祿の書籍目録では番外曲である。他の曲(或はこの二曲を含めても)と曾我物語との先後は俄に斷じ難いし、又兩者の共祖の存在も豫想せられ得るが、假に曾我物語特に流布本から出たとしてもさして不都合は無い程、幸若の方は唯、敷衍潤色せられたといつた程度にとゞまつてゐるものばかりである。

が、舞曲の曾我物が曾我物語そのまゝ、と言つても、それは概括しての事で——乃至義經物に於ける場合と比較しての事で——仔細に點檢すれば、單なる異同以上に興味を惹き新味を出してゐる點が皆無だと言ふのではない。前にも言つた通りに、物語の方よりは冗漫煩雜な岐路に入りたがる挿話が孰れかと言へば、減じてゐる點はその勝つてゐる一である。文章はもとより物語より遙に稚拙ではあるが、描寫が一

段動的戯曲的になつて来て——これは舞曲の本質が然らしめるものであるが——寧ろ生々した場面や誇張されてはゐるがその爲に性格や風采動作が印象的な効果を擧げてゐる場合すら往々あるのがその二である。就中、和田酒盛はこの意味でも、亦題材から言つても七曲中群を抜いてゐる。草摺曳の件も物語の方は平面的なのに、是は「ふんちがつて立つた」「前へえいと引いた」「後ろへえいとのいた」「草摺切れてのきけれど、立ちどころを去らずして、ふんちがつて立つた」とツケを打たせたいやうな描寫である。物語の時致が「四天王を作り損じたるさま」で立ちはだかつてゐるのも面白い形容であるが、舞曲の「四角なる眼を、五角にくわつと見開いて義盛が白髪頭を睨みつける五郎」力の出で来るしるしに、左右の腕と肘に、力筋といふものが、十四五二三ふつくと出で、「胸をおぼる（藏ふか或は「に生ふる」の誤か）力毛は、碁盤の面に銅の針を摺り並べたる如く、胸の筋が額へ上り、額の筋が胸へ下り、して力む朝比奈、金平淨瑠璃を待たずして、初代團十郎を待たずして、荒事は既に創められてゐるのである。虎御前が凜然たる愛の意志表示は無論物語に於けると甲乙は無い。

部分的に兄弟の友愛情味が物語よりも却つて濃やかに出てゐる場合のある事がその三である。物語では剃髪を嫌つて箱王の方から曾我へ下り（元服曾我では箱王

が法師になると聞き、稚兒姿を今一目見ておきたいと、十郎の方が箱根に上り、縦ひ母の不興を蒙るともと、二人涙の中に決意して山を下るのである。謠曲の元服曾我もこの方に近いことは前に述べた。扱元服の爲に北條時政を頼つて行くに、謠曲だけは下山の途、兄十郎が元服させるのを、箱根の別當が後を追つて来て祝ふことに作つてある。物語は、

夜も明けければ、いざやとて馬に打乗り、唯二騎曾我を出でて、北條へこそ行きにけれ。

とだけであるのを、舞曲では、

祐成馬を用意す。流石馬は一疋なり。祐成馬を引廻し、乗れや箱王。「召され候へ、十郎殿」祐成聞召されて、あら愚かの事や。稚兒を徒歩にて歩ませ、大俗の身として馬に乗り、路次を行かう程の、逆なる事の候べきか。「如何なる御事候ぞ。宗兄を徒歩にて歩ませ申し弟の身として馬に乗り、路次を行かう程の、逆なる事の候べきか。召され候へ、十郎殿」早乗れや箱王と、兄弟馬を色代す。「時刻移りて夜明けなば、大方殿に漏れ聞え、止められては叶ふまじ。箱王殿も乗り給へ、祐成も乗らんとて、馬一疋に兄弟乗り、曾我の里をぞ出でにける。上古も今も末代も、例少き次第なり。

といふ仲のよさである。又、祐成が祐經の屋形に呼び入れられて盃を與へられ、みすみす敵を眼前に置きながら、詠へて立歸つた條を、物語は、

……亂舞の折節、あはれと思ひしかども、御分一しよにこそと存じて、詠へつる志推量り給へ。五郎も聞きて、御ふちはさる事にて候へども、これ程寄りつかずして心を盡す。便宜よく候はば、御討ち候べ



きものを。さりながら一太刀づつ、其々に斬りたく候ぞかし……」  
……酒盛半ばなりしに呼び入れ祐成も舞を舞ふ程の事なりつるに、面に當てて廣言どもしつる無念さよ。一刀刺じ、如何にもと思ひけれども、吾殿に命が惜しまれて、手に握りたる敵を逃しつるこそ無念なれ。五郎聞きて、是や寶の山に入り、手を空しくする風情なり。嬉しくも御妹へ候ものかな。餘し候べきにも候はず。南無阿彌陀佛とぞ申しける。

と、割合に平淡であるが、夜討曾我では祐經と對面して、無限の侮辱を堪へ忍び、敵の盃を受けつゝ、恨みを呑んで歸つて來た十郎が、弟に面上の涙を怪しめられて、

それがしが涙の風情別の仔細にて候はず。敵祐經に對面し、初對面の言葉のこはかりし時、刺違へて兎にも如何にもなるべかりしを、御邊に名残惜しうて、つれなく命ながらへ二度逢うたが嬉しさに、さぞ涙やこぼるらん。

と、わざと言ひ紛らはしたのに、

時致承り、あゝら有難の御説や候。慈悲は上より下るとは、今こそ思ひ知られて候へ。斯う申す時致ならば祐成の御事をば夢にも思ひ出すまじい。たまに逢うたる敵なればと思ひ差しに直らぬ先に、刺違へ、兎にも如何にもなるべきものを思召し出されて是までの御出では有難うこそ候へ」と感激してゐる。物語の方が卒直素材で實情がある代りに、これは又別の意味が加へられて、幸若作者、否、民衆の一層進んだ曾我最員が下した兄弟の性格觀が面白く讀まれるのである。十番切で五郎が助命の御教書を下し賜はらうとするのに對し、兄

と一緒ならばと答へて慟哭しつゝ、首をさしのべるのにまで、この兄弟一心同體の精神は一段明確に一貫してゐる。そしてこれと對照的に、敵祐經が又一段惡人化、敵役化の本道を遠慮なく辿らしめられつゝ、ある事も、想像に難くないであらう。(歌舞伎の「對面」の祐經が、兄弟に狩場の切手まで投げ與へて、討たれてやる日時と場所までも豫約する大腹中は、この祐經の敵役化が極端にまで行き詰めた後、反動的に轉向したので、これ亦曾我最員の極端になつた結果——敵自身まで兄弟の孝心に感動させられることになつたのである。——と、餘りに親しいものになり過ぎた曾我の世界が、芝居國の御約束に順應する範圍内で工夫せられた趣向の變化にも、亦一には座頭が扮する所の役柄からやがてそれが立役化して來たものにも因るのであらう。)更に部分的の異同中、全曲の價值を左右するといふやうなものではないが、他の意味で一寸目につくやうなことが二三無いでもない。例へば、元服曾我の箱王元服の席で、秩父には六郎重保、三浦には朝比奈義秀、曾我には十郎祐成と、並べ謠はれる舞の達者、就中十郎は妙手と聞けば、祝言に一さしと北條に望まれて祐成が舞ふことがあり、而もその歌の詞が、

しづや、しづ腰のをだまき繰り返し昔を今になすよしもがな

と、靜御前の專賣物を横取りしてゐるやうなのや、和田酒盛に雙六の骰子の目の名稱の由來が語られ、劔讚歎に小鍛冶に關する珍しい傳説——曾我物語及び平家（或は太平記に附屬したものである）の劔卷の友切丸の來由傳説の異形——が含まれ、又田邊別當教眞の傳説は略、劔卷と共通してゐる。てゐるのや、夜討曾我に重忠と義盛の連歌（曾我物語では重忠一人の歌であるが、兄弟に今宵の夜討決行を暗に勧めることは同じである。）や屋形づくしと紋づくし（曾我物語では屋形づくしだけ）があり、或は十番切で問答の場に五郎が法華經の功德を長々と説法して一座を隨喜させるなど、これらは習俗や時代思潮や傳説や文學形態上の特異様式やその他いろいろの側から面白い材料となり得る價值が十分にある。

それから最後に、七番の曾我物は、これ亦劔讚歎を除き——これは前記劔卷が取扱つてゐると同種の寶劔説話に關する素材なり態度なりで、且一面縁起由來系圖を語る近古の時代流風の現れである。別に御伽草子風の劔卷といふものもあり、又曾我物語の、太刀刀の由來の事の條も同種のものであるは言を俟たない。——何れも敘事詩的作品から劇詩的作品への推移に參與し、之を助成してゐる意味で注目を逸する事の出來ないものである事を附言せねばならぬ。先づ切兼曾我和田酒盛小袖曾

我、夜討曾我等、或は殆どそのまま、或は少しく改變せられて古淨瑠璃として語られ、續いて近松物その他の戯曲となつて更生して來た。（なほ海音の玄宗皇帝蓬萊鶴には和田酒盛の雙六の故事が移入して來てをり、古淨瑠璃八幡太郎の鎌倉權五郎景政と安部宗任の草摺曳も五郎朝比奈のその轉化である。）勿論、それは舞の本からばかりではなく、曾我物語及び謠曲と合力して後世戯曲文學に特に影響を與へて來たのであつた。就中歌舞伎狂言が曾我傳説と特殊の關係を結んでゐる事は多言を要せぬであらう。やはり曾我物語及び謠曲と併せてのことで、獨り舞曲の力にのみ歸することは許されなければ、舞曲の働きかけは此處でも著しく、且明らかに舞曲から系統を引いてゐる事を認めざるを得ないものすら存するのである。切兼曾我は默阿彌の敷皮の曾我（富治三升扇曾我、一名比翼鶴千歲曾我）となり、小袖曾我夜討曾我十番切等は、同じく默阿彌の夜討曾我狩場曙や櫻痴居士の十二時會稽曾我と轉生した。（但しこれらは直接曾我物語からの、或は又近松の曾我會稽山を始め先進の淨瑠璃歌舞伎の影響をも併せ蒙つてゐる。）江戸で曾我物の初演は明暦元年正月山村座の曾我十番斬であつたことも言ひ添へて置きたい。又元服曾我は夜討曾我の十郎が祐經に對面した事をも配合して兄弟幼時の對面に作りなした所謂吉例の對面

劇のいろ／＼を生み出し、劔讚歎の源家の寶刀友切丸もこの場は採入れられて重要な役目を帯びしめられ、終にはこの刀は髭の意休事、伊賀平内左衛門が手に渡つて、助六の曾我五郎にまで大活劇を演じさせることになつたのである。(この意味ならば、劔讚歎の一曲も除外されなくてもよいわけである。)和田酒盛に至つては、先にも觸れたが、所謂江戸荒事の粹たる草摺曳の所作並びに歌曲類の源泉をなし、それは猶曾我物語(大石寺本などには酒宴の事だけで草摺曳は無い。)と共祖の功を争ふであらうが、その前段が物語では單に佛前に法華經を讀誦して父の冥福を祈つてゐるだけなのが、この同じ曲で

五郎時致は、古井と云ひし所に、矢の根を研き居たりしが、餘り眠たさに碁盤を引寄せ枕にし、ゆたかにこそ臥しにけれ。舎兄祐成枕上に立寄らせ給ひ、如何にや五郎、それ張良が四十二箇條の巻物を學したりと雖も、酒を過しぬれば何にも劣れり。千日したる用心も、目をつぶいぬれば、たつた一夜に無くなるぞ。斯程の白晝に、さやうに寛かに臥すか。起きよくと二三度、四五度、起させ給ふと夢を見がつばと起き

鎧取つて投げ懸け、裸馬にあふりを駆けて乗り込む(こゝだけは物語の方にもあるが)勇姿こそは、即ち隨市川の荒事の本山、成田家が十八番の一曲、矢の根五郎の根元で、これのみは曾我物語も將た謠曲も、その創始者たる名譽を主張する權利は無い。斯く

觀來れば、幸若舞曲の曾我物も、曾我最眞の發露に伴ふ復讐道德の完成についての功罪を、他の曾我傳説曾我文學と分擔しつゝ、我が國民精神の涵養に資したることと相俟つて、他面日本藝術——特に演劇・舞踊方面に於て——の進展に侮り難き寄與をなしてゐると言はざるを得ないのである。

ふりこぼり

—狂言「朝比奈」から—

狂言「朝比奈」のシテの語り、

抑も和田軍の起りは在柄の平太碓氷峠にて君に奪はれ、一度ならず三度まで鎌倉を引渡さるゝ。一門九十三騎平太繩目の恥を雪がんと親にて候義盛白髪頭に胃を戴けば、一門残らず鎌倉殿の大御所の南門に押寄せ、鬨をどつと作る。ふりこぼりがつゝぬきさげ切、この朝比奈が人つぶて、目を驚かす所に、義盛使を立て、何とて朝比奈は門破らぬぞ。急ぎ被れとありしかば、畏まつて候と、やがて馬より飛んでおり、ゆらりと立ち出づる。

とある中の「ふりこぼりがつゝぬき」といふのが變な文句なので、從來意味不明とせられてゐるやうであるが、それにつき少しばかり卑見を記してみたい。  
右の文について考へると、

ふりこぼりがつゝぬきさげ切

この朝比奈が人つぶて

と對立した敘述と讀まれ、つゝぬきさげ切と、人つぶてとが對し、「ふりこぼり」と「この朝

比奈とが對してゐると見られる。「ふりこぼり」はどうしても人名でなければならぬ。ところでそんな人が實際史上に在るかといふと、それは在る。建保の和田合戦の勇將として、朝比奈三郎義秀と並稱せられ得べきは、先づ古郡(新)左衛門尉保忠を措いて他に無い。と、これだけで前の疑問の答が提示せられたとしては少しあつけない。そして不十分な氣がする。もう少し説明してみたい。

吾妻鏡建曆三年(建保元年)五月二日壬寅の條に、

申刻、和田左衛門尉義盛率伴黨、忽襲將軍幕下。謂件與力衆者、嫡男和田新左衛門尉常盛、同子息新兵衛尉朝盛、入道三男朝夷、三郎義秀、四男和田四郎左衛門尉義直、五男同五郎兵衛尉義重、六男同六郎兵衛尉義信、七男同七郎秀盛、此外土屋大學助義清、古郡左衛門尉保忠、澁谷次郎高廣……(吉川本卷二〇)〔國書刊行會本第二、七六頁〕

又

三日、癸卯。小雨灑(中略)

御方兵有由利中八郎維久者、弓箭之道足吾々也。於若宮大路射三浦之輩、其箭註姓名。古郡左衛門尉保忠、郎從兩三輩中此箭。保忠大膽、分取件箭、射返之處、立匠作之鐵草摺之間、維久令與義盛、奉射御方大將軍之由披露云々……

義清、保忠、義秀等、並三騎、奪攻四方之兵、御方之軍士退散及度……

又新左衛門尉常盛、山内先次郎左衛門尉尚崎、余一左衛門尉横山馬允、古郡左衛門尉和田新兵衛入

道以上大將軍六人遁戰場逐電云々。(同七九一八〇頁)

又其の翌日の條には、

四日甲辰。小雨降。古郡左衛門尉兄弟者於甲斐國坂東山波加利之東麓石郷二木自殺矣。(卷二(國刊本第二、八一頁))

と見えてゐる。

徳川時代の小説ではあるが、高井蘭山の星月夜鎌倉顯晦録に至つては、もう立派な大立物の英雄に出来上つてゐて、

一族の内に萬夫不當の荒者と呼れし古郡新左衛門尉保忠(四篇卷之三)(帝國文庫本三七二頁)

として、將軍の前に面縛せられて取調べられる荏柄平太胤長をば、義盛はじめ一門九十八人の恥辱無念を見るに堪へかね、大庭に飛で下(三七三頁)「大の眼を悲し、兩の腕をまくり上げ、殿中に響(三七三頁)けとばかりの大音で罵り、勸ます痛快兒であり、愈、和田合戦になると、朝比奈義秀、土屋義清と三備各、一千餘人三方からの先陣の大將をつとめ(四篇卷之五)

西方よりは古郡保忠、北條が館の西より短兵急に攻よせ、おなじく鬨の聲をあはせ、箭を發するにおよばず、自身眞先に立て亂入(四三二頁)

し、藍澤藤五郎、藤九郎の兄弟を一度に斬り捨てて敵に膽を冷させ(四三三頁)

保忠古今の剛勇右に衝左に當つて切回る勢ひ、泰山の崩れかかるごとく、刃向ふ者疵を蒙らざるはなし。(四三三頁)

又

されども保忠無雙の暴者馬上の達者、早業手練の豪傑なれば、敵の亂箭を事ともせず、馬を飛し蹴立駆たて、近付ものを切ておとし、千變萬化して戦へば、(四三三―四三四頁)

といふ燕人張飛そのけの人物といふ次第である。

此の讀本は吾妻鏡の史實を敷衍した後世の實録體の小説であるが、古郡が朝比奈と並稱せられ、或は並稱せられないまでも、同じく剛勇無雙の武人として早く近古時代の國民傳説乃至文學中の一英雄となつてゐたらうといふ事の想測も可能である。それは舞の本和田酒盛に、虎御前が母の長者に思ひざしを強ひられるくだりに、

なんでもこのさかづきをば、わだへはさすまじもの、つまの十郎にさそうず。男なればとつてのまふず。のむほどならば、あさいなかふるこほりか、座敷をたてぞせんずらん。そのときみづから、うへこそ女なりとも、こゝろは男子にちがふまじ云々。(新群書類第八、舞曲部四〇六頁)

又祐成も、この盃論の難儀に遭うて、弟が意見したことを思ひ出すくだりに、

理をまげて宿がよひをおもひとどまり給へと、たびくせいぶんしつるものを、もちひずし打こえ、あさひな、かふるこほりがてにかゝつて、うたれん事は治定なり。しよせん命はつゆちり程もおしからねども、年來のすけつね、おやのかたきをばうたずして、しやうがいをうしなひなにかせん。(四〇七頁)

又、五郎が驅けつけて、朝比奈と草摺曳をした後、義盛に招ぜられる處に、

ときむね承てびやくえでさう。御めんあるぞ、只まいれ。うけたまはると申て、大はらまきをきながら、大だちをもちながら、しどけなげにもいで、新左衛門のめでのたい座に、つめ座にちやうどなをる。新左衛門はいらんして、これほどひろき座敷にて、つめさかもりはしようさうぞ。こゝをちつとくつろげたまへ。さかもりせんとありしかば云々。(四一二頁)

と見え、同じくだりの文が、上田博士校訂舞の本では、

時宗承り、白衣にて候。御免あるぞ、たゞ參れ。承ると申て、大腹巻を着ながら、大太刀を持ちながら、しどけなげにぞ出でたりける。ふるこほりの馬手の座敷に、詰座にちやうと直つた。ふるこほり殿御覽じて、これ程廣い座敷にて、詰酒盛は無用さうぞ。其處をちつとくつろげ給へ。酒盛せん云々。(三九八―二九九頁)

とあるので、その一斑が推知せられはせぬかと思ふ。

たゞ一つの資料ではあるが、なほ調べたら他に獲られるかも知れないが、右の資料と和田合戦の史實とから類推して、狂言の「ふりこほり」も、ふるこほりの訛、もしくは何時からかの誤聞乃至誤讀と見て大過ないかと思ふのである。さうすれば、「つゝぬき」は「筒拔」で、「さげ切」は「下切」(下斬)といふ解釋が、ちつとて來ることになる。

かう考へて來ると、田樂能の番組(春日若宮御祭禮圖、裝束給の能)の中にみる「ふるこほり」の曲目も、今日詞章が傳はつてゐないけれども、その内容について想像することが出來は

しまいか。狂言及び舞の本に見る如く、近古の武勇傳説の大成時代までに、彼れ「ふるこほり」はもう既に立派に朝比奈と對立させられてゐるばかりでなく、又獨立して此處に一番の戯曲的作品の主人公となりすましてゐるのではなからうか。もしさうであるとすれば、そしてその詞章が存してゐたら、それが又狂言の「ふりこほり」の解釋にも都合よい參考になつてくれたかも知れないと思ふ。

著者後記。右に引用した狂言の本文は、取敢へず通行の狂言記所載のものに據つたのであつたが、その後大藏流及び和泉流の狂言本を覽ると、共に果然古郡がつゝぬきさげ切り(大藏流)古郡がさげ切り(和泉流)と見えてゐる。これで愈々論議の餘地は無く、従つて小考は殆ど徒勞を敢へてした形となつた。資料調査の不十分な誹は免れ得ないものであるが、而も推論の手續と結果とに就いては、此の事實の學證によつてその正當さが確實にされたことになつて、聊か安んずるものがある。雞肋棄て得ずして、収録して置くことにした。

西鶴・馬琴

## 西鶴と古典文學

——特に一代男と源氏物語との關係を中心として——

### 一序 説

一代男を源氏物語の翻案と目することは、最早現時では國文學界及び國文學史上に殆ど常識化してゐる觀がある。が明治末大正初頃までは一般には

一代男が源氏物語の模倣であることは最も明らかな事實<sup>(註一)</sup>

では決してなかつたと思ふ。西鶴研究家にして同時に源氏學者であつた國文學の泰斗も一二にして止まらなかつたに關らず、此の問題に關しての積極的な主張は其の方面からは聽かれなかつた。藤岡作太郎博士の近代小説史(明治三十八九年の交の東大講義)にも

伊勢源氏などに得る所多く、其の一節一年としたるが如きは、或は源氏の年立より思ひ付きしなるべし。

とあるだけであり、その後の國文學史講話(明治四十一年刊)でも、

一代男の如きは大體の着想においてまた源氏に負ふところありといふを得べけれども、西鶴は竟に



西鶴にして、その本領とするところは極端なる寫實にあり。  
といふ考察であつた。

山口剛氏の「西鶴好色本研究」には兩者の交渉を一々掌を指すやうに摘出解説してあるが、正直言へば、我々は源氏を相當知つてゐても、一代男を讀んで一々その原據の卷々を、囊の物を取出すやうに手軽に指示し得るほど、兩作品の關係は一目瞭然でないことを告白する。「形見の水櫛と夕顔卷ぐらゐなら直ぐに誰にでも納得出來ようが、その他は源氏の翻案であるといふ豫想の眼から眺むればこそ、原據らしいものが摺み出されるのだけれど、普通の讀者には氣づかれずに通るのが寧ろ眞實であらう。藤岡博士を始め一般の國文學者が此の斷定に躊躇したとて、それは毫も謬ではなかつたと言ひ得る。それほど源氏と一代男との關係は模糊としてゐるのが事實である。少くとも「最も明らかな事實」ではないやうに思はれる。だからこそ其處に天才西鶴の手柄が存するのである。餘りに一々見えすいてわかるやうでは、西鶴も竟に一個の平凡なる模擬作者に過ぎない。

此の模糊の幕をあけ、雲霧を拂ふに努力し且成功した功績は無論山口剛氏に歸せられねばならない。そして又これに示唆を與へた先驅者としての水谷不倒氏の卓

見を没却することは出來ない。芳賀先生の國文學史十講に、

西鶴が大體に於て源氏物語を學んだことは疑ないことです。この事は曾て水谷不倒君も對照して委しく論ぜられたやうに記憶します。

と見える。これは即ち列傳體小説史（上巻、第三章井原西鶴）の所論を指すので、藤岡博士の説も恐らくそれから導き出されたものと推測し得られ、又山口氏の綿密該博な研究も、その大體の輪廓と結論とは殆ど此の水谷氏に於て成立してゐるものを延長し敷衍し詳説し、且源氏の原典の各部分と一層細かに對照して、水谷氏の所説の確實さを裏書したものであるといふも過言ではないのである。<sup>(註二)</sup>その後の學者は唯此の説を借用してゐるといつた形に止まるやうである。

兩氏の研究はまことに歎賞に値する發見である。そして以下に論じてみようとする所も、大綱に於ては兩氏並びに他の諸家の所説に殆ど加へるものがないのであるけれども、而もこれら在來の定説も、部分的にはなほ檢討を要し、是正及び添加されねばならないものを見出すが故に他ならない。即ち私見の論點を要約すれば、大略

一、一代男が源氏物語の翻案であることを他の諸點からも一層確證したいこと。

二源氏物語の翻案としての一代男は成功か不成功か——西鶴ほどの程度に源氏物語を理解してゐたか。

三、山口氏の所説は往々所好に偏する獨斷の嫌ある場合があり、且餘りに源氏との關係をつけ過ぎるに急であつた點に、少しく行き過ぎはないかの危惧があること。

の三點に歸せられ得る。そして同時に論述の過程は又おのづから西鶴の古典文學に對する知識理會の問題となるであらう。

註一 山口剛、西鶴好色本研究の詞句。

二 日本文學聯講「近世上」源世草子概説、井原西鶴の山口氏の所説、引例まで水谷氏のそれと合致する。又二代男その他に互つてを、廣く源氏の模倣と見るのも、既に水谷氏の意見である。

## 二 兩作品の相似

### (一) 主人公の好對應

さて我々は暫く白紙にかへつて、こゝに源氏と一代男とは果して關係の緊密なるものありや否やを一應調べて見よう。即ち兩者に如何なる外觀的相似ありやといふ問題が先づ取上げられねばならない。第一にそれは、主人公の好對應といふこと

である。これは水谷氏も主として指摘してゐる點である。もとよりその主人公の生活の舞臺——貴族社會と平民社會——の差異と、生活内容の差異即ち生活の質的差異——戀愛と好色——はあるけれども、兎も角性的生活の異常非凡な男性を主人公としてゐることだけは一致する。戀愛と好色と、この二つは大まかには一般に屢々同一視されがちである程、兩者全然別個のものであり得ないと共に、又おのづからそれの異なるつた形態と内容とをもつと観ることが十分可能であることと言ふまでもない。一言で言へば、前者は精神的要素を主調とし、後者は物的要素の勝つてゐるとの區別が、平凡ながら最も妥當な觀方であるべきであらう。そして源氏と一代男とに於て、一方はその性的生活の精神的方面が重要視せられ、他方は物的方面が強調せられてゐるのがその差異なのである。源氏は即ち物の哀れの理解者實踐者である。が世之介と雖も亦その反對のものでは決してない。そして光源氏にも亦本能的唯物的な行動も無論皆無ではない。所詮その差異は相對的のものでしかない。唯その點で兩者の性生活が外觀的相似をもつのは甚だ當然でなければならぬ。唯併し作者の人生觀照と創作態度を反映して、それ／＼主人公の行動と生活情調とに於て、兩作品は全然對立的な別個のものを創り出してゐることも、讀過印象に於てす

ら、何人にも感知し得られる所であることも亦否定し難い事實であることを付け加へねばならない。

(二) その性生活の量的對比

源氏物語に登場する人物四百幾十人の内、光源氏の戀愛對象として描出された女性性は、普通に考へられてゐるほど多くない。問題にされてゐるのは十五六人内外で、その中で又主な愛人は更にその數が局限せられる。(すみれ草に名の見えてゐるのが十五人である。)併し名前の明記せられぬもの(若紫卷・花散里卷等)或は全然表面に現れないものも相當あるべく想像の餘地が與へられてあるから、もつとその數は増加されても差支ないであらう。少くとも物語類中の人物としては、やはり超凡の部に屬せしめらるべき方であらう。世之介に至つては七歳から五十四歳まで「たはふれし女三千七百四十二人、少人のもてあそび七百二十五人」手日記に「(二代男)といふ大誇張大飛躍である。此の數の根據は不明であるが、恐らくそれは傳説の在五中將に暗示を獲た所はなかつたか。例へば御伽草子の小町草紙には、業平の關係した女性千人と傳へるが實でない、特に主なる愛人は十三人であつたとしてある。又やはり御伽草子の磯崎には

實にや在原の業平は、主ある人をも隠れ顯れ望を叶へければ、三千七百三十餘人の女房は残らず成佛しけるとかや。

とあるから、業平に關してかゝる迷信的傳説が中世に行はれてゐたらしいことが知られる。此の業平の傳説は一面源氏とも關係があると觀られ得るが、世之介が又それと無縁でない證は、前出一代男の文が

……手日記にしる、井筒によりて、うなるこより……

と續けられてゐるのが、それを説明してゐるやうに考へられる。この場合、伊勢物語は一名在五中將日記と古來呼ばれてゐたことが無論忘却せられてはならない。筒井筒のたけくらべは又伊勢物語中最も著名な歌物語の一であることも周知の通りである。要するに世之介の方も超凡の誇張されたものとして、多數の意味に解すれば、光源氏と結局相類の形に歸一するであらう。そして源氏物語にも亦男色と視られるものすら含まれてゐるのである。

註一 「忍びく」の御方違所は數多ありぬべけれど(帯木卷)

「やんごとなき御忍所多うかゝづらひ給へれば(葵卷)

「此處彼處に立ち忍びて通ひ給ふ所々は、人知れず數ならぬ歎き増るも多かりけり(同)

二 磯崎所見の業平傳説は、東明雅君の報告によることを附記する。

三 源氏と小君(空蟬卷)、紅梅右大臣の子を中にしての東宮と匂宮との争(紅梅卷)

(三) 年立式傳記體——源氏年立と一代男目錄

一は光源氏の一代記宇治十帖はその續篇である。他は世之介の一代記である。そしていづれも年立式の記述法に従つてゐる。(源氏の原典そのものは年立式を標榜しないけれど)

これは前記の如く既に藤岡博士にも着目された所であるが、同所論中の「或は」の半疑問詞は躊躇なく之を取捨てて差支ないと言つてよい。——特に若し一代男が源氏の翻案であるといふ事實が明白に肯定されれば尙更である。即ち一代男では、

卷一	七	歳——十三	歳	七	年間
卷二	十四	歳——二十	歳	七	年間
卷三	二十一	歳——二十七	歳	七	年間
卷四	二十八	歳——三十四	歳	七	年間
卷五	三十五	歳——四十一	歳	七	年間
卷六	三十六	歳——四十二	歳	七	年間

(岩波文庫本は四十二歳——四十八歳と訂正す)

卷七

四十九歳——五十五

七 年間

卷八

五十六歳——六十

五 年間

となつてゐる。これを誕生から五十二歳までの源氏物語の年立(玉の小櫛すみれ草等の近代のものに限らず、首書本湖月抄本などにも附してあり、又諸舊註に既に每巻源氏の年齒を記してある。)に比すれば、何人もその由つて來る所を首肯し得るであらう。

一代男の目錄が七歳に始まつてゐる(勿論本文には誕生が含まれてゐる。)について、山口氏の説(西鶴好色本研究及び好色一代男の成立)では

今よりなまめかしう恥かしげにおはすれば、いとをかしう打解けぬ遊びぐさに、誰もく思ひ聞え給へり。

とあるのが源氏七歳の時だからとし、<sup>(註)</sup>そして七歳にしたのは餘り早熟過ぎる(その代り此の年から起算して丁度六十歳までが五十四年になる點では都合が好い。)といふのであるが、此の論も成り立ち得るけれども、それよりもつと手つとり早く、源氏七歳の「ふみはじめ」が世之介の「色ごとはじめ」に移植せられたのであるに違ひない。一代男巻一目錄の七歳の冒頭が「けした所が戀はじめ」とあるのでこの推定を有力

ならしめる。そして此の年立の形式からの對比に基づいたとすれば、早熟過ぎるのに強ひて七歳といふ年を擇んだ疑問も相當釋けて來ようし、源氏の本文に即して考へれば、

七つになり給へば、ふみはじめなどせさせ給ひて世に知らずさ、と、賢く、おはすれば、餘りに、怖しき、ま、で、御覽す。(桐壺卷)

といふのを、好色の世界に引直したとみれば、超早熟の疑問は一段簡明に氷解するであらう。首書源氏物語でも寛文十三年延寶元年、湖月抄でも延寶三年の板行で、天和二年の一代男は後者より九年後に世に出たのである。さなくとも、大體の骨子は十帖源氏(寛文元年)をさな源氏(寛文十年)の類からでもヒントを得ることは毫も不思議ではない。全篇を源氏物語に模し、主人公の一生を敍せんとする目的を以て立案せられたのであつたら、さうした所にまで構成の手本が仰がれたことは頗る自然で、寧ろこれによつて作者は新し味のある面白い試と私かに得意ともし、一面それによつて古典趣味の讀者には、源氏への繋がりを示唆し得る好奇的效果をも期待し得たであらうと思はれる。

又山口氏は、七歳から起算して、五十四帖の五十四年、さて六十歳の結末といふ段取

りでなかつたか(好色一代男の成立)と推定し、それから一代男卷一の本文には、五十四歳までたはふれし女云々とありながら、卷八の終末に六十歳になつてゐることについて、それは西鶴の偶然の過失でないとして、

西鶴が世之介の一代記を書いて、事件を七歳から六十歳までの五十四年に配したのは、もとより五十四帖に擬してのことである。五十四帖意識は彼にあつては強かつた。六十の本封がへりの意識よりも強かつた。その五十四帖の五十四が、ふと六十を過らせたものである。(西鶴好色本研究)

と言つてゐるが如何であらう。惟ふに西鶴はそんな複雑な意味を藏した錯誤に陥つたなどいふのではなく、恐らく最初書卸した時の意圖は源氏五十四帖に倣ふ考で、五十四歳としたのではなかつたか。即ち五十四項目を立て、それに五十四歳をあてて敍する豫定であつたのではなかつたか。事實五十四項目といふ點だけは實現してゐる。然るに筆が進んで行く内、もつと年齢がかさむ都合が生じ、一方では源氏の年立で、光源氏の年齢は五十二歳で終つてゐるが、雲隱卷の存在が想定せられてある部分即ち幻卷から匂宮卷までの間の缺けた八年間を加へれば、恰も六十歳になり、これが大凡光源氏の一生の終の年と見る事が出来るのと、源氏五十四帖は又漠然源氏六十帖——天台六十卷に擬したとする考から導き出されて來たのであるが——と

も俗に呼ばれてゐると背反せぬから、どうか却つて都合よく理窟が合せられる爲に、あゝした一代男の年立になつたのではなかつたか、そして少くとも項目の數の上で五十四帖に一致させてあるといふことになつてゐるのではなかつたらうかと考へられるのである。

又一代男の原本には卷五で一度四十一歳まで敘しながら、卷六に再び三十六歳に反つて四十二歳になり、以下四十八歳までを缺いて卷七の四十九歳に續く理由の不明なことに關して、古典全集本の解題に之を疑問とし、

まだ今日まで總べての西鶴研究者が此事に疑を挟まないやうであるから一言して置く。

と述べてあるのは如何にも尤もな疑であると思ふ。岩波文庫本では此の問題を、

作者の誤算なること明なれば今訂正したり。

と簡単に片づけてあるのは早計に失しはせぬであらうか。若し又板本の誤植ならば、作者も讀者も出版後に氣づかぬ筈はない。殊に最初の發足作である以上、西鶴の緊張味も相當あらねばならない筈で、如何に「轉合書」でも、餘りにそれでは無頓着過ぎる。そして誤算乃至誤植であつたら、二代男以下の版行に際してなり、或は他の何等かの方法でなり、それを訂正しさうなものである。そこでこれは寧ろ作者の故意に

出た所ではなかつたかの推測も不可能ではない。その主なる理由の第一は、

(1)これが却つて源氏の年立に倣つた作者の試であつたのではないかといふこと。

即ち源氏の年立にも桐壺——帚木間には四年間の省略があつたり、前述のやうに幻——匂宮間にも八年間の罅隙があつたり、又若紫と末摘花及紅葉賀、或は濡標と蓬生關屋、或は少女と玉鬘の如く年時の重複のある所謂並卷がある。そして末摘花の如き、若紫を終つてから又それより少し前に筆を溯らせ、若紫は源氏十八歳の三月から始まるが、末摘花は十八歳の正月から始まる。蓬生の如きは又須磨・明石の卷の年時に立返つて述べ、そして源氏二十八歳の冬十月からは濡標の初と同年の記述になるのである。

かく觀れば、西鶴が源氏の年立を學んだとするならば一層、卷六で再び三十六歳に立返つても奇とすべきではないのである。これを岩波本の如く訂正することは、卷一以下卷五までと、又卷六も卷七も、いづれも各七歳づつを順序よく並記してゐる點から觀て、及び卷五と卷七との間が此の訂正で年立が極めて合理的に整ふことによつて、頗る都合好き落ちつきを見せるので、明らかなる作者の誤算と即斷するに甚だ自然さが其處に詭へ向に用意されてあつたと言はねばならない。而も此の訂正には

遽に賛同出来かねるといふ留保條件を附しつゝ、上記(1)の想定を補説する事由として、なほ二三の條項を擧げたい。それは

(2) 假に作者の誤算であるとして、それならば前卷の三十五歳——四十一歳と一年づつ食ひ違はせて、三十六歳——四十二歳としたのは、何故であつたか。これには全く作者に何等の有意的な目的は存しなかつたのであらうか。前卷の年立を忘れてゐたとしても、それまでの卷が毎七年の繰返しであることは意識してゐる筈であるから、それにもかゝらず三十六歳としたのは、十分問題になる餘地がある。此の一年の食ひ違ひは果して不注意な過失に過ぎなかつたであらうか。

(3) 世之介誕生から七歳の「戀はじめ」——それが親御の「御よろこびのはじめ」でもあらうが——、それから好色修行始まつて斯の道の「大々々<sup>(註三)</sup>盡」となつたのが三十四歳、卷四の終である。然らば三十五六歳から四十一二歳までは斯道の生活に於ける最盛期であるから、話題も豊富であらうし、二卷に互つても矛盾は無いのである。卷六の終にも「全盛歌書羽織」の章がある。

(4) 次に各卷例外なく七年立といふならばそれで又よいが併し餘りに定式的で變

化が無いが少くとも最後の卷はそれを破つて五年になつてゐる。これは最終の六十歳止まりとするに合はせる爲であつたことはわかるが、さすれば卷六と卷七との間に六年間の間隙があると、一層變化があつて單調から救はれる。西鶴としてはそれぐらゐの變化は試みても珍しくはないやうに思はれる。——殊に源氏の年立に倣つたとすれば。勿論その六年間世之介の好色生活が中止してゐたのでもなければ、それを省かねばならぬ積極的理由も考へられない。これが疑問を懸けられ、ば懸け得られる所ではあるが、此の六年間の記述があつてもなくても、世之介の全生涯に大きな變動が想像せられようとは考へられない。同じやうな生活の連続であるから、年立の上で作者が僅に單調を破らうとしたとしても、あり得ないことではない。世之介の年立を特に目録に置いて相當重視する作者の態度である以上、かう考へることも許されてよいであらう。且卷六の年時を卷五の年時と略、重複と観ることに、内容上には殆ど大きな不都合はないやうに思はれるから。

の諸點である。要するに、若し一代男原本の年立にして、誤植或は作者の誤算でないとしたらば、右のやうな解釋を下す他はあるまいかと考へられる。

- 註一 特に好色一代男の成立に明記してある。
- 二 山口氏は「西鶴好色本研究」(一〇頁)で此の事を語りながら、世之介の「戀はじめ」との関係には言及されなかつた。
- 三 「引矢八幡百二十本社共を集めて、火火大じんとぞ申しける」(二代男卷四、火神鳴の雲がくれ)

(四) 構想上の相似と詞句上の影響

源語知識の幾分でもある者が、兩作品を對比して一讀その類想に或は典據に氣づかしめられる箇所としては、

- 1 卷四「形見の水櫛」と夕顔卷の夕顔上の死並びに妖怪
  - 2 同「夢の太刀風」と夕顔卷の夕顔上の死並びに妖怪
  - 3 卷四「火神鳴の雲がくれ」と須磨・明石兩卷に互る暴風雨
  - 4 卷六「身は火にくぼるとも」大夫の品定と帚木卷の雨夜の品定
- 等が挙げ得られよう。そしてこれは水谷氏(1・2)山口氏(1・2・3・4)等によつて既に屢々指摘せられてゐるところでもある。特に「火神鳴の雲がくれ」には雲隱の卷名を借り、「形見の水櫛」には
- 天にあらばお月さま地にあらば丸雪を玉の床と定め、  
或は

死人を見れば、我尋ぬる女、これほとしがみ付、かゝるうきめにあふ事、いかなる因果のまはりけるぞ…… 涙にくれて、身もだへする……

等の詞句が歴々その原據を語つてゐる。又兩氏の指示してゐない例をも添加するならば、卷一「けした所が戀のはじまり」(目録には「戀はじめ」とある)の

或時はをり居をあそばし、比翼の鳥のかたちは是ぞと給はりける。花つくりて梢にとりつけ、連理は是我にとらすと…… 雲に懸はしとはむかし天へも流星人ありや。一年に、一夜のほし雨ふりて、あはぬ時の、こゝろはと……

とあるのは、やはり同じ玄宗貴妃の七月七日の誓詞から脱化した桐壺卷の構想詞句並びにその原詩長恨歌から出てゐること、論議を要せぬであらう。次章の冒頭に「文月七日」とあるのも、此の聯想を一層強化させる。(なほ臆測が許されるなら、その「鳥」と「花」と、そしてその下文に「身にへうぶきやう、袖に焼かけいたづらなるよせい」とあるの)とから、源氏の註釋書中で著名な一條兼良の「花鳥餘情」の題號をすら想起せしめられる。「花鳥餘情」の古寫本にはその題號の「餘情をよせい」と假名書してあるものが多いことも言ひ添へねばならない。又その「へうぶきやう」といふ香の名も、兵部卿宮か或はそれとも卷初であるから桐壺卷所見の藤壺女御の御兄兵部卿宮から來てゐると推定して差支ないであらう。又やはり卷一「煩惱の垢かき」に至つては、



十三夜の月待宵めい月いづくはあれど須磨は殊更と浪妾元に借きりの小舟……源氏酒とたはふれしもと笑ひて海すこし見わたす濱底に寄りて……

と原典の詞句をそのまま採入れた文詞すらある。又一代男の各章の末文が源氏の巻尾の表現型式に倣つたと推し得られる節があること、後に詳説する如くである。

なほ一代男出現までの間の一般讀書界に於ける源語知識の流布は、前にも觸れた十帖源氏の類の梗概式俗譯書や原典として湖月抄の板行等の事實によつて、相當に認められ得る。それ故に一代男の出現が既に徐々に準備せられつゝあつたと言へるし、従つてそれが興味多く迎へられたことも想像可能であり、又一代男が出て間もなく、其角が東國太郎の匿名を以て吉原五十四君を著して(貞享四年刊)之に倣はうとしたのでも亦、一代男が源氏を翻案した小説であつたことは推知に難くないのである。以上觀て來たやうに、一代男と源氏物語とは十分交渉の有ることが是認せられねばならない。更に尙之を助證する爲に、然らば西鶴は源氏以外の古典文學に、どの程度の知識を有し、又それを一代男乃至それ以外、如何に彼の創作に利用してゐるかを、次に考察してみる必要があると思ふ。

註一 山口圓「浮世草紙概説、井原西鶴(日本文學叢書、近世上)参照。

二 「波たゞこゝもとに立ちくる心地して」(須磨卷)

三 「海は少し遠けれど……」(同卷)「海見やらるゝ廊に出で給ひて」(同卷)

### 三 西鶴の古典知識と西鶴文の古典味

#### (一) 俳諧と古典

リアリストと呼ばれる西鶴を文章の上から觀れば、意外にも驚くべき古典味の横溢したものであることは、甚だ興味深いことである。そして其處には必ず其の由つて來る所のものがなければならぬ。

西鶴が初め宗因に師事した談林の俳諧師であつたことは餘りに有名である。中世以降學問は堂上ならずんば連歌師俳諧者流の手によつて保護せられ相傳せられて來た。古典の註釋や解説書は大抵雲上人か歌學者然らずんば連俳の宗匠がその著者であつた。源氏物語に就いてだけ言つても、河海抄の四辻左大臣善成、花鳥餘情の一條禪閣兼良、細流抄の三條西右大臣公條、孟津抄の九條關白種通、岷江入楚の中院權中納言通勝等の貴族學者に對して、一方には帚木別注の宗祇、弄花抄・一葉抄の肖柏、休聞抄の昌休、紹巴抄の紹巴、萬水一露の宗碩、永閑等の連歌師達がある。湖月抄は即ち鶴が俳敵貞徳の門中、所謂七俳仙の隨一たる北村季吟の著す所であつた。十帖源

氏をさな源氏も亦同じく貞門七俳仙の一、野々口立圃の執筆に係るものであつた。特に貞門では甚だ古典の學習を重んじ、俳諧稽古の必須事とした。俳道入門の教科書として、八代集新撰集伊勢物語狭衣を擧げ、就中「源氏は朝夕の枕言葉」と極論したのも貞門の池田是誰であつた。<sup>(註一)</sup>西鶴は俳諧では寧ろ芳賀一晶を好んだとは見聞談叢(伊藤梅宇の隨筆)の語る所であるが、一晶亦貞門七俳仙の一、鷄冠井令徳の門で、後やはり貞門の片桐良保(初め令徳門)の門人田中常矩の弟子となつた人で、即ち貞徳系の俳人である。談林派の驍將であるながら、一晶を好んだのも面白いし、一面貞門の俳諧にも或よさを見出してゐたことも知り得られる。

西鶴はかく俳諧道の一般教養基礎學習として、相應に古典知識を養ひ、その間おのづから彼の古典趣味が漸次に深まつて行つたらうことは容易に想像出来る。少くとも鶴は宗因よりは古典に興味と意義とを多く求め、且獲てゐたのではなかつたかと思ふ。そして彼は貞門とは違つた方向を旨とした師宗因の談林の流風を承けた上に、更にそれを活殺應化の自在に發揚せしめた獨創的な行き方から、この古典をも唯まじめに學習し傳統せしめるだけに止まらずして、之をより生々しく現代化し、俳諧化し、笑ひとし、遊戯とすることに新たな意義と興味とを見出し、而も散文の世界にそ

れを延長再生させる一大飛躍を敢へてして、近代小説の新體を創始したのである。そして又此の點、同じく杜詩と共に萬葉源氏を宗としながら、飽くまでまじめな古典精神を生かさうと努め、而も正風の大道を創始した芭蕉が、季吟の門から出た貞徳系の人であつたことに對照して、流石に偶然でないことを知るのである。

註一 山口剛好色一代男の成立(江戸文學研究)にも引用せられてゐる。

二 文學昭和十四年二月號に高野辰之博士に詳しく紹介されてゐる。

## (二) 伊勢物語と徒然草

西鶴の學殖は縦へ甚だ高かつたとは言はれぬまでも、少くとも當時の他の俳諧師等に劣るものでなかつたことは肯定し得られる。

此の人吐裏に一字の文學なしといへども(燕石樓志卷之五上冊)

と馬琴が言つたのは酷評であり過言である。もとより馬琴の眼から見れば、問題にならぬ無學であらうが、此の評語は一面紫式部日記に於ける紫女の清少納言及び和泉式部評と同様の半無意識的な嫉視感が底にはたらいてゐると思はれる。兎に角、古典を讀む力も相應にはあり、又その範圍數量もかなりには及んでゐたと推定してよゝのは、やはり彼の作品の上に現れてゐる古典知識の一斑によつて認められ得る。

無論それは大體常識的な材料が多いし、又敏才なる彼は、熟讀と言はんより、走讀しても相應に内容を掴み得る才能は十分にあり得たと察知出来るから、彼の後輩たる秋成や特に馬琴などの學殖には到底比ぶべくもないことはこれ亦確である。

源氏は姑く措いて、彼の作品の繙讀中最も屢々遭遇するのは、「讀して誰も氣づく所であらう」と高野博士にも指摘されてゐる通り、伊勢物語と徒然草とに關する詞句や素材や構想やである。これと並んで相當多いのは、後述の如く古今集源氏及び謡曲である。伊勢物語との關係の密接なことは、藤岡（近代小説史・山口（論講及び江戸文學研究）の諸家も既に論じてあるが、例へば先づ一代男に之を觀れば、

○……手日記にしる井筒によりて、うなるこより已來、卷一、けた所が戀のはじまり（前出）——伊勢物語二十三段

○……机硯石を洗ひ流しすみわたりたる瀨々も、芥川となしぬ。（同、はづかしながら文言葉）——六段

○又冬の夜は、寢道具をかすやうにしてかさず、庭鳥のとまり竹に湯を仕懸て、夜深になかせて、夢覺させて追出し、（卷二、旅のでき心）——十四段

○此時の心は、むさし野にかくれし人もやと、事しづまりて、かの女つれて……（卷三、一夜の枕物ぐるひ）——十二段

○……彼女を負て、筑摩川わたりぬ。其夜は、大霜のふりける。くず屋の軒につらぬきしは、味噌玉か、何ぞと人のひもじがる時……（卷四、形見の水ぐし）——六段

○人しれぬ我戀の關守は、宵々毎の仕事に打て（卷五、後は様つけて呼ぶ）——五段

其の他の作品では、二代男に

○信濃の國に煙の立つ獄あれば（卷八、大往生は女色の臺）——八段

五人女に

○都の富士<sup>(註二)</sup>にも足らずしてやがて消ゆべき雪ならばと、（卷三、人をはめたる湖）——九段

日本永代藏に

○終に行く道を思ひやりける（卷三、國に移して風呂釜の大臣）——百二十五段

世間胸算用に

○又灘の鹽燒は、黄櫨の小櫛もさゝでと詠みしに、（卷五、つまりての夜市）——八十七段（新古今集とも共材。後出）

男色大鑑に

○我朝にもむかし男伊勢が弟の大門の中將と、五歳<sup>(註三)</sup>に餘りての念友（卷一、色は二つの物あらそひ）

西鶴置土産に

○花橋の袖の香も……。 （卷五、知れぬものは子の親）——六十段（古今集とも共通。後出）

○是は夢かや宇津の山を越えて、都の人に逢ふも嬉しく旅の日數を重ね（同）——九段

又名殘之友（團水の擬作或は補作説等もある書であるが）に

○世の中に絶えて櫻のなかりせばと、業平躑躅は交野の原の春やむかし……(卷二、和七賢の遊興)——八十二段四段

等とある。就中例の芥川の鬼一口(六段)は最も常用されてゐる。即ち前出一代男の「形見の水ぐし」の條の他にも五人女に

○思へば昔男の鬼一口の雨の夜の心地して、(卷四、蟲出しの神鳴も揮かきたる君様)

又武家義理物語に

○鳴神も落ちかたしれずをさまり雨もをだやみて、壁下地のしのべ竹に、白玉の取り添ふも物哀れに  
やさしく見えて、むかし男の女をだまし鬼一口にかみ殺されたしと思ひ入りたる闇の夜も、正しく  
こんな面影ならめと……(卷六、表むきは夫婦の中垣)

とも見えてゐる。

それから徒然草の方は「俗つれ」の題名は西鶴の遺稿に書林が(恐らくは門人團水あたりが命名したのであらうが、目録にも卷一の第一章「過ぎて善きは親の意見あしきは酒」の副題中に「兼好が公事相手」の一項が見え、本文中にも

○されども兼好とやらいふ者が若き者の諺に、下戸ならぬこそと異なことを書いて、いひならはせぬ……—徒然草一段

とある。西鶴織留これも遺稿の「本朝町人鑑」と「世の人心」の二部を合冊して刊行する

と、門人團水の序に見えるものであるが、「難波西鶴松壽」とある序が西鶴の自筆と信じてよいなら、その中にも

○思ふ事云はねば腹が脹ると云ふは……—十九段

の一句がある。(その序文の末句に「……これを世の人心と名づけ、難波の吳織織留くわいじりめる物ならし」とあるから、これはその「世の人心」の方の自序であつたのであらう。さう見てやはり西鶴の自序たることを疑ふに及ぶまいと思はれる。)遺著を並べたついでに、名残之友にも

○兼好が作り木を嫌ふ事……。(卷一、第二、三里違ふた人心)——百五十四段

の一節がある。

遺稿でなくても無論直に引例出来る。即ち五人女に

○……足を空にしてと兼好が書き出し思ひ合せて……(卷四、大節季は思ひの闇)——十九段

一代男に

○唇のよみ初、姫はじめおかし。人のこゝろも、うき立ちききのふの事を忘れ、けふも暮れぬ。(卷三、一夜の枕物ぐるひ)——十九段

○大綱に、女の髪すぢをよりませ(卷八、床の責道具)——九段

男色大鑑に